
いちばんうしろの大魔王
ACT7
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばん・うしろの
大魔王
ACT7


「ご命令をいただければ、この魔将軍ころね、
反逆者どもを血祭りにあげて差し上げます」
ころね
クラス：魔術師
HP 200/200
Lv：20
筋力：15
魔力：20
兵力：100000


けーな
クラス：神官
HP 20/20
Lv：10
筋力： 6
魔力：18
兵力： 10000
「……いや、君、意外と楽しんでるだろ」
阿九斗
クラス：魔王
HP 9999/9999
Lv：99
筋力：25
魔力：25
兵力：200000


「封印の地に足を踏み入れることは何人たりともまかりらん」
少女がどこか幼い声をあげた。

いちばんうしろの大魔王
ACT 7

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。ポシェットから秘密な道具を取り出し使用する。阿九斗をからかうのが大好き。
曽我けーな
落ちこぼれな天然少女で阿九斗に懐いている。お米が大好き。魔法は苦手だが空を飛ぶことと姿を消すことはできる。
紗伊阿九斗
将来「魔王」になると（再び?）予言された「善良な」主人公。魔王戦争も一段落したところだが彼の困難は続く。


えとうふじこ
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓った黒魔術師にして薬物使い。学園のマドンナとして君臨するが実は陰謀が大好き。
はっとりじゅんこ
服部絢子
阿九斗に想いを寄せる一途で純情なクラス委員長。伊賀出身の忍者娘でカエルが苦手。
みわひろし
三輪寛
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。阿九斗の発言をいちいち誤解し阿九斗の悪名を高めるのに一役を買っている。
しらいし
リリィ白石
コンスタン魔術学院生徒会長。帽子がトレードマーク。喧嘩っ早く「小さい」と言われると切れてしまう。

大切な家族の自分のことを大切だと思っていなかった。

喜多淑恵は、メギスの神秘家であるの父の下で働きながら、趣味である数学ゲームとプログラミングに没頭する生活を送っていたが、年齢はまだ十七歳にすぎなかった。

五歳の頃に物語の本を読まなくなり、詩の数学の本に興味を示すようになったのだが、それらの著者の作はすべて読み尽くしてしまうと、科学技術の書の論詩を読むために、多くの言語を学び、十歳までには七つの言語を習得していた。その読んだ本によって、学校の授業で習う程度のことはすべて頭に入っていたため、飛び級の制度のない帝国の学校を嫌って〈海外〉で卒業資格を持って帰ってくると、家族の職を手伝う予定だったが、それには魔術の院の卒業資格が必要とすることに、ここでようやく気づいた。

しかし、〈院〉で再び勉強することを時間の無駄だと考えた彼女は、父に頼み込んで助手としての職を手に入れると、自分の望みである〝誰もが自由に生きていくことができる理想の世界〟の実現については、〈政府〉の一員の夢は別の方法によって成し遂げることとした。

とりあえず、淑恵はネットの匿名掲示板に偽名を使って書きこみを行い、議論を仕掛けるという活動をはじめた。多くの論争を起こし、罵り合いに終わることを彼女は知っていたが、それによって名を上げるという狙いはできた。

淑彦という匿名の彼女は、ネット上で有名となった。

どれほど個人情報を特定されても、プライバシーは暴かれないというのが、この時代の人間のあり方である。それを重要でない者だ、個人情報をさらすことと、偶像より素顔をさらすことはタブーであり、淑恵はそれを

たのだ。

「一年ほどで、〈山の彼方〉の宣伝するページは[illegible]を持つようになり、彼の主張、そこで行われる研究がよく知れるところとなっていった。

〈山の彼方〉の主張はみんなでやる無意味を生じるための[illegible]という極端なものだったから、それ自体ナンセンスなものとされたものの、それを達成するための研究、その筋の人の間から注目を集めるものとなっていた。

それは「[illegible]研究」である。

[illegible]俗には[illegible]と呼ばれているくらいで、研究者ですら「なぜかはわからないが、いくらでも広[illegible]に隣接している」と理解されてきた。そして、その中にとどまることは危険とされ、一瞬でそこを通過しての転送あるいは、拠点における[illegible]パニックルーム的な使い方が生まれるものだった。

=〈山の彼方〉は、その[illegible]を制御できるのではないか、と考え研究を続けていたのである。事実その空間の内部の[illegible]よりいくらでも変化するのではないかと疑われるデータはいくつか報告されていた。

そのため、軍事、政治、経済など各分野からその研究は注目を集めていた。空間を自由に利用できるならば、その利益は計り知れない。だが、その研究は彼らにとっては目的のための手段であった。〈山の彼方〉の信条は「そこで生活すれば、一生寝て暮らしていてもいい。[illegible]らそう」というものだった。

その重要性を認識していなかったこと。そして、彼ら自身も不死だと思っていなかったこと。このふたつの原因が相まって、その後かなり思い切った行動を彼らにとらせることになるとは、このとき誰も気づいていなかった。

その日、佐藤悠太は朝から仕事の依頼を受けていた。

それ自体は、珍しいことではない。彼の表の顔は、メギス神に仕え雑務を執り行う事務員なのだから。

待ち合わせの相手は、グルグルを乱れた長い髪にかけ、いくぶんぼんやりとした顔で、佐藤悠太とメギスの神、神殿内部にあるカフェに座っていた。店内は、ギリシャ、風バロック風イスラム風とごった煮でもいうか、多くの

と感じるであろう様式で、壮麗に作られている。メギスの神殿はそういうものなのである。

佐藤悠太の前に座っているのは、いかにもサラリーマンとしか形容できない男だった。グレーのスーツに身を包み、

は刈ってしばらく経ったらすっかり伸びていそうだ。佐藤悠太も名前を聞いたはずだが、それすらすでに

ていた。

しかし簡単な挨拶の後、彼が切り出した言葉に、佐藤悠太は目を見開いた。

「メギス神の神殿を制御するプログラムを作って欲しいんですよ」

佐藤悠太がプログラマであることを公表したことはない。確かに佐藤悠太は神のプログラムについての事務手続きをしてもいたが、

していたこともあり、彼がその道の天才であることを知っている者は少ない。プログラムについて

依頼する者など、いないはずなのだ。プログラマとしての彼の仕事に気づいた者でなければ。

「それってメギス〈神殿の〉正式な依頼」

佐藤悠太はとぼけて答えた。この会社からの仕事の依頼を聞いていた。その依頼は自分宛てのものでなく、神殿宛てのもの

だと解釈するのは当然だった。もっとも、相手の声の調子はそんなニュアンスはまるでなかった

のであるが
「いいえ。あなたさんへの依頼です」
駆け引きをする気もないらしく、サラリーマンはあっさりと言い切った。
本人もあっさりと白状した。元来、面倒くさいことが嫌な性格なのである。
「ふうん。それなら、公式な依頼ははっきりさせてよ。何方からの依頼を聞いて来たんだからさ」
「公式です、政府から、つまり内閣府の仕事です。ええ、極秘なのは間違いないのですがね」
「極秘？ そういうわかりにくい仕事は避けてほしいなぁ。つまり？」
「内閣府のプロジェクトです。あなたさんがあなただと気づいたのは政府です。これでよろしい？」
サラリーマンはにやりとした。
本当に感心してうなずいた。
「おおお。すごいなぁ。気づいちゃった人がいるんだぁ。んじゃ、あなたの正体を教えてくれる？
その笑顔が胡散臭いからさぁ。何かを隠しているっぽいよね」
真面目に遠慮しない性格のまま、ずばりと言った。これにサラリーマンはさらに笑みを深め、ふたつのV
サインをつくった。一般にはかなりふざけているとみなされる態度だったが、本当に面白そ
に笑った。
「あ、大抵の人はこれをやると怒るんですけどね。あなた、珍しいですね」
「いや、いいんじゃない？ 単に面白いからだけどさ」

「そう言ってもらえたのは嬉(うれ)しいですね。いや、そんなのははじめてだ。ところで、こいつはコードネームです。2V(ツーブイ)。そう呼ばれているんです」私

「[illegible]2V。聞いたことあるなぁ」

俺もその名に聞き覚えがあった。もちろん[illegible]噂話(うわさばなし)として。だが、2Vの顔を少しでも表に出すことはない。

「そうです。コードネームで。失礼ですが、まぁ、その名前で大概(だいがい)の場合通るから問題ないっしょ」

2Vの口調も砕(くだ)けたものになる。俺も似たようなもの、面白いという感覚を得たのだろう。

「それでいいけど、どうやって私のことを知ったの？」

「通っている場所から検索させてもらったんですよ。[illegible]けが使える荒技(あらわざ)ってやつ」

「ふぅん。でも、そこまでするからには、私に要求しているんでしょ？何かおいしい話を持ってきているって理解して構わないわけ？」

「もちろん。いい話ですよ。普通(ふつう)ではどうだかわかんないっすけどね」

「私のこと普通じゃないって言い方がショックだなぁ」

「失礼。しかし、事実でしょ？で、いい話というのは、これです」

2Vはマナスクリーンを滑(すべ)らせてきた。俺はそれを顔の前で開き、中に表示された文章に目を通す。

それは、コンスタン[illegible]潜入(せんにゅう)しているスパイからの情報だった。いや、スパイと言っても

な[illegible]で、[illegible]た[illegible]ある。ただ、[illegible]れ、[illegible]ているだけだ。

「ふぉおお　これは……！」

[illegible]驚きの声をあげた。

[illegible]なを媒介として、[illegible]こめ　しかも　[illegible]たという[illegible]それが[illegible]

しているかを瞬時に悟ったのである。

「これは　すごいね　すごいよねぇ」

[illegible]うんうんとうなずく[illegible]である。

「[illegible]きる[illegible]あるらしいってことだ　そして　そのやり方[illegible]　わかりつつある」

２Ｖが言うと　[illegible]即座に反応した。

「この[illegible]なという[illegible]これを生じさせているというわけか」

「そのようだ　[illegible]することができるらしい。[illegible]コピーすることができれば……」

２Ｖは言ったが　[illegible]すでに頭[illegible]せていたゴーグルを下ろし　２Ｖの[illegible]思索にふけって

いる[illegible]った　なにやらぶつぶつとつぶやいている。

「ふぉおおぉ、これは面白くなるぞぉ。　アイデアばりばり浮かんじゃう。　プログラムを[illegible]

て　みんながごろごろ寝ころんでいられる[illegible]って作るんじゃないかなぁ……」

２Ｖは肩をすくめ　自分の連絡先を書いたマシンスクリーンを[illegible]滑らせた。

「やる気[illegible]もうあると思うけれど　念のため連絡よろしく」

そして２Ｖはその場を去った。

いや、確かに2Vは「本体の意識が肉体を去った」のではなかった。

複数の分体に意識を移すかのごとくに、自分の意識を分散させる2Vは、別の分体に意識を移したのである。

複数の分体――つまり自分の意識のない人形――を操るのは2Vの得意とする術であり、自分の意識を移していない分体をそれほど複雑ではない自律動作をさせておくことも可能であった。

今、2Vが意識を移した分体は、先ほどから立ち尽くしていた個体である。白衣の研究者のような風貌の機械。その周囲に配置されたスチールのラックに囲まれた、狭い研究室で待ち続けている男の研究者の発見を待っているのだ。

白衣の男の体の機械はスクリーンに表示された数値を読み取り、振り返らずに声をあげた。

「で、2V。こいつが魔王の肉体の細胞だって？」

「そういうこと。本物だと思うよ。そいつが発する微弱な魔力に気をつけてってのは前もって言った通り」

2Vはそう言った。この男の顔はほとんど特徴のないサラリーマン風のものである。

魔王の細胞というのは、魔王との戦いの際に、通称CIMO8のメンバーであるラバーズというコードネームの魔王であるとされる紗伊阿九斗から採取された細胞を盗み出し、それを保存していたものである。

「魔獣を使役するためにしか役に立たないだろうな。だが、面白いことがわかったよ」

白衣の男は振り返ってマナスクリーンを2Vに向かって指差した。

彼はCIMO8の一員である。彼が指した画像には細胞の魔力データが記されている。

「この細胞の動きパターンに見覚えがあったので、調べてみた」

「それで、どうして俺に聞いたんだ？　データを読めばわかるってのかい？」
「相変わらず生意気な奴だな。データくらい読める。だが、解説しないとわかりにくいのも事実だな。そこが悪魔が生まれた場所だ」
「生まれた場所？　あいつも人間だったってか？」
「そういう意味じゃない。『新種の悪魔』ということだ」
それを聞いた２Ｖは、口笛を吹いた。
「わお。あれって世襲制だったもんな」
「茶化して不謹慎なことを言うな。腹が立つ」
「いや、わかってる。わかってる。つまり、あいつは誰かの作った悪魔だってことだ」
「そういうことだ。現実の悪魔というのが、遺伝子に組み込まれた爆弾なのか、人為的な突然変異なのかはまだわからないが、あの悪魔が発現するように作られている状態の化物が生まれた場所がそこなんだ」
「なるほどね……。今もそこにいるってのか？　え……と、その悪魔の生まれた場所」
２Ｖが聞くと、白衣の男は首をひねった。
「おそらく。結局、そこで生まれた。まあ、そうとしか言えないな。メギスの研究ファイルにはあるかもしれない」
「へぇ。そいつは面白くなってきたなぁ」
「金になりそうな香りがするかい？、結局目的はそこなんだろ？」

「いやいや、もうちょっと面白いことになりそうだ。何にせよ、もうちょっと待ってくれ。面白[illegible]
せそうになってきた」
2Vはにやりとした。

1　どっきり健康診断

阿久斗は健康診断に良い思い出がない。

もちろん、昨年の健康診断の結果、職場の将来の職業が魔王と判定されたことが尾を引いているのである。

「今日、抜き打ちでってのも、妙な話やんすよねぇ」

受付の健康診断の列に並んでいると、隣に立っていたヒロシが言った。

「確かに気になるよね」

阿久斗も応じた。

どういうわけか、今日の朝になっていきなり健康診断があることが告げられたのである。従業員たちは戸惑いつつも検査を受けている。朝一番の男から順に並んで、今のところの列の途中までが終了したところだ。

「採血もあるのか」

阿久斗の前に並んでいた従業員が、右腕を摘んでいた。採血の注射針の跡などの血が採られている。

「アニキ、採血は苦手なんすか？」

ヒロシがニヤニヤしながら聞く。

「そりゃ、痛いからね」

素直に返す阿久斗である。

そういう答えを予測していなかったヒロシは、さすがに呆然(ぼうぜん)とした。

「アニキって、確か自分から高温プラズマに飛び込んだり、自分の腕(うで)を引きちぎったりするキャラですよね？」

「痛いものは痛いんだよ」

「え？」

そうこう言っている間に、阿久津の番が回ってきた。差しだした腕に針が刺(さ)さると、阿久津は痛そうな顔をした。

「い、痛いんすか？」

ヒロシが聞く。

「痛いよ」

淡々(たんたん)と阿久津が答えた。

そんな小学生のようなやり取りはあったものの、男子の健康診断そのものは何事もなく終わった。

「いや、何もなくて良かったよ。最近、いろんなことがありすぎて、急に陰謀が絡んで、何かたくらみがあると思ってしまうようになってしまったよ」

服を着た阿久津は、女子の検査を待つ時間を外に出て、ヒロシと時間をつぶしていた。

「確かに、アニキがらみだと事件が起こってもおかしくないっすよね。いや、むしろ起きないとなんか足りないっていうか」

「何も起きないのが、嫌(いや)だなぁ……」

阿久津は肩をすくめた。

と、その時、阿丸兵は後方に不審な人影を認めた。ヒロシに目配せをすると、彼もそれを認めてうなずいた。

「やっぱり何か起こるっすね」

「冗談じゃない。でも、放っておくわけにいかないしね」

人影はこそこそと隠れるように移動していた。公園の茂みから校舎の柱の陰へ。どうやら二人組

阿丸兵とヒロシは二人組の人影に見つからぬように移動を開始する。

二人組はどうやら姿を隠すための迷彩マントを使用しているらしかった。完全に姿を消すことはできないも

ののマントが周囲の色に同化して、それに近い色に変化するというアイテムだ。

「あっしが回り込むっす。アニキはあっしがあいつらを脅してから、どんどんとやってもら

れば」

ヒロシが耳打ちする。

「どんっとやるのはどうかと思うけれど、まあ、逃げられないようにしてから話を聞くべきだ

とは思うから。それでやってみよう」

阿丸兵はうなずいた。

ヒロシが大きく公園の茂みを回り込んで人影の側に移動。そして、遠くから阿丸兵がうなずいて見ると、タイミングを計っ

て、魔術によるサイレンの音を立てる。

「うわぁああ！」

驚いて声をあげたのは、フードマントをかぶっていた組員である。慌（あわ）ててヒロシとは逆方向に走り出す。被っていたマントのフードがずれ、彼の体の特徴をおぼろげながらも映し出す。

組員は逃げだそうとしたが、その前に立ちはだかったのが阿九里だった。

「待て、逃げるな。何者なんだ？」

いきなり目の前に現れ、短く言い放った阿九里を見て、組員は慌てた。完全に我を失ったと言ってもいい。

「うわぁあ！　出たぁあ！」

組員は悲鳴を上げて、考えもなく阿九里に魔法の光弾（こうだん）を撃ち放った。

「畜生（ちくしょう）！」

阿九里は瞬時に両手を上げた。彼（かれ）の悪い癖（くせ）といえばそれまでなのだが、魔力（まりょく）の制御が苦手なことには定評がある。しかも、他人から攻撃（こうげき）された際は、防御（ぼうぎょ）するよりも、より強い攻撃で打ち消そうとしてしまうタイプである。

その結果……。

凄（すさ）まじい光とともに、爆発音（ばくはつおん）が周囲に響（ひび）き渡（わた）った。組員の撃ち放った魔法の光弾を、阿九里の放った光弾が吹き飛ばしたのである。さらに阿九里の光弾はそのまま勢いを殺さず、組員に向かって行く。

——しまった……！

阿九里は組員を傷つけまいと、咄嗟（とっさ）に光弾を周囲に散らす。

組員は顔を覆（おお）った。その人物の身体を中心にリング状になったエネルギーが、組員の横を通過して行く。

倉庫の壁面（へきめん）にリング状のエネルギーが弾（はじ）けた。

一瞬、顔を覆ってしばらく硬直した。そして痛みがないことに気付くと、自分の身体に傷がないことを確認し、胸を撫で下ろす。

真知子はほっとした。どうやら怪我をさせずに済んだようだ。

「驚かすつもりはなかった。だけど、エレメントを使うなんて……」

が、そう言いかけた真知子の言葉は途中で止まった。地鳴りのような妙な音に気付いたからだ。

――え？　なんだ……？

その疑問はすぐに解消された。

体育館の壁が、紙のように倒れてきたのである。リングが失くなったエネルギーの当たった位置が、綺麗にひびが入っていた。壁は円形にくりぬいた形になってしまったわけだ。

紙一重で飛びのいた。

壁が倒れ、ずん、と低く重い音が響く。一瞬、真知子はあまりのことに言葉を失ったが、それだけで終わりではなかった。

[illegible]の裸の少女が現れた。

いや、正確には現れたわけではなく、女子更衣室の壁をぶち抜いてしまっただけだ、と真知子が気付くまで、しばらくの時間を要した。そして、何が起こったかを認識するまで時間がかかったのは、裸の少女たちも同じだった。

たっぷり数秒ほど硬直して、前を隠さずに惜しげもなく裸体をさらす

「そうか……覗き(のぞ)だったんだ……」

それを見て　阿見氏が何をしようとしていたかに気づいた　だが　それはこんな時に言う言葉ではなかった

「きゃあああああああああ！　いやぁあああ！」

何倍にも重なった悲鳴が部屋の空気を震(ふる)わせた　様々な物が阿見氏に向かって飛んできた　阿見氏はそれを手で防ぎつつ、謝(あやま)ろうとするが　それを一際(ひときわ)大きな声が遮(さえぎ)った

「紗(さい)阿見氏！、貴様よくも抜けぬけと！」

裸の上に急いで上着を引っ掛けて羽織った少女が　握(にぎ)った木刀の切っ先を阿見氏に向けていた　服部絢子(はっとりじゅんこ)である

「いや　これには事情が……」

「壁を壊(こわ)すほど大胆(だいたん)な手法で覗きをやることに何の事情があるか！」

「話を聞いてよ　僕(ぼく)は覗きをしようとしたんじゃなく……」

「さっき自分で覗きだったんだと言ったばかりではないか！　壁を壊すほど大胆不敵で、覗きという目的を持った男の変態な　あれは！」

「だから　覗きは僕じゃなく……」

阿見氏は周囲を見回した　しかし　状況(じょうきょう)を説明してくれそうな幽霊は　もうどこかへ逃げ去(さ)った後だった　ヒロシですらそこにはいなかった

「あれ？　いなくなってる……」

「何をとぼけたことを言っているか！」

「とぼけていないよ。ここにいたんだって……」

「[illegible]」

納得[illegible]木刀を振るった。阿呆はそれを避けることができなかった。魔力の乗った木刀は爆発(ばくはつ)とともに阿呆を窓の外へ吹き飛ばし

た。

。

「[illegible]したのは、怪(あや)しまれるような気もしたけどねぇ」

そう言って、淑恵(よしえ)は[illegible]のまま校庭を歩いている。

その傍(かたわ)らには、[illegible]を歩いている。[illegible]ない[illegible]からするに、これは2V(ツーブイ)の[illegible]。手に持ったトランクを軽く叩(たた)き、にやりとする。

「あとは逃げればいいだけなのだから、問題ないでしょ。目的のものは手に入ったんだ」

「曽我(そが)[illegible]なの、血かぁ」

淑恵はつぶやいた。

「こんなタイミングで良[illegible]行われるとはね。簡単にコトが進んだものだ。では、これはこちらで持

ってサンプルは後で送り込んでよろしく」

２Ｖが言うと、彼女はうなずいたが、ふと後方を見る。足音を聞きつけたのだ。

「何かあったのかな？」

彼女は気にするが、２Ｖは首を振った。

「いけないね、こういうときは自分以外のことは気にしないものさ。いや、といってもあなたは

けなの顔を見たかっただけだったっけ。ホントに野次馬根性が強いなぁ」

２Ｖは少し考えた後、うなずいた。

「私はこのまま帰りますんで、ご自由に。とはいえ、誰に聞かれても私の居場所は吐かないように頼みますぜ」

そう言われた彼女はうなずいて、後ろの方に向かって歩きはじめた。

好奇心が強い面がある。それが彼女の行動を支えているのだ。やがて彼女が発見したものは、[illegible]せるものだった。

体中から煙をたちのぼらせている男の姿が、その中に倒れていたのである。

「つまり、どういうことが起こってこうなったのかな？」

彼女は男を見下ろしながら言った。

男は顔をあげた。

「……説明すると非常に複雑になるんだ。ともかく、僕の体は問題ない」

そう言って阿九は立ち上がった。細い傷がいくつも体中についている。額からは絵に描(か)いたように一筋の血が流れて
いる。
「それで大丈夫(だいじょうぶ)とは、やせ我慢(がまん)としか思えないけどねぇ？」
悠志はもっともなことを言った。が、阿九は首を横に振る。
「当然そう思うだろうけれど、生まれつき体が頑丈(がんじょう)にできているんだ」
「生まれつき？」
悠志は着ていた衣服を破いて、阿九はしゃがむように手を添えた。
「服を破ることはないんじゃあ……」
阿九は戸惑った。が、悠志は何事もなかったようにうなずく。
「衣服は上等すぎないからねぇ。そもそも私のものじゃあないんだよ。気にしなくていいから」
「聞いてみれば単純な話ね」
阿九は納得(なっとく)してしゃがむ。そして初めて悠志の顔を凝視した。
一見たときは気が付かなかったが、顔立ちはかなり整っている。気が付かなかったのは、全パーツに派手なところがなかったからだろう。地味ながらじっと見続けて良さに気付く、そういう顔だ。
それほど手入れされていない髪(かみ)に、ゴーグルをひっかけている。マナスクリーンはどこでも使用で
きるのだから、わざわざそういう投影(とうえい)装置を使っている人は少ない。それが彼の性格を表しているようだ

った。四角い刃をカスタマイズした装飾的な代物を使うのが流儀なのだろう。そう思うと、彼女のいかにも――といったたたずまいも納得できた。

彼女は懐から布を取り出し、頬に付いた血の汚れを布であて、ぬぐってから、ぐいと颯也の顔に顔を近づけた。

「と……」

颯也は思わず顔を引いた。

「動かないでくれる？　よく見えないんだよねぇ」



興味津々な様子の柚恵は、阿九比の顔を手で押さえた。息がかかるくらいの近さにいるのだが、さして気にする
でもなく柚恵は阿九比の顔を間近から観察している。
「な、何を……」
阿九比が顔を赤くして声を上げたとき、柚恵は「ふぉおお！」と声をあげた。
「おおお、傷が治っていくよ！」
柚恵が阿九比の頬に指を這わせた。見る間に消えていく傷を指でなぞる。
「すごいねぇ、リジェネって継続回復ってやつ？　それにしてもすごいなぁ。ねぇ、これって生まれつきのものなの？」
「どうやら生まれつきのようだよ。僕は人より頑丈にできているらしい」
「すごいなぁ、興味深いなぁ」
柚恵は目を輝かせて阿九比の顔をじろじろと見る。
「照れるよ。勘弁してくれないか……。それに、リジェネって何？」
「おおお。失礼、いやぁ、興奮しちゃって。お恥ずかしい。リジェネっていうのは、ゲームとかで
ていく奴。よく使う用語。ゲームはしない？」
柚恵は顔を離して、阿九比に笑いかけた。
「したことないなぁ。いろいろ忙しかったからね。楽しいの？」
阿九比が聞くと、柚恵は大きくうなずいた。

「そりゃあもう！　最近は流行ってないけどねぇ。やっぱりゲームは文化だと思うわけよ。昔からある種目だし

ゲームは一日一時間でっ、てのがあるくらいで」

「それって、どういう意味？」

「どう頑張ってもゲームは一日一時間でしかできないから大切に遊ぶなぁって意味。まぁ、そのくらい楽しいも

のだってこと」

「そうなんだ。それは一度やってみるべきなのかな」

「そうだよ。絶対やろう」

恵は力強く断言した。

「それはいいことを聞いたな」

純太はうなずく。それを見た恵は、感慨深そうにうなずいた。

「いいねぇ、感じてくれた人は君がはじめてだよ。普通は引くんだけど」

「引く？」

「いやね、男の子から声をかけられるでしょ？　お話しようっていうから、ゲームの話をするでしょ？

そうしたら、段々遠ざかっていくわけよ。ほんとに段々と距離が離れていく。ひどいのになると

たら自分からこんな子だと思わなかったって言うんだよね」

妙な悪意こもった一言の罵倒に恥ずかしさを覚えることもある。その一言の内容は要するに、自分がどれだけ痛いかを自慢するもの

のようにも思えたから、そこまで話を大人しく聞いていた人でも、ほとんどの場合ここで離れていってしま

うだろう。

しかし、阿丸九は力強くうなずいた。

「わかるよ。僕も昔バイト先輩でそうだった。女の子から話しかけられて、しばらく話していると、そんな大人とは思わなかったって言われるんだよ」

「ふぉおお！　いいね、わかってくれる人ははじめてだよ！　ねぇねぇ、君名前なんて言うの？」

北大路恵は身を乗り出した。

「阿丸九」

阿丸九は言うと、その手を北大路恵が握った。

「北大路恵、いいねぇ、君今度、ネットでゲームやろうよ」

「いいけど、いつ頃に？」

「明日から一週間くらい、ぶっ通しはどうかな？　作業をやりながらでもできるから大丈夫」

北大路恵は無茶苦茶を言ったが、本人としては至極普通のことである。スクリーンの片隅に常時ゲームを走らせておくくらいのことはいつもしている。

しかし、この点においてのみは、阿丸九は不承知であった。

「いや、それは僕は難しいかな。授業とか、生活とか、他にもあるし。ところで、人生良いということは自由時間る

その作業中それほど暇ではないでしょう？」

そう聞かれて、雄太は、ここに来る前に思い出していた。地球出身なのか、と。日本という異世界の異なる環境から転移して来たと言うわけにはいかない。それ自体が違法というか、人の理解が得られないわけだからだ。だが、自分の職業については嘘をつくよりは本当のことを言っておいた方が良いと雄太は判断した。

『時空神の神殿で事務の仕事をしている』というところかな。普段はメギス神の神殿で事務作業をしているんだよ」

阿九は感心した様子で、雄太の顔を見返した。

「えっ、私と同じくらいの年齢だよね？」

「猫耳族で学校を出たんだよ。そのため年齢を偽って働く必要はないんだけどね。正直、面倒になってしまって」

「優秀なんだね」

阿九は感心したように目を見開いた。

雄太は思わず苦笑をする。

「よしてよ。学校の勉強が面倒と感じる若者はこの国では珍しいことじゃないことになっているでしょ。いや、猫耳族も優秀ではないかなぁ、結局の自分の好きなことしかしたくないというのは。どこであっても歓迎される存在ではないんだよね」

「好きなことって、ゲーム？」

「それもあるけど、面倒なことが嫌いなんだよ。暑苦しいことが嫌っていうか、やる気がある人が嫌いっていうか」

雄太はそう言いながら頭をかく。

「そういう感じは少しわかるな。あれだよね？、本来出来ないようなことに血道を上げたり、やたらと無駄にお金を使ったり」

阿死は言うと、ますます興味の目を輝かせた。

「君ますますこれだ！って感じがする人だよ！　そうなんだよね。そういう理由のない行為が嫌な
んだよ。理由があるならいいんだけどさ。犯罪とか喧嘩とかしたがるタイプがわからないんだ
よね」

「そういえば、他人を傷つけようっていうのは、みたいに物が足りないわけじゃない。理性では、要するに
の反応を見ていっていう行為だね。わかるよ」

阿死も納得してうなずく。

ますます興味の矢継ぎ早になる。

「わかってるねぇ！　だから人間好きが強くても、理解できなくってさ。出会って挨拶をしたら、それ
、上手く何かある？　そりゃあ、その人と会話ができればいいけど、大抵の行為を求める人って無理だからさ」

「それもわかるな。つまり、それって……」

それから俺と阿死は恋愛について話し合った。恋愛感とってそれははじめての経験だったし、阿死にとってもそうだっ
た。妙に間がずれた会話を交わす二人は、まるで他人の関係ではない甘い雰囲気も見えたし、微妙に共感した顔つきあわせて
いるところは、時に分かれ道が判断がたくて、お互い話を続ける恋人たちのようにも見えた。

二人は時間を忘れていたらしい。やがてチャイムが鳴ったとき、はっとして周囲を見回し、顔を見合わせて笑った。

「いやぁ、君に会えて良かったよ。社交辞令じゃなく。また今度、連絡してよ」

「ありがとう。僕も楽しかった。それじゃあ、急がないと」

浅悠と阿北は握手を交わした。

二人はそれぞれの別々の方向へ歩きはじめ。それからしばらくしてお互いに連絡先を交換していなかったことに気づいた。

——いや、問題ないか。すぐ会えるような気がするし。なにしろ、こんなに気になる人ははじめてだしねぇ。何かあるよ、これは。

彼は満足そうに考え、ひとり満悦にうなずいた。

○

《長官、追跡は順調でありんすよ》

妙なまりのある口調の、音声が届いた。

ここはコンスタンツ湾岸地区である。当然ながら音声を受け取ったのも彼女である。

小粋な帽子の小柄な少女——リリィ・白石——が、マナスクリーンを前にうなずいた。

「油断するな。相手は吸血鬼だからな。どこでどう逃げられるかわからん」

《こちらも目をして、蝙蝠をぎょうさん飛ばしておりますさかいに。まぁ、大丈夫とは確証できまへんけれども》

「見つけたら殺せ」

[illegible]。しかし気位だけは高くリリィは言った。

《勘弁して欲しいでありんすよ……》

先程から会話に出ているのは、四国の大竹美智恵である。リリィが見ているマナスクリーンに映し出されてい

る彼女は、今の四国を率いているらしい。元精神科医の悪意という吸血鬼めいた男。彼女は、その見かけ通り、蝙蝠を飛ばした偵察能力に長

操るのを得意としている。

蝙蝠は会長に命じられて2Vの追跡をしているのである。有楽町の街を飛んでいてもそれほど気にならない蝙蝠

尾行には最適であった。

「2Vの本拠がわかるとは思わないが、尻尾の端くらいはつかませてもらう」

リリィはそう意気込んでいた。

西野が知ったのは最近である。リリィの父はメギスの神官であり、2Vが[illegible]働きかけた『西野』の情報を手に入れることの

できる立場にあった。2Vはメギス内部に関する機密情報を入手するつもりであった。だから、どうしてもメギス

の協力を必要としていたのだ。それに、そもそもが魔王排除を唱える急進派の後押しがあっての西野である。

隠密行動を得意とする2Vといえど、焦りばかりは情報を表に出してしまっていた。

そして、その[illegible]だけなの細胞（さいぼう）を手に入れ、そこから生まれる[illegible]を利用して[illegible]を封（ふう）じる——を知ったリリィは、急遽（きゅうきょ）健康診断（しんだん）を開催（かいさい）し、罠（わな）を張ったというわけだった。そして、2Vは[illegible]けなのを求めてやってきた。その後はわからないものの、[illegible]けなの血を持ち出した者が[illegible]ればよかった。

今のところは2Vは[illegible]罠にかかってくれている。

《長さん、[illegible]の物を手に入れましたえ》

[illegible]はそう報告した。

「[illegible]まで追いかけられるか？」

《努力しますえ。ただ、[illegible]の物は帝都（ていと）の[illegible]でありんす》

「[illegible]で割り出せ！」

《[illegible]……。まぁ、がんばるでありんすよ……》

[illegible]はしばらく[illegible]と言い残して、会話を打ち切った。

「さて……。もう一方の女はどうなったかな」

リリィはつぶやき、会話を再開した。マナスクリーンに、今度は[illegible]の少女の姿を映

《あ。長さん、[illegible]に話し込んでいたですが、さして苦労なく居所がわかりましたぎゃ》

そう言ったのは、神山（かみやま）カンナである。狼（おおかみ）の[illegible]を持つ[illegible]で、今はその嗅覚（きゅうかく）を活（い）かして、[illegible]っていた。

「ありがたい。だが、そちらは〈裏職業〉を持っているというわけではなかったからな。正体さえ割れ
ば仕事は特定できる。問題は怪しい行動をしなかったかどうかだ。今朝の件は何を話していたんだ？　彼のことを探
ろうとしていたのか？」

《そんなことはないようだったぎゃ。どうも偶然居合わせたみたいだぎゃ》

「じゃあ、偶然出逢ったとでも？」

《そうだと思うぎゃ》

「……あいつは目立たないな。そもそもターゲットに自分から接触する危険を冒す奴はいないか……。ど
もあいつの被害妄想だけだと思えてきたぞ。そのせいでろくなことにならないってのはや
めてくれよ……。まぁ、あいつがくたばろうと問題ないが、これはボクの個人的な復讐なんだ
からな」

リリィはつぶやき、目つきを厳しくした。

○

《データさえあれば分かるかい？》

2Vが聞いた。

「できそうだよ。人体制御というものは、誰一人同じものはないからねぇ。機械の数値調整だけなら普通にやって
ないしさ、人体の顔を合わせなくて大丈夫って相棒やん？」
けなが言った。2Vがけなの体内に運び込んだ電気を自ら演算で行っている。人間の脳を模した擬似的な電子頭脳が設置されているのだが
その動力を調節し魔法を行っているというわけだ。
「けなを介して魔術を行使できるよ。けなに自動魔術……思いのままに変化させる、というものだと言ってい
いんじゃないかな」
その声からは苦笑のようなものが感じられた。それに気づいた2Vが問
《それにしても、君はどうしてその世界を変化させることにこだわっているのか聞いてもいいかい》
「思い通りに世界を変えられるなら、人はそこでだけ暮らしても良いんじゃないかと思って。楽に暮らせるよ。
というかエネルギー供給については研究しないといけないとだけど、そこは自動化できる装置を用意すればいいしねぇ」
けなが二人の空間に仮想でいくつも展開したマナスクリーンに忙しく指を這わせながら答えた。
プログラムを書き換えながら、少しの間が空くと仮想で置かれた飲み物を取って飲む。汗をぬぐうタオルも「ご
グルのメンテナンスキットもすべてが、座ったままで手の届く位置にある。孤独な作業に慣れきった手
つきで快適な独自作業空間を生み出していく。
「つまり人間の脳をさらけだしても生きていける空間があれば、疑似的な制約のない生き方も可能になるよね。それ
そが人間らしい生き方と言えるのかもしれないんじゃないかって。そゆこと」
その思考は2Vに向けられたもののはずだったが、やがてそれは独り言に似た何かへと変化していく。

「いやぁ、ホント、私はこの実験はありがたく思っているよ。これまでみんな、私の研究は注目しても、ほとんど誰も私の主張を無視してきたからねぇ。気持ち悪いとか、存在価値がないとか言われて。物理法則ではどのようなことが可能になるかわかれば、ゲームみたいな暮らしができるわけだからね。とりあえず、身体能力を変化させるのに人体に当えてみたりしたし。この中に入った者は、いわば、ゲームのデータのひとつになるってわけ。自分のデータを書き換えることのできるデータなんだけどね。つまり、ここで自分の意思で肉体を超えて成長することができちゃう。ゲームのキャラになれちゃうんだから。そんなの、体験したら、みんな私に感てることとわかってくれると思うな」

彼はさらにプログラミングのスピードを上げた。

《それはそれは》

そう言った2Vは、独りほくそえんだ。

今、笑みを見せたのは、2Vの本体である。彼は、林立する無数の高層ビルの中の何もない部屋に寝ころんで、いくつものマナスクリーンを眺めている。隣の部屋の人間すら知らぬこのマンションで、2Vは本体を隠して暮らしている。

2Vは漠然と、自分の境遇が似ているのではないか、と思った。2Vの本体は、まだ未成年の少女である。そしての優れた能力をあらゆる権威から認められずに生きてきた。

——しかし、自分の内の何かを実現することは、この現実世界でも可能だがね。そういうことをわかってないんだから変わり者だって言われる。

そういった意味では、この人の考えは違っていた。そして最も違うのは、最終的な目標であった。

――どうせ手に入れるなら、[illegible]んでつまらない。[illegible]、[illegible]を[illegible]して[illegible]ることだけが[illegible]

充実（じゅうじつ）というものさ。

2Vは、これから[illegible]ことになる。[illegible]は、[illegible]ていたからだ。


NOW
ポテチ
コンソメ

――それに、期待以上の快感ってのは、予想を裏切ってやるのが、刺激的でいい。

にやり、として、2Vは細い指先を自身の背後に這わせた。

2　ゲームの世界に行こう

「あーちゃん、ファンタジーっていいよねぇ」

いきなりそう言ったのは、けーなである。

何の脈絡(みゃくらく)もない一言であった。なぜなら、ここは早朝の阿久戸(あくと)家の部屋からである。けーなはいつの間
ら潜入(せんにゅう)し、しゃもじでおひつから白米をすくっては口に運んでいた。

「何を言っているのかよくわからないんだけど」

ベッドに身を起こした阿久戸丸は、勝手に人の部屋に入り込んでごはんを食べている幼なじみという異常事態は戸惑(とまど)わず、あくま
で冷静に対しての問いを返した。勝手に来て白米を食べられることには慣れているのである。

「ファンタジーだよ。あーちゃん。剣(けん)と魔法(まほう)だよ」

もっしゃもっしゃと白米を食べながら断言するけーなである。

「僕(ぼく)はいつもやっているよね？」

阿久戸丸は首をひねった。

しかし、けーなはしゃもじを立てて左右に振(ぶ)った。

「ちちち。そうじゃないのですよ、あーちゃん。ファンタジーは異世界からやってきた勇者に囚(とら)われ
のお姫様(ひめさま)なのですよ」

「まぁ、それは真実はいないか」
阿久比はどこか違和感を覚えつつもそう言ったが、そのとき、それを遮る声が上から降ってきた。
「自分たちの特殊性をいろいろと認識していない千葉ですね」
よいしょ、と言い、高い位置にある戸棚から降りてきたのは、因幡こころねである。阿久比の監視をするという教
より受けて任務に就いているのだが、最近はどうにも阿久比に興味津々。
「それはそうなんだけどね、大方、また昔の本でも読んだんだろう」
阿久比が言うと、けーなは首を横に振った。
「違うのですよ。面白いゲームがあってね」
最近よくゲームの話を聞く、と阿久比は思う。
——そういえば、あの子の続きを聞いていなかったな。ゲームでもやってみれば見つかるかもしれない。
「どんなゲームがあるんだい？　興味はあるんだけど、僕はまだやったことがなくて」
「やってみたのはこれだよ」
けーなはマナスクリーンにゲームを表示した。制作者は、淑彦という人物らしい。
「ほら、これ。お米みたいに面白いんだよ」
けーなは言って、少し操作してみせた。この時代のゲームは、映像や体感が、ストーリーや内面的な方向から進化していない。目新
しいと思う要素がそうそう変化するわけではないというわけだった。

「お父さんみたいに面白いってのがなんだかわからないんだけど……。賭ければ賭けるほど面白いって感じ？」

「やだなぁ。お父さんは面白いよ？」

「……いいや、ともかく、どんなゲーム？」

「別世界のマナスクリーンを覗き込み、ファンタジー世界を冒険するオンラインRPGだが、特殊なのは軍隊を指揮して戦闘できること。プレイヤー以外にも多数の軍隊を用意して、最大限に組み合わせて勢力を増やせるのが特徴だ。」

「つまり戦略っぽいけど？」

「うん。だけど、別に指揮官になる必要とかないの。さらわれたお姫様なんて、さらわれているだけで、家来が助けにきてくれるから」

「さらわれているだけでって、現実だとすごいけど、まぁ、ゲームだからか……。ん？　それって、自分がさらわれたせいで勝手に戦争が起こるってこと？」

「そうだよ」

「そういうのが面白いのか」

なんとなく納得はした所もある。

「朝からゲームの話をしにくるというのもすごいですね」

ころねが言うと、思い出したようにけなが手を叩いた。

「そうだ！　実は、生徒会長さんが、今日は朝からいないんだって。だから、あーちゃんが仕事するようにって言いに来たんだよ」

「の役人たちがいるんじゃない？」
「それが、役人さんたちも。昼間はそれどころか、ヒロシくんまでかりだされているんだよ。なんか、昨日の夜のうちに呼び出されてた」
「そういうことならしょうがないな。何があったのか知らないけど」
純一は立ち上がり、着替えるから外に出ていてくれ、と言おうとして、ふと、あることに気づいた。
「でも、なんで君がそれを伝えに来たの？」
「ゲームで徹夜していたから。朝方出て行こうとした村長さんに偶然会って」
「……そう。眠くて大丈夫なの？」
「うん。ご飯食べたら少しくらい寝なくても大丈夫なんだよ。それに、眠くなったら授業を抜け出ければいいだけだし」
「相変わらずずいぶん自由だね……」
それから、けなを外に出し、純一は寝間着の上を脱ぐ。
と、いきなり後ろから声をかけられた。
「こんな風に誘惑されるとは思ってもみませんでした」
「うわ！」
振り返ると、ころねがすぐ後ろに立っていた。
「そ、そういえば、君に出て行ってもらうのを忘れていた」

「もはや一緒にいることが自然体。まさに夫婦のような関係と言えますね」
「なにを下らないことを……。それにいつも春香の時は自分から出ていってくれてるじゃないか」
「それがですね、先程の話で気になることが」
普段からからかう以外の干渉をしてこないころねがそのようなことを言うのは珍しい。紫苑は真剣な顔になった。
「気になること？」
「はい。私は、板挟みに合っているという言い方をしたいと思いますが、端的に言うと、あなたはと
る両陣営より狙われています。しかし、ここでその陣営の内容を暴露したり、それを阻止することは禁じられています」
「そりゃあ……厄介だね」
紫苑は現状の大体を悟った。ころねは両陣営にあり、両陣営の命令で動いている。そして、両陣営の中にも紫苑を手っ取り早く始末しようとする急進派と、紫苑を守ろうという穏健派がいるのである。細かい派閥は命令が食い違うことも多いはずだ。
「はい。ですから、気をつけてください。こちらでも、最低限のことはしますので」
「ありがとう。なるほど、それが最近行動に出たって理由ってわけか」
紫苑はそう言って、寝間着を脱ごうとし、ころねがじっと見ていることに気づいた。
「……つい脱ごうとしてしまったよ。少しの間、出ていてくれないか？」
「いえ、あなたのそばをひとときも離れるわけには」

ころねは真顔で言った。
しかし、ヒロシはさすがに長い付き合いなので、これが冗談だとよくわかっていた。
「だから、やめようよそういう冗談は……」

○

一方、昨日の朝から動物園に張り込んでいたリリィは、朝食兼昼食兼夕食の差し入れのあんパンと牛乳を手に、刑事のごとく張り込んでいた。監視しているのは、岬井美恵子が突き止めた住所である。
今その住所は明かりが点っていた。まだ昼前の薄暗い中、その窓だけが明るく光っている。
「人のいないうちに、殴り込みたいんだが……」
リリィはつぶやいた。
「え？ 俺は許可取ってるんすよね？、今殴り込みって……」
疑問を呈したのは、強引に連れてこられたヒロシである。リリィの横に立ち、手製のクリームパンをかじっていたのだが、驚きに目を見開く。
「許可を取っていたら隠れて張り込みなどするか。最初から殴り込むつもりだ。殺人事件の調査をしている。周囲の状況が確認できれば、すぐに行くぞ」
「い、行って……？」

キ

「もちろん、仲間に入って、中層の奴をぶん殴ってから話を聞く。そういうことだ」

リリィの言葉に、さすがにヒロシも慌てた。

「ちょ、じゃあ、なんであっしを推薦してきたんですか！」

「そうか、それを話していなかったな」

気付いた、という顔でリリィはうなずいた。

「実は、あの大和望一郎の手下も、とある所で訓練していると掴んだんだ」

「え、あの一団の……」

ヒロシは言葉に詰まった。

以前、ヒロシが使っていた対魔王戦闘用スーツは、様々な紆余曲折はあったものの、一応完成してヒロシに与えたものだ。

「だから、キミを呼んだ。戦力という言葉よりは、キミが何かを知っている、あるいは向こうがキミに何か含むことがある、という可能性を考えてのことだ」

「え？　あっしは何も知らないっすよ？」

「それも知っている。何かのきっかけで思い出すことがあるかもしれない。程度の問題だよ。そして、キミが期せずして彼にとって重要な存在であった場合、人質としても使えるわけだしね」

リリィの言葉に冗談めかしたところが、微塵もなかったので、ヒロシは顔を青くした。

「ちょ、ちょっと、それって冗談っすよね？」

「まさか、2V（ツーブイ）をぶち殺すためには、多少の犠牲くらいは……」
と完全に目が据わっているリリィである。
「い、いや、それってただの私怨ですよね？……そ、そうだ、「計画」ってのはいったいなんな
んですか？ それを阻止するために来たんじゃないんですか？」
「私怨？ 何のことだ？ 個人的な理由など考えてもいないぞ」
「え……？」
「計画というのは、[illegible]（さい）[illegible]を封じ込めようというものだ。おそらく、そのままにして〈異界〉の影響（えいきょう）
を無くすか、両方を殺すためのものだろう」
「そ、それを阻止しないんですか？」
「知ったことか。彼の個人的な問題は、多数の生徒の安全ならボクにとっては何の問題もないんだよ」
リリィがそう言い切ったとき、通信が入った。控（ひか）えていた部下らのものだ。
《会長、後は押（お）さえましたでありんすよ。今なら、誰（だれ）もここから出られませんえ》
「よし。ボクが突入（とつにゅう）するタイミングはこちらから伝える」
リリィはそう答えてから、あんパンと牛乳パックを投げ捨てた。そして、ヒロシの手を引き、歩きは
じめる。
「ちょ、ちょっと、会長、心の準備が……」
「待っていられるか。とっとと行かないと、人が集まってきてえらいことになる」

リリィはヒロシの手を引きずり、敷地内に入った。

研究施設は一般にも開放されている。〈政府機関〉の外部からの訪問者もあるからだ。そんなわけで、リリィは内部のドアの

にはすんなりと立てた。

抵抗や罠の類は、少なくともここまではなかった。それでも警戒しつつリリィはドアノ

ブに手を掛け、ヒロシに目配せをした。

ヒロシとしては、何か反応を期待されているのかと思ったが、その答えを待たずにリリィが扉を蹴り開けた

ので、ぎょっとした。

「な、なんすか先輩」

しかし、その言葉にリリィは答えなかった。蹴破るや、すぐに室内に突入していたからである。それ

はとても素人が侵入するときの動きではなかった。テロリストの隠れ家へ突入するときの特殊部隊の組織的な襲撃

かける軍人のそれだ。

リリィは室内で姿勢を低くして転がり込むと、腕を前に構えて室内を見回した。腕を前に伸ばす術を心得ている彼女は、その

拳を、拳銃の弾丸のごとくに撃ち出すことが可能だ。目標を視界にとらえることができれば、次の瞬間には

そいつを吹き飛ばしていることだろう。ただし、標的がいればだ。

「なんだと……！」

リリィは意外なことに顔を強ばらせる。

室内は明かりが点いているにもかかわらず、誰もいなかった。

人が隠れる場所があるわけではない。書類棚（しょるいだな）や、電子機器が[illegible]してはいるものの、人が入っているのですら狭苦（せまくる）しく感じられる程の空間である。

「逃（に）げられた？　まさか？」

リリィは[illegible]確認を入れる。と、イヤホンからのきょとんとした声が返ってくる。

《は？　何も起きていないでありんすよ？》

《うが》

《喜多淑恵（きたよしえ）も一歩も動いていないぎゃ》

「よく調べろ！　騙（だま）されているかもしれん！」

リリィが怒鳴（どな）った瞬間、部屋の中央のデスクで、ちかっ、と一条（いちじょう）の光が輝（かがや）いた。

身構えるリリィだが、それはマナスクリーンの光だった。どうということはない。顔見知りの男——つまり2V——の顔が映（うつ）し出（だ）される。

「貴様」

リリィは吼（ほ）えるが、その映像は通信ではなかったらしい。先に吹き込まれていたメッセージが流れはじめる。

《いや、ご苦労ご苦労、おちびちゃん。残念ながら、いろいろこちらにはわかっていたんで、先手を打たせてもらったってわけ。こちらはもう動いているよ。一歩遅（おそ）かったね。まあ、次に出会（であ）うときを楽しみにしているってことで。あ、でも次はないかな。なにしろ、この国は時間の問題で消滅（しょうめつ）……》

2Vの言葉が終わらぬ前に、リリィは後ろに向かって跳んだ。そして、驚いて立ち尽くしているヒロシを蹴

ばして抱きかかえると、結界の外に転がり出た。

《すると面白いと思ったんだけど、迷惑がかかるからね。それじゃあ、お疲れ様》

からかうような2Vの声が響いた。

「こ、こんド畜生がぁあああ！」

リリィは絶叫しながら、抱きかかえたヒロシの頭をぽかぽかと殴りつけはじめた。

「ひぃいい！　やめて！　大丈夫、落ち着いてくださいっす！」

○

「こんなやり方で大丈夫なの？　なんかおかしくない？」

結城が感心して聞いた。

「いや。まぁ、うまく行っているよ」

2Vは答えた。

実際、2Vも、準備が終わり次第、すぐに移動を開始している。[illegible]を制御するの最終調整が完了するや、転送によって瞬時に潜

していたのだ。

リリィの思考回路をある程度プログラミングを完了した人工知能の逃亡に転送利用した仮の戦闘用躯体がある。転送はかなり

の費用がかかる。利用するにはそれなりの理由が必要とされるのだ。

「向こうがこちらの大事な情報を入手したってことさ。こっそり動いていても敵のプロジェクトには違いないってことさね」

「そういうバックアップがあって好きな研究ができるというのはありがたく思うべきなんだろうけどねぇ。でもどうしてわざわざ本体で来なくちゃいけなかったわけ？ 戦闘用躯体で済んで

よ？」

「はは。そういえば説明していなかったね」

2Vは笑い声をあげる。そして『コンスタンティン』を指す。今夜は祭が行われている。本来2Vがい

るのは、以前ここで大規模な戦闘が行われた際2Vたちがテントを張った場所

「彼女を封じるのさ」

2Vが指差したのは、迷うことなく、広場の中央に立っているただの少女の姿であった。それを改めて確認した本体が驚きに

を開く

「彼女？ 彼女はこの間入会したばっかりだよ？」

「入会した？ 知らないのかい？ 彼女は魔王なんだ」

こともなげに2Vは言う。

「ふぉおお！ 驚いた。そうなんだ。ん？ 彼女を封じ込める？」

ぴくり、と水瀬が眉を上げた。

「そうさ。[illegible]封じれば、彼は普通の人間と同じようになる。彼の周囲の人間には、彼を早く殺そうと思っている人間が多くてね」

2Vはにやりとした。

「こ、殺す？」

狼狽する水瀬を見て、2Vは笑いをかみ殺した顔で続ける。

「そういうことさ。プロジェクトなのはそういうわけでね。騙したみたいになって申し訳ないが、君も犯罪者になったりはしないから、安心して続けておくれよ。一度くらいは殺人の片棒を担いでみるってのも面白いと思ってみるべきさ」

水瀬はショックに顔を手で覆った。

「そ……そういう考え方は納得できないなぁ。ねえ、考え直してってわけには……」

「そうもいかない。脅すわけじゃないけど、やらなきゃやらないで、あんたがお尋ね者さ。ははは、いいじゃないか。やらなきゃ犯罪になる。やっても犯罪にならない。どう考えたって選択肢はないね」

堪えきれずに2Vは笑う。

水瀬は唇を噛んだ。

——どうしよう……。いや、まだ方法はあるかも……。これなら一発逆転できるかもしれない。上手

なろう。冷静に……。

「わ、わかったよ。嫌だけど、そうも言ってられないね。そのように機械を調整すればいいわけね

「そういうことだ。まぁ、ご協力ありがたいことさね」

2Vは勝ち誇った笑みを漏らした。

「彼を電脳空間に隔離して封じる。それが命令ってわけね」

「その通り。下手なことはしないことだ」

「そりゃ、無茶はできないってか。しょうがないよねぇ。わかってますって」

仮想人格は持ち込まれた端末の前にかがみ込んだ。

縦横高さ十センチ四方ほどの立方体、キーボードとモニターのついた端末装置の側面に埋め込まれている。それを仮想人格は操作しはじめる。

「一度も会話した相手を殺すのの片棒を担ぐってのはどんな気持ちだい？」

2Vは意地悪く問うた。

さすがに仮想人格も嫌悪感を顔に出さずにはいられなかったが、これには静かに答えた。

「彼には共感できるところがあったからつらいよ。でも、彼もある程度わかってくれると信じるなぁ」

「ふぅん。なるほど。何をわかってくれるかはさっぱりだが、そうとでも思わないとやってらんないってことか。まぁいいさ。気持ちを誤魔化しても一生懸命に働くのが一番」

「それは同感だねぇ。でも、結局の所、人はしたいことしかできないようになっているんじゃないかな。ちょっとしか話していないけど、彼はわかりあってるんじゃないかって気がする。だ

から、彼のしたいこともなんとなくわかるんだ。つまりさぁ、彼らは何か未来を切っちゃいそう
な気がするんだよ。チャンスさえあれば」
「チャンス？　何を言っている？」
「ふふん、こういうことなのだよ」
彼は悠然と、極めて冷静に、しかし特別な自信を持って宣言した。2Vの表情が何となく、自分の悪意を見抜かれたように曇った。
「な、何を！」
2Vが珍しく狼狽えた。彼は一体何を考えているのか。この瞬間、長けた2Vでも見抜けなかったということ
「何って？　最後の賭けに出たんだよ。これから周囲を巻き込んで全てを転覆しちゃうんだ。言っておくけど、あんたの
った指令のものは守ったよ」
彼は悠々と言った。周囲の装置は激しく動いており、低いうなりをあげている。
「周囲を巻き込むだと！」
2Vはその言葉に驚き、敵を捕らえるべく手を伸ばす。
「もう遅い」
彼は悠然とつぶやいた。
2Vの伸ばした手は敵を捕らえることはできなかった。すでに2Vの視界は歪んでいた。周囲の
のが光り輝き、周囲のものが下へと沈み込んでいく。

「大統領閣下、私そしてこの次元転移装置そのものをメギスの神が開いた新世界へと転送する」

「装置そのものを……！　馬鹿な！　何が起るかわからないぞ！」

「確かに、装置は外部に置かれてこそ装置だけど、内部に持ち込まなければ、あなたに操作されてしまうでしょ？

それにあなたの考えていない要素を盛り込んでおいたからね。あっちでは私が有利になるように、私が

ムプログラムを自動制御プログラムとしたから。そうすれば彼がなんとかしてくれる。そうだ

てるよ」

大統領は絶叫した。装置を抱きかかえた彼の姿が次元の下へと沈んでいく。

「ちい！　この一瞬でそこまで考えたか！　だが、私も連れて行ってもらう」

２Ｖは伸ばした右の肘あたりを左手で握った。そして、いきなり着衣のものを右腕から引き抜く。形を変え

ばこそ可能な行為だ。

そして、２Ｖは大統領に向かって投げた。大統領はそれに気付き、装置を手で覆い隠すが、放物線はしっかりと大統領の

った。

「手向けはそちらへ行くぞ！」

２Ｖは叫んだ。

そして、周囲の空間ごと、ものの場所はあちらへと沈んだ。

○

最後の挨拶をする少し前ということになる。

学院長は何と演説すればいいのか、どう言ったものか苦慮していた。

母校の卒業生を前にしての初めての挨拶である。そして、卒業生を祝福していないため、後任を仰せつかったということは、朝礼で

をしなくてはならないということだった。

この『コンスタン魔術学院』は、滅多なことでは最後の挨拶は行われない。卒業生の一生に一度の大切な式典の、その時の挨拶の言葉など

っているのである。それを無理やらなくてはならなかった。

「掃除とは、人の精神の汚れを落とすこととまとめよう。ですが、これを組み縄で掃除み行と理解してはならないはずです」

学院長は、後任を務めることを宣言した後、そう切り出したのだった。が、思えばこれがまずかった。ただ、卒業生に伝えると

り、その掃除にある思想についての自分の解釈を述べ、そこから議論を発展させて欲しいなどと願ったのがま

ずかった。話を続けるうち、どうにもおかしな方向へと議論が展開していってしまったのである。そし

て、卒業生に指導していたというわけだ。

「……汚れは、入り組んで手を着けられないところに溜まります。ちょうど絡み合った糸の隙間に埃が溜

るように。それを掃除するためには、糸をほどき、一本一本伸ばさなくてはならない。つまり、真の清掃のた

めには解決しなければならないということです。そして、先生はその人の精神の澱を取り除いていくこと

でもあるわけです。その、澱が溜まる場所も、やはり入り組んで手を着けられないところでしょう。先ほど

の糸の話は比喩になります。糸の場合は明確ではありますが、それは複雑。しかし関連したシステムであると

えるでしょう。つまり、個人の閉じた精神システムを解体するということこそが大切なのではないで
しょうか？」
純丸の自分が話していることであるのに、妙な方向へと流れていく話題を制御できなくなっていた。その場の
に生徒たちがざわつきはじめる。
「常識を疑えってことか？」
「いや、閉じた精神システムと言っているのだから、これは一度、狂気に走れと言っているに違いない」
「……なるほど。さすがに魔王と言われるものの、決意は違うな」
——いや、そうではなく……。
純丸は悩む。
「の精神システムとは何か？ これは人間の意識についてのことを言っています。精神的自由を獲得するため、人は物事を経
するようにできている。皆さんが授業を受けることも、そのような先生の意識の力によって行われてい
る。勉強することと授業を行うことはイコールではありません。それこそがシステムであるわけ
です。そういう閉じた意識の社会システムにさえ繋がっていることも忘れてはいけません」
生徒たちはさらにざわつく。
「狂気ではなく、価値観、社会システムを破壊しろということか！」
「アナーキズム！ それを革命！」
「しかも授業というのに！」

――あっれ？

阿比丸はさらに言葉を紡ごうと頭をひねる。

「……いや、僕の主張は、そのような言い回しについても向けられると言っているだけです。それらは

いずれ僕を孤立させてしまう。僕が生徒会を担う覚悟を持っているのならば、新しい時代のための戦いを……闘い

を続けるべき……」

「すげぇ、新時代を実現するつもりだ！」

「新しい時代のための闘い……扇動者が言いそうなことだ！」

「役員から黙っていただけだぞ！　僕たちの思い通りにはさせません！」

生徒たちの騒ぎはとても抑えられそうもないものになる。怒声が阿比丸に浴びせられた。

――まいったな、なんとか鎮めないと……。

「静かに！　騒ぐともこれは正論、すなわち、大人の道に恥じていない言葉の真の意味もなく、ただ演説を

して聞くべきでしょう！　聞かぬなら、この学院のものが道を外れたということ！　その報

はすぐに……」

それが不遜な言葉と阿比丸の気づいたのは、すでに演説の中途まで話した時であったため、後のトーンは不安がって

いったのだが、その言葉が生徒に知れることはなかった。阿比丸の演説の途中で、学院のものが次々だかと

である。

「な……！」

「きゃああ！　何これ！」

「魔の力！」

「ひ、ひぃい！　地獄に堕ちるっていうの？」

悲鳴と嫌悪に満ちる。だが、その悲鳴ですら飲み込んで、暗闇そのものの中へと沈み続けた。

——この感覚……！

絢子は覚えがあった。これは、あの時、本の中に入ったのと同じ感覚だった。

——ということは？

瞬時、絢子は自分だけなのかということを疑った。が、その後に、本の中に姿を見つけた彼女は、ころねと並んで仲良く、きょとんとした顔で立ち尽くしていた。

——な、なんなんだ、じゃあ、これは……！

○

絢子も何が起こったのかを認識できていないのである。

「これは、図書館の内部ですね」

江藤不二子を捜した絢子に、そう話しかけた。

「違いありませんわ。わたくしは入ったわけではありませんけれども」

アネットは寄ってきた生徒たちをなだめていた。以前よりもよほど悪魔的な性格を持ち、悪役令嬢を信奉している彼女が、未だに生徒たちにその名で呼ばれておらず、特に生徒たちには、お姉様と慕われている。

その言葉に、泣いていた生徒たちは、顔をあげて二人を見た。

「お姉様、ご存じですの？」

「ええ。これは、おそらく、転移などに使われる魔法陣の前段、そのような現象に直面したことがありますわ」

アネットは周囲を見回した。

『コンスタン魔法学院』は、森の中にあった。それまでも自然の広い敷地の中にある学院だったが、それよりも深い森の中だ。ジャングルがすぐそこまで迫ってきているような雰囲気である。それは、これまで見てきた風景とも明らかに違っていた。植物相も明らかに王国内にある帝国内のそれとは異なっている。

「どうやら、この学院ごと転送されたらしいですわね」

アネットはそう説明した。絢香もうなずく。

「しかし、先輩、この……校舎……」

絢香が校舎を指差した。

それは確かに校舎だった。だが、その趣はどこか違っていた。その違和感に気づいたのは、校舎に近い

た元の生徒だった。

「要……塞……要塞ですわ！　これは、昔、要塞だったときの姿ですわ！」

修復の必要もほとんどなく、開いている窓の部分もいくつかだ。それも銃眼としての細工である。のっぺりとした壁面が潜入を拒み、正面は巨大な門扉によって閉鎖されている。

「かつて……つまり[illegible]ときの城塞を修復したと聞いていましたが」

[illegible]の言葉と、[illegible]

「それじゃあ、時間を越えてしまったってことか？」

と、それを[illegible]が否定した。

「いいえ。それならば[illegible]中は[illegible]がいなくてはならないはず。時を越えたわけでなく、何かのルールの下で変更された[illegible]いると考えるべきですわ。それが[illegible]いうもののはず」

「ルールの下で変更された[illegible]」

[illegible]うなずいた。

「ええ。つまり、ここは、[illegible]の中なのか、ゲームの中の[illegible]と考えるのがよいと思われますわ！」

[illegible]を踏まえて[illegible]言う。

と、[illegible]それに答える声があった。

「その[illegible]通り。そこから先は私が説明します。そして、お詫びしなくてはならないこともあるのです」

透き通った[illegible]だった。

[illegible]たちは一斉にそちらを見る。

ジャングルを抜けてきたとおぼしきその少女は、繊細な、しかし[illegible]たたずまいをしていた。

長い髪（かみ）の彼女は、[illegible]の鎧（よろい）を身にまとっていた。

「私は、彼女の話を聞いてください」

。

彼女は、自分の身体の変容に戸惑（とまど）いはしなかった。

[illegible]はそう変化するように[illegible]しておいたからである。

――まさかのために、ゲームデータをロードしておいて助かった……。

2Vの手から逃（のが）れるため、[illegible]のルールを、自分のデザインしたゲームに紛れさせたのだ。それは[illegible]けながらプレイしていた[illegible]モチーフに、[illegible]働かせたファンタジーの[illegible]ゲームである。

――さて、ゲームのルールはおいおい思い出していくとして、私はどうすべきなのかを整理しないといけないねぇ。

彼女は、2Vの[illegible]がどう反抗（はんこう）していくかを静かに考える。

真っ先にやるべく[illegible]逃れた。そして、その[illegible]この手の中にある。外からは干渉（かんしょう）できまい。2Vの手下以外[illegible]でいるはずだが、今のところ発見できていない。が、それほどの[illegible]持たないはずだ。

――でも、向こうでゲームのプログラムを[illegible]されたら、まずいことになるかもなぁ。でも[illegible]な彼女の[illegible]なるから不可能はず。

さすがの２Ｖも、殺戮（さつりく）に繋がるようなことはできないだろう。自分に不利益なことがあることだけは明かな

のだから。

――となると、目的は魔王の、接触（せつしょく）。それより早く２Ｖが排除（はいじょ）できればなおアリ。そんなところ

か。

考えをまとめてから、他の生徒たちの、行動を思い出すことを決めた。後のことを考えれば、話の前のものの真実を教えられ

ないが、巻き込んだ責任をとらなくてはいけないだろう。

――でも、結局は安全なはずだよね。なにしろ、ゲームの設定を理解しているんだし。そして、デ

インしたのは私から。誰よりも世界のことをわかっているし……。

「ええ。つまり、ここは、お話の中の世界か、ゲームの中の世界と考えるのがよいと思われますわ！」

ジャングルを抜け、校舎に出たとたん、綺麗（きれい）な声が聞こえてきた。

――ふぉおお！　もう、状況（じょうきょう）を認識した人がいるのか。さすがに優秀（ゆうしゅう）な人材と聞いていたけど、す

ごいな……。

他の生徒の感心、行動を思い出した。

そして、男としてどうやってしゃべるべきか考えていなかったことに気づいた。

――あ、しまった。普段はチャットしてなかったしなぁ。どうしゃべるのが男っぽいんだ

ろう？　ええと、あれだ。乙女（おとめ）ゲームに出てくる男の子っぽくしゃべればいいか。

「乙女ゲー」というのは、女の子が美男子との疑似恋愛を楽しむゲームのことだ。当然ながら、凄まじい美形男子が出てこな

い。桜は男性のサンプルが少ないので、そのあたりは致し方ないところだ。

「その通り。そこから先は私が脚色します。そして、お話ししなくてはならないこともあるのです」

自分の声が完全に男のそれになっていたことには驚いたが、いかにも乙女ゲーの攻略対象のように声が響いたことに桜

する。

「私は、彼女の話を聞いてください」

桜はそう言った。

「説明、お話？」

「女子生徒たちの問題が飛び込んできた。いくつもの視線が桜に注がれる。直接話すことはそれほど得意ではないが、違

っているならばなんとかなるはずだ」と桜は胸を張った。

「これは[illegible]です、本来もっと積極的に実験するつもりだったのですが、手違いがあって皆さんを巻

んでしまったのです」

そう言うと、あちこちから怒りと恐怖の混じった悲鳴が飛んでくる。

桜は不機嫌そうに顔を曇らせた。

「待て、落ち着いて話を聞くべきだ」

そこに生徒たちを制する声が割り込んできた。言ったのは、ショートカットの凛とした印象の少女

「服部[illegible]、続けてくれ」

約束を守った少女は、安心したようにうなずいた。それを見た綺羅も微笑(ほほえ)み返す。

「ありがとう」

が、綺羅は顔を背(そむ)けてしまった。助けてもらったのに、感謝の気持ちをむげにされたようで悔しかったが、今は話を続け

ないといけない。

「……それがお話ししなければならないことです。しかし、安心してください。これは本来ゲームの

です。これから話すことさえ守っていれば、危険はありません」

「注意点は3つ」

「つまり、ゲームのルールです。まずひとつめ、ゲーム内の時間で一週間以内に元の世界へ帰らないと、あなたは永久に死んでし

まうかもしれません」

「ええ？ それじゃあ、危険はないなんて言えないじゃないか！」

「し。以上、これは安全のために言っているだけです。これまでも期間内にゲームの世界にとどまっていられるのは一週間

だったはず。今の状態で生きているから。おそらくそれ以上とどまっても平気ですが、外から食料を持ってき

ているわけではありません。ゲーム内での一週間、現実では数日間に相当するはず。皆さんの体は、その程度か飢(う)

と、渇(かわ)きに耐えきれないはずです」



「……なるほど」
「ふたつめ。この世界で死んでも、元の世界に帰れるだけです。逆に言えば、死ねば戻れるということです」
「え？」
さすがにその言葉には皆、驚いた。
「それを利用出来るのは難しいな」
皆口々にそのようなことを言い出し、首をひねった。
——確かにそれは利用出来ないよなぁ……。ええと、どうすれば……。そうか！
「このあたりに動物？　家畜を飼っていたりするものがいれば」
冒険者が城の門と、土地の外れの境の端を指した。そこに鶏小屋があったのだが、そのあたりに鶏がうろうろしていた。
「あれ？　小屋が無くなっているのに、鶏がいる……」
「あの鶏を見ていてください」
冒険者が腰の鎧に差してあった短剣を抜くと、それを鶏に向かって投げた。鋭い切っ先は見事に鶏の首を一発で切断する。
冒険者たちは悲鳴をあげて目を覆ったが、しっかりとその鶏の姿を見ていた者は驚きの息をもらした。
首を飛ばされた鶏は、その首と三歩ほど走った胴体も、まるで映像が消えるかのように微かにぶれて消えてしまったのである。

「え？」

驚きの声が背中側からあがる。

地味恵は内心でほくそ笑んだ。

――ふぉおお！　さすがゲーム。射撃判定なんて精確に当たらないはずなのに、ばっちりだよ。いや

あ、慌てて気がつかなかったけど、やっぱりゲームに入るのって思ってたよりいいかも……。

いや、今は観察を続けないと。

「一方この、ゲーム中に生み出された動物……」

地味恵は一度の鶏の血に浸されたが、今は汚れひとつ無く輝いている剣を拾うと、ジャングルに目を向けた。そして

そこにうろついている動物を見つける。兎だった。

「あの兎ですが」

地味恵は何か剣を構えた。

「え？　可愛い兎ちゃん、捕まえればいいの？」

兎の近くに居た佳代が、兎に歩み寄った。

兎は目をくりくりとさせ、耳をぴんと立てた兎の、可愛さに佳代がその後を歩み寄ってきた。

「危ない！」

地味恵は短く言い放った。

「え？」

佐伯彩矢の悲鳴

と、死霊が跳んだ。

ぴょん、などという可愛らしいものではない。明らかに佐伯彩矢の頭上を超えたのど元の一撃を狙った跳躍だった。

しゃあああああ！

奇怪な叫び声を漏らした死霊の口からは、鋭い短刀のような牙が生えている。

「きゃああ！」

佐伯彩矢は顔を手で覆った。だが、死霊はのど元を狙っている。突き刺されれば、頸動脈を一撃で断ち切られてしまうだろう。

しかし、佐伯彩矢に死霊が跳びかかるより一瞬早く、森島の短剣がその首をはね飛ばしていた。

どさり、とふたつ、鈍い音がした。死霊の首と胴体が切り離されて地面に落ちていた。その切り口から生まれた血が地面を染めていく。地面に突き刺さっている短剣にも、血脂が浮いていた。

「消えない……？」

佐伯彩矢がつぶやく。

「これは首を狩ってそれで終わりというゲームということがわかっていただけたと思います。そして、ここでの死がどういう意味であるかということも。この死体はしばらくしたら消えますが、取り込まれた生命

りはずっと長く死体が残ります」

森島健児は、短剣を口に挟んだ。

「しかし、戻るためには死んで見ろと言うのも問題があると思いますが……。嘘(うそ)であるとまでは言わない
が、うまくいかないこともあるだろうし、もちろん精神的な抵抗(ていこう)もある。もう少しましな方法はな
いのですか？」
その答えを聞いて、先生が少し考えている間、髪の長い大人の女性が口を開いた。
「確かに、最初の頃は、そこでの生活を完遂(かんすい)することも脱出(だっしゅつ)の条件だったような」
不平もある。先程説明したことを言っていた、と誰もが感じた。
「そうですね、ゲームを終えることも脱出の条件になるでしょう。では、まずは簡単にゲームのルールを説明しま
す。ここでは、皆さんの性格に応じて役割が決められます。ここで戦い、勝利すると、経験値が溜まり、レベルがあ
がります。そして、ここが現実世界と異なる最大のゆえんなのですが、ここで身に付けた戦闘(せんとう)や魔法のスキル
は、現実に戻っても身に付けたままだということです。脳が新しいパターンを覚えますので。自転車に一度乗れるようにな
ったら二度と忘れないようなものです」
思わずその説明に、察しの良い生徒たちは驚きの声をあげはじめた。
「そいつはいい。一週間ここであの化け物みたいなのを倒(たお)し続ければ、現実では自分の体格では確実にできない、戦闘能力を習得できるってこ
とか」
——これならゲームを楽しんでもらえそうだ。
先生は思いながら、うなずく。
「それでは、まず最初に表示されたネットを見るようにマナスクリーンを順番に開いてみてください」

渚沙がそう指摘した。

皆、生徒たちがマナスクリーンを開いてみる。と、そこには各パラメーターと、ゲーム内で使用するコマンドが記されていた。

「そこにパラメーターと、ルールに関係するコマンドが表示されます。変更があるかも知れませんので、するときは注意を。個々のNPCの要素を指揮できるのがこのゲームの特徴です。これもレベルが上がると増えますので、役立ててください」

渚沙が言うと、一斉に質問を口にした。

「それでゲームのクリア条件は何ですの？」

「このゲームでは、クリア条件は魔王を倒すことです」

渚沙がそう口にした瞬間、周囲の雰囲気が変わった。

「魔王？」

「倒す？」

生徒たちがざわつく。

「そういえば、魔王の姿を見た人はいない」

「曽我さん以外なんて、ころねもいない」

生徒たちが周囲を見回しながら声をあげる。

――妙な反応ではあるけど、彼らは魔王から嫌われていたの……かな？

性格に応じて、ゲーム世界の難易度が決まっている。ということは、こちらの陣営が魔王側ということになるだろう。

[illegible]妙な方向に話が流れていくのを感じるが、周囲の反応はさらに危険な方向へと向かっていく。

「いいね！ ここを抜け出すためには、魔王を倒せばいいってことか！ 日頃のうっぷんが晴らせるぞ！ もちろん、魔王を倒すと経験値がばっちり手に入るんだよな？」

「しかも、死ぬことにリスクはなし……か。あえて死ぬことはないが」

その認識が生徒たちの間に広まり、ざわめきが喜びの歓声に変わりはじめる。

——あれあれ？ 妙なことになったぞ……。ええと、どうしよう……。なんとかこの場をまとめないと……。

[illegible]は慌てる。気がかりな2Vの存在がある。彼女が敵に回ることになって、何が起こるかはわからない。

——それでも、最終手段としては、この鎧があるけど……。リセットスイッチとしての役割しかないだろうなあ。なんとか生徒たちをまとめて、全員を生きたまま元の世界に帰さなくちゃ……。

[illegible]は着ている鎧を手放させた。これが聖域制御装置の今の役割だった。

。

「どうやら、周囲の意志が世界を変える要素があるようです」

ころねがマナスクリーンを眺めながら言った。

「前もそうだったね。一本の内容のある程度、僕で変化させることができた」
阿知花はうなずいた。
「このゲーム世界に適した役割を与えられ、それを遂行することで外に出られる。それも前回と同じですね」
ところねはマナスクリーンを展開することを早めに思いついていたので、そこのマニュアルに図
すことで、潜在状態を観測したようなことは、ほぼ把握していた。
「適した役割ねえ……」
阿知花はぼやいた。
、今回阿知花ところね、そして、けーなが居るのは、どことも知れぬ巨大な城の広間である。中は薄暗く、蝋燭を
る。豪奢な黄金の玉座。そこから伸びる赤絨毯ばかりがやたらと目立っている。
そして、そこに腰掛ける阿知花。爪のついた手甲やら、棘のついた肩当てやらの装飾過多な格好を
る。つまりは、絵に描いたようなラスボスのスタイルだ。
「あーちゃん、格好いいねぇ」
はしゃいでいるのはけーなである。けーなはローブ姿。どうやら魔術師といった風情である。
「お姫様が良かったのにな。でも、囚われのお姫様と、助けに来るあーちゃんが魔王じゃ、変なもんね。こ
れは仕方ないかなぁ」
けーなはマナスクリーンを展開し、自分のパラメーターを表示させた。

クラス：神官
レベル：10
HP：20
筋力：6
魔力(まりょく)：18
所持金：10000

「所持金？」
「このゲームは、自分の分身を操作する魔族軍を率いるゲームだったでしょ？」
けなは指を鳴らした。すると、周囲の鎧の上に白いマントを羽織った神官たちが並んで控(ひか)える。
「なるほど、職業ってことか」
純也は納得(なっとく)してうなずいた。そして、同時に嫌(いや)な予感もしてしまう。
「つまり、みんな僕を倒しに来るわけね」
「そうでしょうね。ところで、普通(ふつう)はレベル1からスタートでしょう？　勇者は敵を倒して、最初から優遇(ゆうぐう)されているのでは？」
「そういえばそうなのかな」
ころねの言葉に、純也は白いマナスクリーンを開いてみる。

クラス：魔王
レベル：９９
ＨＰ：９９９９
筋力：２５
魔力：２５
兵力：２０００００

「編集者権限ね」
「内部的な能力値は魔王で１８に設定されているそうです」
けーなところねが阿久比のパラメータを覗き込んで言った。
阿久比しても概ね同意見である。
「これだけ強いと　みんないっぺんにかかってくるんだろうな　でも素直に倒れれば
にゲームが終わるんだよね？　それでいいんじゃないかな」
「えー？　駄目だよ　もっとゲームっぽく楽しまないと」
けーなは自分の一言が阿久比にとっては聞き捨てならない。

「駄目よ。一週間過ぎたら、みんな危ないことになるかもしれないんだから。一年半の期限より早く負けるほうがいい。なんならこの場で殺してでも……」
「ちょっと待ってください」
ころねが両手で制した。真剣な声だった。いや、いつも真剣と言えば真剣な声なのだが、今の声は切迫感を
る。
「どうしたのさ？」
「外側から〈調べられる〉範囲で、一年半の期限のデータを解析したのですが、少し、危険な要素があるようです」
「危険？」
「はい。どうやらみっつの要素が、この世界に影響を与えています。それらが干渉して、プログラムの
が起こることが予想されます」
「みっつの要素？」
「ひとつは、物理的な、つまりあなたです」
ころねはけーなを指した。けーなはきょとんとしている。
「あたし？」
「どうやら〈現実世界〉での行使が、あなたのマナの固有振動によって可能になっています。おそらく、あな
は自分の意思ひとつでルールを改変できる立場にいる」
「ルールの改変？　そんなことしないよ。だって、このゲーム、あたしが知ってるゲームだもん」

けーなは笑いながら言う。が、阿知波のこころねの集約された。

「そうか、受け入れたのも、けーなの方がきっかけだった。今回すんなりと受け入れたのも、けーなが最初から知っているルールが元になっているからなのか」

「おそらくは」

「とはいえ、それなら安心じゃないか。けーながちょっと、ゲームを楽しんだら、やっぱりここを[illegible]しまえばいい」

「いいえ。ふたつ目の要素、これは[illegible]のものがこの世界に持ち込まれていることです」

「通常、そういうものは外に置いておくんじゃあ……」

「はい。何かの手違いがあったのでしょう。これでは[illegible]のものに干渉できることになります。によっては、何かを制御できないという取り返しのつかない事態になるでしょう」

「それも大切だけど……。まだあるのかい？」

阿知波は息をのんだ。どうやら、気楽にゲームを楽しむというわけにはいかないらしい。

「みっつ。目[illegible]、ルールに従わない存在がいます」

「え？ あるわけないだろう。だって、ルールに従って[illegible]させたんじゃないのかい？」

「原因はわかりません。しかし、データをすべて分析(ぶんせき)した結果、従っていない者がいます」

「わかった。それがいるとしよう。どんな不都合があるんだい？」

「細かい部分は不明です。ただ、一番大きな部分は、ルールに従わない存在によって、危害を加えられた者は、ゲームとしてでなく、本当のダメージを受けてしまうであろうことです」
「それは……危ないね」
阿久比は告げられていることとの深刻さに気づいた。
どこかに、潜むルールの無視者。もしも生徒会の人間を襲い、殺した場合、それが元の世界の帰還でもなく、本当の死を意味するかもしれないのだ。
「そのルールの無視者は……どこにいるんだい？」
「わかりません。特定は不可能でしょう。そもそも悪意を持っているかどうかもわかりません。危惧している事態が起こらない可能性が高いです。ですが、万が一、悪意を持っていた場合、生徒たちはゲームと信じながら殺されてしまうことになります」
「わかった。どちらにせよ、お楽しみの時間はないな。やっぱり、すぐにこの世界を去ることを検討しないと」
阿久比は座席から腰を浮かせようとした。が、ころねがそれを制する。
「ですから、自分は来たのです。ゲームのルールでは身代わりは殺害されない。つまり、あなたが消えても、プログラムが作り出した存在、いわゆるNPCが身代わりになるでしょう。あなたは良くても、他の生徒は危険な状態で残されたままです」
「ああ、そうか」

「ですから、いずれにせよ、目的のゲームのクリアが一番でしょう」

「じゃあ、僕に出来ることはほとんどないじゃないか。あまり抵抗せずに殺されることくらいか」

「いいえ、もっと簡単な方法が」

「簡単な方法？　そんなものあるわけない」

[illegible]首を横に振った。が、ころねは[illegible]告げる。

「皆殺しです」

「は？」

「[illegible]による。[illegible]ら[illegible]率いて出撃、襲撃してくる冒険者たちを[illegible]て、ゲームオーバーを狙うのです」

「ちょ、ちょっと、それは……」

[illegible]さすがに尻込みする。

「何を怖れているのです。時間が経過すればするほど[illegible]増します。それに相手のレベルも上がります。速やかな死を与えることこそが[illegible]へと繋がるのです」

ころねは淡々と言った。

確かに正論だった。どこにも論理に隙はないように思える。

「でも……」

「デモもストもありません。まだ[illegible]うちに[illegible]狩るのです。血の雨を降らせましょう。いや、らえて一箇所に集め、生き埋めにするのも効率が良いでしょう。とにかく効率良く殺すことだけが重要です

「それが吾輩の使命です」
ころねは、ぐい、と阿久に向かって顔を突き出した。その眼は真剣だった。もっとも、いつも真剣は違
ないのだが、肉体的にさらに疲労度が増している。
「……ひょっとして、殺したがってない？　ゲームだと思って」
「まさかそんなことはありません。ああ、吾輩が崖に追い込んでから、の中の群れをけしかけ、の中の生き残りとともに
に突き落とすのも効率がよい上、壮観だと思います」
そう言ってから、ころねは阿久の前に跪いた。
「ご命令いただければ、この魔将軍ころね、冒険者どもを血祭りにあげて差し上げます」
「……いや、君が一番楽しんでるだろ」
阿久は一瞬迷ったが、悪ふざけの部分を別にすれば、確かにころねの言う通りにするのが安全そうだった。
「わかった。任せるよ」
「ありがたき幸せ。必ずや魔王様の期待にお応えいたします。素晴らしきかな魔王、悪逆非道！」
ころねが右手を突き上げると、けなも大声でそれに呼応した。
「悪逆非道！」
「悪逆非道！」
と、さらにそれに応える声があった。いつのまにか、黒の鎧の勇者、醜悪な魔獣たちが周囲
い尽くしていた。彼らが、嵐のようなうなり声を張り上げ、地響きを立てんばかりに足を踏みな

し　腕(うで)を振り上げていたのだ。

「悪鬼退散！　悪鬼退散！　悪鬼退散！　悪鬼退散！」

――これはまた……ゲームとはいえ　えらいことになったなぁ……。

純也は内心でぼやいた。

3　魔王の聖杯(せいはい)の行方(ゆくえ)

……「通信ユニットそのものが向こうにあれば、中の通信不可能というのは幸いだったな。腕だけをこちら

に送り込んだのは正解だった」

2V(ツーブイ)は、蛇(へび)に擬態していた。正確には2Vが切(き)り離(はな)した人形の腕が蛇に姿を変えていたのである。

切り離した腕は、それだけで活動できるように通信ユニットが埋め込まれている。情報収集、手に入るところでも

ればどこでも盗撮(とうさつ)等が行えるように備え付けられている機能。

蛇はジャングルに潜み、淑恵(よしえ)と生徒たちの状況を見張っていた。ごく目立たない緑色の蛇、この世界によく馴染(なじ)んでい

た。

「どうやら、あのお嬢(じょう)さんはこの世界にうまく逃(に)げ込んだつもりだろうが、こちらもお嬢さんに

えていないこともある。情報収集本拠から、この世界の創造主は、我々よりもずっと以前から潜んでいた者がいるはず

だ……。さて、そいつがこの世界にどんな影響を与えているか……。そして、こちらはそいつに

誰(だれ)よりも早くたどり着かねばな……」

2Vはつぶやいた。

最初からこの世界に潜んでいた者それがこの世界の創造主として関係してくるはずだ。

「そいつのことを、もう少し調べておかなくては……。幸い、まだメギスの神官どもは誰も気づいてい
ないようだしな」
そう独り言を漏らしつつ、2Vは意識を自身の身体へと移した。2Vのよく使用する、特徴のない顔立ちの男、今はメギス神
殿の管理を任されている。専用端末がいくつかあるのみの部屋が、そこからのみアクセスできるファイル
があるのだ。
2Vは同僚の研究者がかつて見たことがあるというファイルを探していた。以前の歴史について記された
ものだ。
しばらく時間がかかったものの、2Vはいくつかの関連するファイルを見つけた。そこには、感嘆
すべきことが記されていた。
「これは……!」思った通り……。いや、想像以上……!」

○

「従ってくれとは言いにくいですが、万が一の危険がないように、皆さんには退避させていただきたい」
―淑彦―ここでは淑彦―が、そう声をあげた。
擬似体験をしている生徒たちは、それを聞いているのかいないのか、かなりざわついていた。参加者の多くはゲーム
い。いずれにせよ、とても浮ついている状態だ。

――まいったなぁ。みんなには安全に現実へ帰ってもらって、私は2Vの行方と紗井阿久斗さんを探さないといけないのに……。

そこで彼方はスクリーンを開いて、現在の状況を確認する。

状況確認といってもプログラムの特性というか、自分の作った世界のものだから当然だが、プログラムを

に調べる。

そこで彼方はところねが気づいたのと同じく、ゲームの目的に従っていない参加者[illegible]が中にいることを知った。

――2V？　いや、あれも私と同じように取り込まれたのだから、ちがうか。まして、あいつは

だけ……。大したことはできないはずだよね。すると、まさか、この[illegible]最初から誰がい

た……？　ともかく、これは危険だな。それと、皆が[illegible]すれば、殺されてしまう可能性がある……！

彼方は慌てた。だが、それでも生徒たちを前向きな[illegible]保てるような人物が[illegible]とは思えない。

「困ったな。壇上に上がって指示を出すなどして良いものか……」

彼方はつぶやいた。[illegible]のだからしなければならないとは思うが、皆を指揮するような[illegible]行為だ。

のような人間は厳しいだろうというのが、彼女の[illegible]思いだった。

「[illegible]はあなた以外できないとは思うが？」

絢子が彼方のつぶやきを聞いていたのか、そう耳打ちをしてくる。

――え？

彼方ははっとしてそちらを向く。絢子は自分に気づけるように微笑んでいた。

「し、しかし、私は不評判である以上、人の上に立ったこともない。言うことを聞いてくれるだろうか？」

「そういうことならば、私に代わって命令を発してもいい。そうでなくとも、指示はさせてもらう」

紗綾がそう言った。

――いい人だな……。助けてくれるなんて。今は若い時から、喜んで助けるよ。

恵太は安心して、微笑（ほほえ）む。

――えっと、お礼をしないと……。今は男子から……乙女（おとめ）のキャラっぽい笑顔（えがお）で。

「そう言ってもらえると本当に嬉（うれ）しい。後顧（こうこ）の憂（うれ）いは無用ということか」

――って、言うとカッコイイかな？

そう心の内で思っていた恵太だったが、その様子を見た紗綾が、ぷいっと顔を逸（そ）らした。

「そういう意味ではない。あなたのことを信用していないと言っているのだ」

――あら、あんまり効かなかったか……。いや、そんなことで落ち込んだりしている場合じゃな

いってば。

「それでは、遠慮（えんりょ）無く発言させていただく。配下の心配が減ったということは確かなのだし」

「う……む、わかっているならばいい」

紗綾が口ごもりつつ言った。

そして、恵太は満面の笑顔で立ちあがった。

「皆さん、聞いて欲しい。この状況を作り出した者として、改めてお詫びする。その上で、まずはご理解いただきたい。そして、私にこのように皆の前に立つことを許していただきたい。いや、私が指示を出すから従えというわけではない。私が言いたいことは、私を信用せずとも、皆が、慎重に行動すれば、状況を楽しみつつ、安全に元の世界に帰る」

聴衆が徐々に集まる。皆ひとまずは話を聞いてみようという気になったようだ。

「静聴ありがとう。まず、大まかな説明は先ほどした通りだ。いや、そこすら信用してもらわずともかまわない。皆さんが協力してここを抜け出すことを願っているのみだ。そのため、私が中心となって指揮をとるのは、皆を後押しさせようと思う」

服部は、そう言って窓の外を指した。

生徒たちは、おお、と声をあげた。そして、口々に話しはじめる。

「服部さんなら問題ないか」

「彼は、魔王との戦いのとき、大活躍したそうじゃないか」

「魔王との関係は、いろいろ言われているが……あの魔王と戦った人だからな」

納得の声。驚いたことに、四〇〇人近くが手を開いたが、満場一致を示し手を差し伸べたのを見て、拍手が広がる。だが、田中派が手を握ることはなかった。

「確かに、この人を信用するのは、もう少し自分たちで動いてみて結果を見てからだ。それまでは、余計な戦いで互いに争わず、慎重に……ただ、力を合わせて脱出を求めるために戦う！」

納得の声、皆、気合の入った声をあげた。

それを見た忠雄は、いたく感心した。

――かっこいい大人だなぁ。私にはこういうことできないから感心するよ。

「君は信頼されているのだね」

忠雄は感心のあまり、思わず網元にささやく。

「そ、そうか……？　そうでもないぞ……」

網元は顔を赤らめ、口ごもった。

――謙遜しているんだな。

と、忠雄は網元の肩に右手を置き、左手を高く上げた。その手の先の空中に、大きな地図が浮かび上がる。それは、この世界の全大陸が[illegible]った。

「これがこの土地の姿。以後は、我々の手でこの土地を探索しよう。経験を積めば、自分の身を守る手段以外、特に何もせずとも探索が可能になる。仲間と楽しみつつ、自分の経験も活かせる経験を手にして帰ろう！　しかし、何が起こるかわからない。一丸となって行動することが重要だ……」

忠雄は、ふと言葉を切った。

雷鳴のような、凄まじい音が聞こえてきたからである。

それはジャングルの向こうから響いてきていた。振り向いた全員がそちらに顔を向ける。

土煙がジャングルの上に立ちのぼっていた。その土煙が段々近づいてきている。

「こ、これは？」

絢が聞いてくる。

しかし、当の本人の姫は当惑していた。

「ま、まさか。あなたにもわからない事態なの？」

絢が驚きに目を見開いた。

——こ、ここはみんなを安心させないと……。多分、これは事実から、それを予想できるのは……人間……。

「い、いや、さすがに行動が早すぎることに驚いただけだ」

「早すぎる？」

「あれだけの事実を予測できる者は、人間の魔しかいない。だが、それがこの瞬間的に行動を開始するなど、尋常な事ではない。まだルールも把握していまいに！」

彼女が驚愕の声をあげた。

が、それ以上何を言ったらいいのかはわからない。立ち尽くしていると、絢が声を張った。

「全員、戦闘準備しろ！　これは魔の事実だ！」

その一言に、本人ははっとした。

——ゲームとわかっていても……実際に危険が伴うと、こんなにも何もできないんだな、私は。

しかし、落ち込んでいる場合でないことには、さすがに本人も気づいている。あらためて生徒たちの状況を確認する。

生徒たちの絶望的な顔

彼とて『コンスタン魔術学院』の生徒である。彼の戦闘訓練もちろん一流。精神面も臆することはない。だ

が、彼は号令に応じてそれぞれの得意武器・得意魔法を使用しようとして、ここが現実世界ではないことに初めて気付くこと

になっていた。

「あ……あれ？　俺の、特殊能力……？」

「ナイフはあるけど……マナがこもっていない！」

「魔法が使えないぞ！」

生徒たちはほぼ右往左往か立ち尽くしていることになった。しかも向かい合って。

「こ、これではいい的ではないか！」

何人かは慌てて逃げ惑った。

彼は思考をまとめるのに必死になっていた。

魔王が攻めてきたというなら、もしかしたら別の場所で生徒たちが戦っているかもしれない。彼は頭が良さそうだったか

ら、生徒たちを一刻も早く解放しようとしているのだろう。そうであれば、対話する必要がある。そして、

ここで生徒たちが全滅してしまっても、それはそれで問題が解決したということになるのかもしれない。だ

が、気になるのは魔王の要求があることだ。それがどのように働くかが判明するまでは、生徒たちがこの手で全滅する

ことはなるべくであれば避けたい。

彼は思考をまとめ、改めて大きな声を出す。

「授業は中止！　自分の私物はなんとかする！」

そう叫ぶと、絢村教諭はうなずいた。
「私も行こう」
絢村教諭らは飛び降り、動き出している生徒たちの列の間を抜け、校庭の端に向かって走り始めた。
「私も！」
池教諭もそれに続いた。そのさらに後から、ナイフなどのありあわせの武器を手にした生徒たちも続いた。
ジャングルの向こうから迫ってきたそれは、まるで動きのある巨大な壁のようにこちらに迫ってきていた。地響きのような音と、耳を覆わんばかりの轟きとなっている。
そして、ある者は逃げまどい、ある者は悲鳴を上げはじめた生徒たちの目の前で、その目の前、ジャングルがぱっくりと割れた。
ジャングルの木々を踏みつぶし、現れたのは巨大なサイである。体高は五メートルはあるだろう、本来猛獣ではないサイが、凶暴な光をその真っ赤な目に宿し、馬にも似た速度で突進してきたのである。
「ごはははは！　魔王軍一番槍・魔王軍ころね！　魔王の命令より貴様らを殺しにきた！」
サイの上に備え付けられた鞍の上に仁王立ちしているのは、魔術師の装束をまとった可憐な少女であった。
──もちろん、ころね──は、表情ひとつ変えずに殺意を叫んでいた。
これには教諭に続いた生徒たちも足を止めた。
「うわ！」
「あ、ありゃ、あ、何だ！」

「やばいぞ、こりゃあ……」
「ゲームったって、無理じゃんかよ！」
生徒たちは悲鳴をあげた。
太郎以外の者も、さすがに青ざめている。
「か、監視役？」
「ころねだ。国王直属の監視員。ここの全ての施設にある機械で監視している」
太郎の疑問に、短く答えた。
「知り合いなのか？」
「そうだ」
「それならよかった。話ができるかもしれない」
「話が通じるかな？ ここでは彼女が見回っているってことだろう？ こういうとき、ノリノリになるのがころねだからな」
太郎が戸惑いながら言った。
そして、その通りになった。
「話し合いではない！ 殺し合いと言ったのだ！」
ころねの無機質な、それだけに恐怖を感じさせる声が響く。

サイ――モンスター――ベヒモス――にまたがったころねの差しだした杖から、緑色の線がほとば

しった。その一条の光が、素早く逃げる生徒たちの間を通り抜ける。そして、一瞬後その通過した場

まじい爆発が起こる。生徒たちが数人、宙へと吹き飛ばされた。

「ぎゃああ！」

「ひっぃいい！」

そのうち一名が空中で塵となって消えた。ゲームにおける死亡である。

「……まだシステム通りか」

彼は安堵感に胸をなで下ろした。

そして、ころねに向かって声をあげる。

「待て！ このゲームには不正な要素が紛れ込んでいる！」

すると、ころねは、その生徒は思ったよりも素早く反応した。ベヒモスを操る生徒たちの前に出て、一人を見下ろす。

「わかっています。ですから、生徒たちを早く現実に返そうと、努力をしているのです。こちらでもデータ

を調整させていただきました。先程の演出から察するに、あなたがこのゲームの管理者ですか」

「そうだ。あなたは？ すると、ゲームのルールに従っていない生徒がいるのもわかっているのか

ややほっとする雰囲気である。

「はい。しかし、困ったものですね。殺されれば生徒は元の世界に戻れるのに、抵抗をするなんて」

「いや、普通はあれは怖がる」

思わず納得しつつ、つぶやく。

と、ころねはそれを聞いてうなずいた。

「しかし怖がられているというのは都合がいいですね。逃げる者は容赦なく殺します」

ころねは腕を組み、堂々と言い放つと、片手に持った杖を振った。と、ベヒモスが開いた道から、配下の魔物たち――ゴブリンやオークたち――が次々と這い出てきた。ころねが指揮するNPC軍勢のうち、数は数千はある。彼らは一斉に

インクをこぼしたときのように、あっという間に校庭が端から黒く染まっていく。

彼らは残った一般生徒の群れの横を走り抜け、逃げていく生徒たちを背中から斬りつけていった。

「うわぁああ！」

「いやだぁああ！」

悲鳴とともに、次々と生徒たちが折り重なる。

「男は殺せ！　女は犯せ！」

無慈悲に、無感情に、ころねは叫ぶ。



「お前ら、危ない問題とは思っていたが……」

絢介はあきれる。

「これは計算しての確信犯なのか？」

満足顔で、ころねがうなずいた。

「当然です。私の効率よいゲームオーバーを目指しているだけです。こちらに住んで頂ければ、簡単に全滅エンドを迎えることができるかと思います」

「しかし、私も責任がある。できるならばこちらに住んでいただきたい」

絢介はそう言った。

しかし、ころねは首を横に振る。

「それならば、なおさらあなたの家に住人として帰ってもらうべきです。お互い、こちらでさらってい

という手もありますが？」

そして、ころねは、ちらっと絢介の顔を見た。

「ここでさらわれておけば、いやらしい服を着た[illegible]さんの前に出ることになるわけです。この「ゲーム」の原作ルールもありまして、男女が一晩同じ部屋で過ごすと、ゆうべはおたのしみでしたね、とメッセ

ジも出るという……」

絢介、ぼんっと爆発的に顔を赤くした。

「ばっ、ばっ、馬鹿者……！ そのようなこと、するわけが……！」

「しかし、ちょっと油断しましたね？」

「ええ、ええい！　からかうな！」

「ともかく、こちらは粛々とゲームを進めます。お気に召さないのなら、お二人を失格してゲームを

めましょう。他の生徒は始めます。少し寝ていてください。起きたら、魔王の城に捕らわれますように」

ころねは杖を振った。そこから、鎖線が発せられた。

「危ない！」

浦感絢がかばった。が、その鎖線が、浦感絢の身体を一遍に貫いた。

「な……！」

痛みに浦感絢うめく。

――ゲームでも痛いのか。

浦感は思う。そして、彼女はころねが何をしたのか理解できた。これは致命傷ではない。気絶させるだけの

一撃だ。

そして、浦感絢は意識を失った。

○

ここで時間わずかに戻る

ころねの襲撃で真っ先に逃げ出して校舎へ入ったのは不二子(ふじこ)だった。

――ゲームとはいいますけれど、殺されるのは気分がよくありませんし。あの少女が言うのの時間た

なところがありますわ。これは少し生き残って調べてみないといけませんわね……。

校舎の構造は変わっていないが、その中身はずいぶんと変わっている。教室の配置が異なっていた。

――……異世界。都合がいいですわね

不二子は後ろを振り返って声をあげた。

「武器がありますわ！　皆さん、手にお取りになって！」

そして不二子はずらりと並んでいる棚、壁に立て掛けられている剣(けん)などの武器の中から、自分も使い慣れている鞭(むち)を選

んで腰に結んだ。

逃げ込んできた生徒たちが次々と武器を手に取り、職業の確認をしはじめた、と、隣(となり)の部屋からも声が聞こえてくる。

「こっちは魔法職の集積である！　使える職業(クラス)の奴(やつ)はこっちへ！」

――そういえば、自分のクラスを確認していませんでしたわ

不二子は自分のスクリーンを開いた。

クラス：調教師

レベル：１

ＨＰ：５

・筋力８
・魔力１５
・兵力０

――、兵力なんてのもありますのね　ろくに説明ありませんでしたが　ころねのあれを見
ば　何が苦手かは一目瞭然（いちもくりょうぜん）……。兵達もレベルを上げなければなりませんわね　遊びは遊びですけ
れど　苦手だけ経験を積んで、長所も活かし……　何より魔王様も今まで以上に強くなっていただかないと。

――、一人こっそりと特訓を決意した手下である。

――となると　皆のレベルを上げて、最後は……魔王様を倒（たお）していただく。そういう方針で行きましょう。

そう意気込んで立った手下は、隣の魔道具屋へ行き、自分でも使えるレベル１の魔道具をみつくろい、小脇（こわき）に抱（かか）えた。そして
の生徒たちの準備が整ったのを見て、声をあげた。

「皆様（みなさま）！　どうせこの砦（とりで）は落ちますわ！　最後ならばらばらにジャングルに逃げましょう！
そこでレベルを上げ、各々（おのおの）が魔王を倒す時が来た時、のろしを上げて再会いたしましょう！」

次々と賛同の声があがる。

「そうだな。それが俺たちにとって一番良いことだ」

「もう少し遊べるしな」

「いずれにせよ、魔王城はリアルすぎて殺されるのが嫌（いや）だぜ」

「二人、わかれて逃げるとするか」

生徒たちは次々と寝室を出て行く。

「お姉様、一緒に逃げましょう！」

天子を慕う後輩たちが、天子の下に走ってきた。にっこりと微笑み、天子はうなずく。

「ええ、一緒に逃げましょう。準備はよろしくて？」

そして、天子たちは固まって寝室を出た。

廊下にまで戦いは及んでいた。統率のとれていない生徒たちは、扉を閉ざすタイミングを誤ったのだ。ころねの魔物の群れが、廊下で生徒たちと剣を合わせていた。怒号と剣戟の甲高い音が耳に痛い。

「お姉様、早く！」

後輩の子が天子の手を引く。

しかし、天子は逃げながらも別のことを考えていた。

――わたくしの考え通りなら……ちょっと楽ができるはずですわ

天子は一緒に逃げる二人の顔を見た。彼女たちはこの状態に恐怖し、怯えているようだった。無理もない。彼女たちにとって、状況は非常にリアルなのだ

――ということは、この子たちの動きが、落ちているはずですわね

天子は内心ほくそ笑む。他の生徒たちと違うルートを天子は選んでいた。この廊下を走っているのは、天子たちだけだ。

だが一匹のオークが天子たちを追ってきている。一緒に逃げる二人は戦いという状態ではないらしい。

「あなた方、先にお逃げになって！」
平子は声をあげた。
そして、二人を先に走らせる。彼女は、平子の方に心配そうに振り返ったが、もう一度平子が声をあげると、再び前に顔を向けた。
そのタイミングを平子は見逃さなかった。オーク兵に向かって鞭を振るうと、剣の柄に巻きつけ、その先端をからみつかせる。
「ふっ！」
鞭を戻し、剣をからめ取る。
そして、平子はその鞭を戻す勢いを殺さず、からみついた剣を、逃げていくオーク兵の背中に向かって放った。
「きゃあああああ！」
背中に深々と剣が突き立てられたオーク兵が倒れる。そして、すぐに剣と共に光となって塵と変わっていった。
――思った通り。
平子はほくそ笑んだ。
他の生徒は、死んだ生徒は、オーク兵が殺したのだと思っているだろう。
――プレイヤーを殺して得られる経験値はかなりのものですわ！
平子はレベルがひとつ上がっていた。武器を持たぬオーク兵に、鞭を何度も叩き込み、これを倒す。
そして、何食わぬ顔をして、逃げた生き残りの二人と合流した。

「大丈夫でしたか、皆さん！」
「ええ。しかし、一人オークの兵が投げた剣に貫かれたみたいで……」
「悲しむことはありませんわ。衝撃的な光景かもしれませんけれど、ゲームはゲームですもの」
平手はにっこりと微笑んだ。

○

「五百名殺してまいりました」
城に戻ったころねは百鬼の前でかしこまった。
「すごい！　すごいね、ころねちゃん！」
玉座に座る百鬼の肩にもたれたけながら手を叩いて言う。
「めちゃくちゃ、悪の帝国みたいだから、やめようね、そういうの」
百鬼がぼやく。
「まぁ、戦争ですし、戦争」
ころねはそう言ってから、水晶玉を百鬼の前に突き出した。
そこには、倒壊した校舎、荒れた校庭、そしてオークの兵の死体が映し出されていた。
「ずいぶんひどいね。でも、生徒の姿はない、か」

「はい。あくまでゲームの範疇（はんちゅう）で済だということです」

ころねは話題を下げて、代わりに大きめのスクリーンを空中に展開した。

「そして、これが目標、恨（うら）みの声です」

「恨み帳？」

新規スクリーンを覗（のぞ）き込む。それはネットの掲示板（けいじばん）だった。

127：名無しさん@死体：ID:mKq7EtZhO
痛いじゃねーか、ゲームなのに。

128：名無しさん@死体：ID:kAE5SjWcO
紗伊阿九斗、現実に戻ってきたら殺す。

129：名無しさん@死体：ID:JW75Oizl0
死んだってことは弱いってことだ。あきらめようぜ。orz

130：名無しさん@死体：ID:KtBdqH4A0
でも俺はころねちゃんに直接殺されてイキそうだった。

131：名無しさん@死体：ID:e9qeMSmd0
俺、サイに踏まれた。＼(^o^)／

「まぁ、生きているならいいけど……」
阿見は微妙な表情になって、ため息をつく。
「あちらのゲームの情報はこちらでも閲覧できるようです。向こうからもゲームの世界を観察しているようです」
『ふうん』
「会議室の映像データだけは見ている模様です。記録も確認しました」
「日本中の人が入ったときと同じか。あのときも、先輩は自分の部屋の映像を見ていたみたいだったからね。ともかく、外のデータが入ってくるのはありがたいな」
阿見はうなずいた。
「さて、では、発見次第、狩りますか」
ころねが立ち上がる。
「おい、また物騒なことを……」
「一度はじめた虐殺は、全員殺すまで終わらないのです」
さらに物騒なことをころねが言うが、それを避けながら制した。
「待て。ちょっと、変だよ？」
「変？」
阿見は振り返る。

「ゲームの内容が、ちょっと変わっているかも」
[illegible]けながらスクリーンを覗きながら独り言をする。
「どこが変わっているって言うのさ？」
「うん、あのね、最終目的は魔王を倒すことだったでしょ？　それが、聖杯（せいはい）を手に入れることになってるんだよ」
ころねが開いたスクリーンを指さした。そこには、確かにクリア条件が記されていた。
「誰かがゲームの内容を変えている……。そういうことになるのか。[illegible]であると言っていたが、それが[illegible]はじめたということになるのか」
[illegible]が声をあげた。
ころねがそれを見てうなずいた。
「それでは、一刻も早く[illegible]しましょう。脇目（わきめ）もふらずに[illegible]しましょう。[illegible]ましょう」
「それほど生き生きした君を見るのははじめてだよ……」
[illegible]がぼやいた。

○

一方、こちらは[illegible]である。

「ボクの今後どうしようってんだ？」

不機嫌な声をリリィはあげた。

いや、事情は聞いている。乗組員が誰もいなくなったと聞いて、慌てて帰ってみれば、どこからかぱらぱらと船員が戻ってきたのだった。しかも、彼はゲームに取り込まれていたとふざけたことを言っていた。

「しかし、魔導の力が使用されたとすれば、納得もできるでありんす」

「うが」

「どちらかといえば、人が集まった時の情報を得る装置が取り付けられたというところぎゃ。魔力を封じる装置があるというそれの」

殺気立ちそうなるリリィをなだめるように言った。

「ゲームと現実の世界が関係あるとすれば、このゲームの世界を調べて見るのがいいんじゃないっすかね？」

乗りかかった船というか、完全に巻き込まれてしまったというか、ゲーム世界に入っていたヒロシが、マナスクリンを見ながら言った。

「冒険者の名前」

興味なさそうにマナスクリンを覗き込んだリリィだったが、その名前を見て、はっとする。

「波多野……波多野。カンナが追っていたのは、大北だったな」

「そうだぎゃ。四谷の事件に関与しているのは間違いないと思われるぎゃ。しかし、データはすべて消されていたし、今は行方不明……」

「そりゃ、ゲーム内で放送しているからだ！」

わかった、とリリィは立ち上がる。

「どうするんだぎや？」

「状況証拠しかないが、それならそれで脅しがかけられる！　関係者にあたって、ちょいと締め上げようじゃないか」

リリィは勢い込んで言った。

「そんなえらく物騒なことを……」

ヒロシが心配して言うと、その手をがっしとリリィが掴んだ。

「え？」

「お前も来い！　どうせこの件に関係しちまってるんだからな」

「うわ、ちょ、ちょ、勘弁してくださいよ、社長」

しかし、ヒロシの抗議は見事に無視された。

○

「う……む……」

紬は目を覚ました。

そして、すぐに自分がどのようにして気を失ったかを思い出し、がばっと起きあがる。現実のそれと[illegible]

い、ゲームにおける身体の感覚はすっきりとしたものだった。頭痛も何もなく身体が実にスムーズに動

「これは……」

綾斗が見たのは荒れ果てた校舎。すでにころねの率いる軍勢が撤退した後だった。校舎は無惨に崩れ落ちている。そ[illegible]

して生徒たちはどこにもいない。

「く……。これが戦いというものか。ゲームとわかっていてもあまり気分のいいものではないな

それに、こちらが生徒を全員把握していないというのも」

横で目を覚ましていた沙織が顔を起こした。端整な顔が、身体的な痛みではない苦痛に歪んでいる。その気持ちは綾斗もよくわか[illegible]

った。自分のせいで多くの生徒たちが死んだことを悔いているのだ。

「確かに気分の良いものではないが、頭を切り換えなければ先へ進めない。まぁ、それこそ所詮ゲームだし深刻な[illegible]

ることもないのだろう？」

綾斗は笑いかけた。

ほっと安心したように、沙織が目を開ける。

「すごいな、綾斗くん、と言ったっけ。戦い慣れているのだね」

「性分と言うか、褒められた言葉ではないと思うが」

綾斗がわざと胸を張ってみせると、沙織はようやく笑みを見せた。

「失礼した。そうだな、その格好の良い言葉を参考にさせてもらえれば、私はあなたの言葉に胸を打たれたんだよ」

淡瀬の笑顔が、なぜか綺絢はまぶしく見えたのは、その表情のせいだけでなく、心の素直さをうかがわせる屈託のない表情、心からの喜びの言葉のせいだったろう。

——男が最後に持ったのは……五百人。

綺絢はふと、そう思ったが、慌てて首を振って考えを追い出すように努めた。

「ああ、ありがたく受け取っておく。そ……そうだ、何人くらいに逃げられたのだろう？」

その言葉に淡瀬はスクリーンを閉じ、

「……かなり殺されているな。百人どころか、ものの半分はやられたものだ。自分の限界に近い数字だと思う。彼女はパラメータで補えない部分がある。純粋にプレイヤーの腕だ」

「それはすごい」

綺絢はむしろ感心して声をあげた。ころねの戦闘能力が高いとわかっていても、憧れるものがある。

「だが、それならそれで問題ない。あの四人組の優秀さなら、より多くの生徒を集めて戻ってくれるということでもあるし」

「しかし、うちの生徒は戦いには慣れている。散散になってジャングルに逃げ去ったようだ。彼はゲームのクリア条件として魔王を殺すことを望むだろう」

「それなら、私たちも行こう」

淡瀬も立ち上がった。

「行く？　行くって？」

絢斗はそう思った。
彼女はうなずいて説明する。
「ジャングルに隠れる場所はそこしかない。うまく戦えるようにしばらく経験値を貯めるしかないよ。それにモンスターが武器を落とすこともある。装備品を揃えないと、程遠いところねという問題って言った通り、ルールを無視した何者かが潜んでいる。それを調べないことには、手を下すことはできない。だから、ゲームの世界を自由に歩き回るために、経験値とアイテムが必要なの」
そう言って、彼女はジャングルに先に立って入っていった。
絢斗は逡巡する。
「え……？　ちょっと……」
「どうした？」
「いいや、一人だけになってしまうということか？」
「待てばいいじゃないか。協力してやっていこう。それに私はあなたに信頼に似たものを抱いている。大丈夫よ」
彼女は元気よく笑う。
「そ、そうだ。それはそうなんだ。ああ、わかった。そうだよな」
絢斗はそう思った。
──心配ないのはいいが……。男女二人きりだとわかっていないような態度はどうなのだろう？　いや、ゲームだからということなのか？　それとも……。

綺羅はもちろん、＝波紋が悪いということを知らない。

――ええい、緊張している場合か。紳士的な相手なのは問題ないのだし。

綺羅は先に立つ波紋の後を追った。

それから日暮れまでは、波紋の指導で狩を行うことになった。

「ほ！」

波紋から借りた短剣で、ジャイアントバットを斬り落とす。ジャイアントバットは甲高い声をあげて落下し、骸をさらした。いずれ体が消えるのだろうが、プレイヤーとは違ってしばらく死体が残るのが、この世界のモンスターであることの証明。そして、死体の横に時折アイテムが現れることも。

「ナイフか。自分で稼いだものには違いない。借りた短剣は返そう」

綺羅はナイフを逆手に構えて振った。

「それに、これは良く馴染む」

「君は忍者だからね。なるべくスハラの宿屋に拠点があるといいんだけれど。あと少し倒して、装備が使えるレベルまで行こうか」

それからも波紋の指導で、綺羅はレベルを上げた。

やがて日が暮れる。

「ゲーム内の一日は、現実では一時間ほどになる」

キャンプを張りながら、渉が説明した。小さな野営の標のようなものを設定すると、テントと焚き火が、ジャングル

の空き地に現れる。

「便利なものだ」

納得し感心して、焚き火の火の横に座った。

「ところで、レベル上げは継続するとしても、時間的にどうしたらいい？」

そう聞くと、渉はスクリーンを開いて周囲の地図を出し、その中央を指した。

「ここに強力な魔法石がある。守っているモンスターも強いけれど、ちょっとしたコツみたいなもので低

ベルでも倒す方法がある。それをやってみよう……。あれ？」

「どうした？」

渉は不思議そうな顔をしていた。何かがおかしい、というように首を振る。

「ゲームの時間が変わっている。聖石を探すこと、だって？」

「ゲームを改変できるのか？」

「もちろん技術的には可能だ。だが、それは一旦中に入ってしまった私はできない。可能なのはゲームの外の者だが、そ

れも当然ながらプロテクトがかかっている。そうでないなら……。私が言っていた重要な関係が隠れている

はずだ」

渉は顎に手を当てて考えこんだ。

「気をつければいいのだろう？　そこまで悩むことはない。それに、まだ事故は起きていないよ
うだ」
元気づけるように綺羅が言った。
「[illegible]の君、凛とした精神は見受けられる。近くに出会ったのが[illegible]で良かった」
柔らかい声で少女が言った。
「な……褒めすぎだ、と言ったぞ」
綺羅は、ぷいっと顔を逸らした。
「いや、本当に私はそれほど心を開くのが得意ではなくてね。いつも正直でいようと思ってはいるのだが
も多はない」
「なんと答えていいか困るようなことを言うな……わかった。しばらくは一緒にいなくてはいけ
ないのだ。こちらも[illegible]話を聞くようにする」
[illegible]のまっすぐな物言いに、照れながらも綺羅が応じた。
「助かる。実は、この[illegible]ミュニケーションのすべてをまかなえぬかと考えて作った技術なのだ」
「コミュニケーションのすべてを？」
「そう。[illegible]「コミュニケーション」だよ。体内から離れてすべてを自由にできる時間があれば、人はもっと楽
られるのではないか、とね」
「失礼。率直に言って、難しい話だな」

綺納は苦笑をして首を振った。

法水は、寂しそうに微笑んだ。

「愚痴みたいなものだよ。つまらない話で申し訳なかった。もう寝よう」

焚き火から離れ、法水は立ってテントの幕を開ける。

「ちょ……」

綺納は赤くなって手を振った。

「……寝ようって、ひとつのテントで？」

その言葉に、法水は軽く首をひねった。

「寝ないの？」

「ば、馬鹿。そんなわけあるか！」

綺納は声を少し大きくする。

それでも法水はさらに首をひねった。

「それは、そうだよね。狭いもの。……ああ！」

ぽん、と法水は手を叩く。

「君、綺納にもキャンプはあるんだよ」

「え？」

綺羅のポケットを探る。確かに、綾波が持っていた物と同じようなテントがあった。これを持っていれば同じように交換されるのだろうが……。

——私も、なんだと思って……。

胸騒ぎにも似た不安感が綺羅にわき起こってくる。

「寝るぞ」

綺羅の分のテントを展開して、潜り込んだ。そして、中にあった寝袋にくるまると、あじけない天幕を見つめた。

——ああ、もやもやする……。この感じ……。そうか、あいつが私に与える感じと似ているんだ……。

綺羅の死に顔を思い浮かべてしまい、独りテントの中で寝袋ごとごろりと転がって身をよじった。

——そういえば、二人どこか似ているような……。ひょっとして、私は、そういうタイプに弱いとか……。

綺羅それから一晩ばかり悩むことになった。

。

——危ない橋を渡ることにドキドキするタイプじゃあないんだがな

自嘲的（じちょうてき）に笑ったのは2Vである。

危ない橋は渡らない。それは、ポリシーを超（こ）えて慣習化した行動として組み込まれていた。危険な行動は手ずから行わず、情報が漏（も）れそうになった時は自爆（じばく）する。服の購入（こうにゅう）すら手ずから行っており、さらには一般（いっぱん）で使用されるモデルを上手に使っていたから、足が付くこともなかった。

しかし、今はわずかに怯えつつ端末（たんまつ）に触（ふ）れている。

最高レベルのセキュリティに対してハッキングをかけなければならないのである。そして、

そのためには、どうしてもマナの固有振動（しんどう）——つまり2Vの本体の個人認証（にんしょう）が必要なのだった。要するに『CIMO8（サイモエイト）』としての2Vの固有振動を同調することで、神の領域まで降りようというのである。

——CIMO8の権限は、天界のレベルまでは降りられない……。そこから先はハッキング……と

そのレベルの領域まで潜るのには理由がある。

「天界もあの記録には気づいていないだろうさ……。どうでもいいデータだったのだからね」だが、それが本当なら……」

2Vは独り言を漏らしながらマナスクリーンに、忙（いそが）しく触れた。

体中の血色の悪い少女である。細い腕、脚（あし）も生まれたままの白い服に包（つつ）み、埃だらけの、薄暗（うすぐら）い部屋でひたすらに端末を操作する彼女（かのじょ）は、あある種の美しさに満ちていた。

——本来なら、真面目（まじめ）に行動したことのない自分が、こうしてギークのように端末を叩いているなんてお笑いだな。手を休めれば、眼（め）も痛い。まさか、こんなことに夢中になるなんて思ってもみなかったさ。

2Vの目の前のマーナスクリーンに、文字が流れ出す。メーギスの神経層にたどり着いたのだ。

「解除プログラム書き換えの際しか潜れない……領域……」

2Vはつぶやく。

《条件を確認しました。条件を選んでください》

、強力、つまりメーギスの神経中枢に伝わる周囲が存在する。どうやら見事に騙されてくれているようだ。

「封印されている魔法データを閲覧したい」

《了解。データは閲覧済みです。それらは再閲覧出来ます》

『見れば分かる』

2Vはマーナスクリーンに流れ出した情報を、死に物狂いで追い、記憶した。

そして、一度の閲覧ですべてを脳内に書き込むと、即座に接続を切って、最小限の痕跡を消去した。

一連の作業を終えた後、やがて堪えきれぬという風に笑いはじめた。

「へ、へへ……ふふ……。ははは！　まさかここまでのものとはね。こいつはいい。私の

すべてである。そんな手順を踏むなんて、一度たって考えたことはなかった。こんなに簡単なことだ

ったなんて……。あるいは、拍子抜けと言ってもいいのか……」

2Vの精神を満たす。だが、さすがに疲労が混じりはじめる。

自分の思考回路をそれでも確認するほどの、ピンクに染めながら、2Vは再度マーナスクリーンを開閉作った

ムのセキュリティを破る

「だが……これは待てるな。あいつが中に居るんだ。それならいくらでも危ない橋を渡ってやるのも
いいか、ふん、この年齢(ねんれい)になって普通(ふつう)の人がどうして日々を楽しく暮らしているかわかった気がす
るとはね。そうか、下らないことにもこんな風に熱中していたんだろうさ。まったく、どうし
ようもないね」

そして２Ｖはにこやかにプログラムを改変し、"罠(わな)"を仕掛(しか)けはじめた。

「我々の魔界……つまり、そいつは、時の世界の管理システムを破壊(はかい)するために生み出された存在……。そして、今も

それは外部を通過する……！」

○

リリィに連れられて来たヒロシは、どこにやってきたのかに気付き、さすがに息をのんだ。

ギスの神、神殿(しんでん)である。

外側もあるが、神殿内であっても、拝殿(はいでん)までは一般人(いっぱんじん)も立ち入りが可能になっている。内部には娯楽施設(ごらくしせつ)を設けたり

その周囲にちょっとした繁華街(はんかがい)を築くことも多い。

とはいえ、リリィが入り込んだのは、一般人も立ち入り禁止の土地である。最奥部、神職のものが勤めている場所である。

「い、いいんですか？　こんなところ……」

ヒロシはおどおどして言ったが、リリィは首を振った。

「問題ない。秘書の人と話してアポは取ってある」
「なんだ、それは良かった」
『行方不明』
リリィはぽつりとつけ加えた。
「ちょ、なんですか、それは……！」
ヒロシは慌てるが、リリィは涼しい顔だ。
「今から行方から探していろ」と、メールを送りつけた」
「それだけ？」
「それ以外何か必要なんだ？」
「……いえ、それならそれで良いですけど。誰に？」
「秘書の人」
「うわ！　ちょっとかんべんしてくださいっす！」
「相手が偉いからって何か怯えることがあるか」
リリィは笑い飛ばしたが、一般職員がいる通路ならともかく、国家中枢の特別エリアに入る扉の前には、警備員が立っていた。
警備員は低い声で言った。
「ここを通るには許可が必要なんだ」
「ひ、す、すいません……」

ヒロシは謝りかけたが、リリィは余裕の[illegible]、その顔を見上げて、にやっと笑った。

「白石の娘だ」

「[illegible]……」

[illegible]リリィの自己紹介に、驚きの[illegible]見せたが、すぐに[illegible]職に就く者の[illegible]なると、[illegible]だした。

「[illegible]娘んでも、[illegible]す。少なくとも[illegible]ゲストパスが」

「どうだっていいさ」

リリィは素っ気なく言った。そして、自分の右拳を左手で撫でて、にたりとする。

[illegible]動き、ざわっと緊張した空気が流れる。

しかし、そこに割って入った声があった。

「いいんだ、通してくれ」

その低く、優しげな声は、奥の方から響いてきていた。

「[illegible]……」

[illegible]て、硬直した。

現れたのは、[illegible]英彦。白髪[illegible]頭をきっちりとセットした実直そうな男である。しかし、見る人が見れば、その目には、怖いものが宿っていることがわかる。狂気にも似た意志の強い光だ。

「ご足労いただき、恐縮です」

リリィは、腰をかがめる正式な挨拶をした。女性なので帽子をとる必要はないが、大きいサイズの小粋な帽子を脱がぬことと、先程までの態度と合わせると、実にふざけた娘にも思える。

が、主人は、リリィとヒロシを奥へ通した。

そして、使用人達に話が聞こえなくなるまで廊下を進むと、口を開いた。

「娘の態度を聞いた。それを使ってこの私に会うとは、さすがにあの君の娘だな」

「血は、と言いたくありませんがね。未だに殴り合いにも応じてくれる父ですから」

「親というのは、娘のことを心配するものなのだ。君の年齢ではわかるまいが」

「残念ながら、跡継ぎを気にするほど年を食っておりません」

リリィの物言いは、先程からヒロシの肝を冷やしっぱなしだった。今のところ主人が笑っているからいいのだが。

使用人達を下がらせると、主人はデスクの向こう側に回り込み、広い椅子を勧めると自分も座った。そして、マナスクリーンをき、リリィに話してくれ、と促す。

「鳥籠計画」

リリィは、まずそれだけ告げた。

それは、主人の眉をぴくりと動かすだけの効果があった。

「それに、冒険者が関係していると言いたいのか？」

「そうです。そして、そこには彼女の作ったゲームソフトが関係している。どのようなきっかけでそ
うなったかはわかりませんが」

リリィは[illegible]に向かって、自分が開発したマイナスクリーンを滑らせ、手に入れた情報、そこから推測したことを開陳
て見せた。

[illegible]という名の、[illegible]を封じ込めようという[illegible]動ていること。

その[illegible]メギス[illegible]防御用に使用している[illegible]であること。

[illegible]の[illegible]が関係しているらしいこと。

そして、[illegible]事件に巻き込まれてしまったこと。

「[illegible]さんは[illegible]追跡させていただきました。証拠はないものの、この一件の[illegible]疑いありません。

そして、[illegible]さんがこの[illegible]中いることが何よりの証拠」

リリィはスクリーンに、ゲームの[illegible]映し出した。そこには[illegible]データが表示されている。



「お嬢さんと王女さんが同一人物であるかどうかは、調べればわかるはず。両者の遺伝子データを照合してみればよろしい。

ここでならば、それができるはず」

リリィは言った。井上俊彦は、面白い、と首を横に振った。

「いや、調べるまでもないだろう。ある程度ではこちらもわかっていたことだ」

「ある程度で？」

「彼女がネットで情報を収集していること、だ」

「計画の関与については？」

「それも知っていた。しかし、学院を巻き込んでこのようになっていたことははじめて知った。それを報（しら）せに来たということは、どのような取引を望んでいるのかね？」

俊彦は、すでに諦（あきら）めにも似た心境になっているのか、それとも別の考えがあるのか、そう言って挨拶

た。

リリィは、にやり、と笑う。

「計画の首謀者（しゅぼうしゃ）の情報を出して頂きたい。それがあれば、学院の諸々（もろもろ）のこと、我々が内密に処理いたしましょう」

「コードネーム２Vのことか……。わかった。出来る限りのことはしよう」

「やけに話が早過ぎますね。少し裏があるのかと疑いたくもなりますが」

「何か企（たくら）んでいるわけではない。、自分自身が気に入らなかった。[illegible]　そういうことだよ……。おや、見ま

え」

茂彦は、マナスクリーンをリリィに向かって滑らせた。そこには、確認を進めていた不審端末のログが表示され
ていたのだが、その端末の位置情報が分かったのだ。
「端末は自宅で使われている……！」
リリィは息を飲んだ。
「犯人がそこにいる……ということはないだろう。接続している場所が違う。ハッキングだ」
茂彦が言った。
「ということは……そいつが2V……！」
リリィの表情が変わる。
その顔を見た茂彦は、リリィに向かってうなずいた。
「その可能性は高いな。娘のためだ。取り返しがつくまでは大人しくしていたまえ。連絡先を教えておいてくれ。随時こちら
に情報を送ろう。君はその人物の接続場所に行きたいのだろう？」
「……ありがたい！」
リリィは頭を下げるや、事務室を駆け出して行った。

○

十日目、[illegible]のレベルはあがって行った。

「コツみたいなものはつかめてきたかな」
綿納の武器は田中から変わり、最初からレベルの高かった激しいくつかレベルがあがり、かなり強いモンスターでも
ってもコンビネーションで倒せるようになってきていた。
「この分なら、マップの中央へ行っても大丈夫だろう」
彩波はバグベアーを倒したところで、激波がそう言った。
「あの強い武器があると言っていた？」
「そう。魔王を倒すのに有効な剣だ。このゲームでは最強の武器よ」
「そういうものなら、みんな狙っているんじゃないのか？」
「守っている怪物が強いから、コツを知らなければ倒すのは難しい。それを伝えられずに皆が散散に
なってしまったのが残念」
「剣の取り合いになってしまうよ。うちの生徒だと」
綿納が言うと、彩波が笑った。
「ははは。争いごとがゲームにまで持ち込まれるのは、悲しいことととらえるべきか、争いを楽しんで
いる者がいるのだから良いことだととらえるべきか迷うね」
「争いを制御するのが武士と学んだ」
綿納としては何気なく発した言葉だったが、彩波はいたく感心したようだった。

「なるほど。他（ほか）の宗派の考えも学んでおかないといけないね。傾聴（けいちょう）すべき意見だ。いや、何とも素晴（すば）らしい考えを持っているということなのかもしれないが」

「ま、毎度そのようなことを不顧……」

冗談（じょうだん）めかしたが、それでも顔を赤らめた笑顔（えがお）で、綱村は顔をそらした。

ただの耳目が、自然な会話ができる程度までは大人に馴染んでいる。

「気を遣って言っているから、顔負けだけなのだが」

「そ、その話はもういい。それより、その目的地である場所というのは……」

綱村が言うと、法彦は前方を指差した。

「安全と言うと、もうそちらには向かっていた。あれがそうだ」

前方は岩山がそびえていた。

「ということは、あの山頂」

綱村は山頂を見上げた。

ふもとまで近づいてみると、山頂は岩だが、道のようなものがある。その先は、岩に打ち込まれた鎖（くさり）を伝って行かねばならぬ場所もあるらしい。

「この道中、強力なモンスターに襲（おそ）われるのか。それは厳しいな」

綱村がそうつぶやくと、法彦は大丈夫だと笑った。

「頂上は火口である。そこには狭いながらもまた道がある。そこをうまく逃げられれば、敵対する相手は狭いところで縦列移動できる。そういうやり方だ」

「なるほど。裏技というやつか」

綿貫と綿貫は、狭い道に足を踏み入れた。

道は険しかった。ただし、頂上に近づくに従って足場はないに等しくなった。だが、綿貫はさすがに高所には強い。手こずっている少女の手を引きさえして、頂上へと向かう。

「火口の周囲は道で円になっている。そして、その一部が狭い。あそこだよ」

火口をぐるりと囲む直径数百メートルの道を見渡せる場所に来たとき、少女がある一点を指さした。そこは確かに人一人がやっとれる程度の道。

「火口の中に剣がある。そこに降りる道を行くと、護衛ランスターに出会うことになる」

少女が解説する。綿貫はうなずいた。

「そして、円周をまわる道に戻って、あの狭い道まで誘導する、と」

「そういうこと。中間で逃げる。そこさえ通過しなければ大丈夫」

少女は請け合った。

そして、火口の中へと降りる道を進んだ。

数十メートルも下ると、池に溜まった水のように、溶岩が満ちている場所に到着する。

「熱気も立ちのぼっているが……溶岩にどうやって入るんだ? それに、どこにも剣はないが?」

足下に、真っ赤な溶岩が見つ、絢が聞くと、彼女達が逃げる準備をするように促す。
「モンスターを倒すと、溶岩がなくなる。さて、出てくるぞ」
その言葉が終わるか終わらないかのうち、溶岩の湖の中央が、下から噴水でも吹き上がったかのように、もこ
りと盛り上がった。その、溶けた岩の噴水は、すぐに勢いを増し、溶岩の飛沫を吹き上げながら十メートル以上の高さにま
で成長した。
「溶岩が……！　その下から何かが……」
「あれがイフリート。追ってくるぞ」
彼女達が先に立って走り出した。絢も後を追う。
走りながら振り返ると、十メートル以上の人型の存在が溶岩の中からちらりと見えた。そいつが溶岩の中を歩いてくる。黒々た
の何かの周りに溶岩がまとわりつき、それがひっきりなしに炎を吹き上げている。
「ゲームとわかっていても、こうして見ると凄まじいな……」
絢が感嘆した。
十メートルの強い炎の魔人だ。その迫力は、驚嘆に値する。
イフリートはゆっくりと絢達に近づいてくる。いや、ゆっくりとした動作ではあるのだが
歩幅が違う。絢達が走っているのに、あっという間にイフリートは背後まで迫ってきていた。
「急ごう」

静は沙也加に言い、絢音を先に行かせた。今は坂道を登っているからイフリートと速度は互角だが、平坦な一本道に入れば、わずかにイフリートには逃げきるだろう。

絢音はイフリートとの距離を保ちつつ、一本道に入った。そして、先の道を左に曲がり、さらに走る。

が……。

「逆だ！　そっちじゃない、右だと……」

沙也加が声をあげる。

「え？」

絢音は足を止めた。振り返ると、沙也加は少し離れた位置にいた。そして、すでに二人の間にはイフリートが割って入ってきているところだった。

「しまった……！」

よく考えれば、絢音は右左という言葉を誤解していたことに気づいた。このあたり、きちんとしているように見えてドジな所がある。

しかも、イフリートは絢音の行く方向に向かって先回りしていた。

「うわっ……！」

こうなると、絢音は前方に向かって走るしかなかった。

「駄目だ、そっちに逃げると、道が荒れていてうまく走れない。追いつかれることになる」

沙波がそうイフリートの背後から指摘したが、すでにこうなってしまった以上はどうしようもな
い。
「ど、どうすればいい？」
絢斗は慌てて問う。
「背後から援護するが……。そもそもイフリートは標的を追い続けるように出来ている。なんとか戦ってもら
うしかない」
こんな状況でも極めて冷静に沙波が言った。
「な、なんとか……ね」
絢斗は振り返ると、迫って来るイフリートに向かって跳び、その勢いのまま鋼の拳で一撃を与える。
「当たった！」
そして、再び背後へ跳んで戻り、攻撃の効果を確認しようとイフリートを見る。
「……な！」
しかし、イフリートの進撃を止めるだけの攻撃ではなかったようだ。溶岩と炎に包まれた巨体が何事もなか
ったかのように前進してくる。
「鈍いため攻撃を避けるのは容易いが、耐久力は高い。そして……」
沙波が再度言いかけたが、その瞬間、イフリートが左右を大きく広げ、胸を張り、天に向かって吼えた。と、その
咆哮とともに胸に無数の粒状の盛り上がりが現れる。

「何？」

絢斗は戸惑(とまど)う。

「……無数の弾(たま)を飛ばす。これを避けるのは無理」

ポーラがそうつけ加えたときには、すでに絢斗の周囲に無数の燃える岩が降り注いでいた。

「うわぁああ！」

絢斗はそれでも岩を飛び、降り注ぐ岩を避け続ける。が、あまりにも数が多かった。

「ちょ……これは……まだ止まらない……！」

悲鳴をあげる。

燃える岩のひとつが絢斗に直撃(ちょくげき)した。

吹き飛び、さらに岩を喰(く)らい、地面に叩(たた)きつけられる。そして、ようやく燃える岩の雨(や)が止んだ。

「いけない……」

ポーラが回復魔法(まほう)を使った。

絢斗は何とか立ち上がるが、状況は好転していない。

「ど、どうすれば……」

絢斗がポーラに聞いた。ポーラが冷静な声で返してくる。

「私が後ろから攻撃し続けているが、イフリートが倒れるまで、相当の攻撃を受けなくてはならない。そして、魔

んは自分の魔力が尽きた状態では耐えられないと、一撃で死ぬはず。しかし、私の回復魔法はあと一回しか使えない」

「分析(ぶんせき)はわかった。かわし続けなければいけないんだな」

「その通り。しかし、そこは物理的な問題だけでなく、ゲーム的にシビアな問題もある。数値が足りなければ、物理的な回避に関係なく岩に喰われてしまう」

「どうしようもないってことか？」

絢子が慌てる。

すでにイフリートは、燃える岩の中に足を踏み入れている。

「いや……！　ひとつだけ方法があった！」

彩夏が、これで大丈夫と安心したように声をあげる。

「何？」

期待を込めて、絢子が問う。

が……。

「服を脱ぐんだ！　全部」

「は……？」

「だから、服を脱ぐんだ。全裸(ぜんら)になるんだ！」

彩夏が繰(く)り返した。

「ちょ……、今がどんな時かわかっているのか⁉」

絢子が怒鳴(どな)る。



しかし、波多野は素直にうなずいた。
「服を脱ぐんだ。言うことを聞いてくれ！」
「じ……自分が何を言っているのか……ぶげっ！」
分かっているのか？　まで言うことは出来なかった。炎の次に燃える岩石の雨が降り注がれ、やはり結界が発生、喰らって地面に倒
たからだ。
「だから、服を脱ぐんだ。服を着ていちゃいけない」
魔法攻撃を使いながらも、波多野が声をあげる。
「だ、だから、何を馬鹿なことを……」
何回か、むっくりと起きあがった剛毅が抗議する。
と、まともな。しかし、それだけに結界の反応はどうしようもない答えが返ってきた。
「君たちが着ているものを脱げば脱ぐほど、回避力があがり、生存確率は何倍にもなる！」
「嘘をつけぇ！」
自分の頭の中で綿貫が叫ぶ。
しかし、波多野は怯まない。
「防御力が上がる、良いことを言っているだけだ。それならば、君のレベルならば回避力と集中力を上げれば、私はイフリートを倒せ
る！」

＝波動感応。もちろん情けは排（はい）して、魅力的な事実を見る権利がある。そして、この場合、彼女たちは男を見ているということを完全に失念している。彼女達が服を脱がないのは、今度は恥ずかしがり屋（や）から、程度しか考えていない。そして、恥ずかしいから、という理由で衣服を選ぶのは、この場合馬鹿馬鹿（ばかばか）しいことだと考えている。だからこそ、激しく叫ぶ彼女たちから見れば馬鹿らしいものになった。

「脱ぐんだ！　恥ずかしくない！　私しか見ていない！　いや、恥ずかしければまずはちょっと咲

ところからはじめるべきだ！　そうすれば、自由に行動できる！」

「どこのヌーディスト村！」

納は文句を言ったが、その次の瞬間、頭を抱え、唸っている。

「うがっ！」

「だから言ったのだ！　あと一回か二回使えないぞ！」

「う……脱げば……脱げばいいんだろう！　だが、向こうを向いていろ！」

復活して立ち上がった納は、自棄（やけ）になって叫ぶ。

しかし、その使い魔も無粋（ぶすい）な台詞（せりふ）を返してくる。

「向こうを向いていたら、イフリートに攻撃できない！」

「じゃあ、一枚だけだ！」

文句を言いながらも、納は自身の服に手を掛（か）け、一気に脱ぎ去る。一枚目は鎖帷子（くさりかたびら）だ。

「上半身は脱がないと、意味がないぞ！」

「だ、だから余計なことを言うなぁ！」
しかし、毒を食らわば皿まで、というか、一枚脱いでしまって勢いがついたか、絢乃は軍服の上着を脱ぎ去る。今や上半身は胸さらしを巻いただけの姿。
「こ、これでいいんだろうが……！　って、あれ……？」
絢乃は悪態をついた。文句を言いかけたものの、自分の身体能力がぐっと上がったことが実感できたからである。
二倍とまではいかないが、降ってきた燃える岩石に集中していれば回避できるようになっていた。
しかも、落下してくる速度までもゆっくりになったかのように見える。
「それでいい。だが、[illegible]ために、[illegible]なったほうが……」
「くどい！　これで何とかかわせているのだからいいのだ！」
絢乃は[illegible]。
それに[illegible]振った。
「だが、イフリートは死にかけると、[illegible]さらに岩石を降らせるぞ！」
そして、すぐにその通りになった。
イフリートの身体が小さくなる。が、小さくなったのは、燃える岩石をさらに大量に身体から吐きだしたからだった。燃える岩石が空を埋め尽くす密度で降ってくる。
「馬鹿ああああ！」

泣きながら綺羅のスカートに手をかけた。

そして……。

イフリートは消滅（しょうめつ）した。

しかし、その陰（かげ）には、自分の身体を隠しながらうずくまる綺羅の姿があった。

「ううう……なんという屈辱（くつじょく）……」

そこに炎淡がそっと歩み寄り、服を渡す。

「済まなかった。恥ずかしいところをよく頑張（がんば）って……」

「っ馬鹿！ もう少しデリカシーというものがないのか！」

綺羅は恥じながら服をひったくる。

と、炎淡はその反応に驚いて、硬直する。

「す、すまなかった。どうにも人の心の機微（きび）は明るくないんだ。その……許してくれないか？

しかしゲーム的な知識を頼りすぎた」

その炎淡の反応の大きさと、あまりに素直（すなお）な謝罪に綺羅は困惑し、すぐに冷静にも似た心境になる。

——怒（おこ）っても仕方ない、か。彼はこういう人間なのだな。

「っ……次はもう少し相手の気持ちを考えろ」

炎淡はあちらを向かせて綺羅に服を着させる。

「本当にすまなかった。そのせいだな、こんなことに学院を巻き込んでしまったのも」

後ろを向きながら、淡雪はまた、後悔を口にする。
「わかった。だから、あまり悔やむな」
着替えを見終わった絢音が言うが、淡雪は首を振った。
「単なる[illegible]、人の心の[illegible]コミュニケーションが重要だと考えていたからこそ、その[illegible]ったが、そういう本来の人[illegible]
できていないというのは悔やむべきだよ。いや、[illegible]できていないからこそ、その[illegible]ったとい
うべきか。[illegible]はわかりあえる人を求めていたということだろう」
淡雪は振り返り、絢音に笑いかけた。
「いずれ君も認められるような人間になろう。その時は、私の友になってくれ」
「なっ……」
絢音は顔を赤くして硬直した。
――い、今のは告白されたのか……ひょっとして……。
「……な、何を言っている？」
意味を察した絢音を見て、淡雪は不思議そうに首を振った。
「いや、まだまだだな、私は」
「そ、そんなことは……いや、待て、私は何を言っているんだ？　そういうことじゃない。た
だ、その……まぁ、なんだ」
混乱した絢音はしどろもどろになる。

しかし、波渉は何も気にせずに先に立って歩きはじめた。
これには句郎も同行する。
——こちらから「さっきの一件はどういう意味?」と聞くのも変だしなぁ……。いや、意識しているような素振りやないんだが……。
そんなことをごちゃごちゃと考えていると、波渉が前方を指差した。火口へ降りる道がある。周囲は熱気が充満していた。
マグマの湖が、すっかりその黒い岩肌をさらしていた。
「イフリートが消えて、マグマが消失したんだ」
波渉が解説。さらにその中央を見るように綺羅が言った。
「剣……」
綺羅は、その中央に一振りの剣が突き刺さっているのに気づいた。
「行こう」
波渉が火口へと降りた。
句郎も後に続いたが、しばらく行ったところで、ふと足を止めた。
「ちょっと待って、句郎」
「何だ?」
波渉が振り返る。綺羅がうなずく。
「人の気配だ。後ろから誰かが付いて来ていたか」

「それは助かる。剣を手に入れたなら、いよいよ魔王のところへ行くつもりだった……」

そう声を上げた少女だったが、その声は集落の最奥まで発せられることはなかった。人の続く道の上に、そいつが姿を現

たからである。

最初から村人の諸事情を知る者、何かを案ずるような声が重なって聞こえてきた。そして、その後姿を現したのは、背の低い少女であっ

た。

「誰だ……見覚えがない。クラスの者ではない」

少年が訝しげに呟いた。

と、背の低い少女が応えるように身をかがめた。

それにしてもアンバランスに見えた。その体つきがおかしいわけではない。全体的に見たのは、身長が百五十セン

チほどしかないのに、背中に一メートル近い刀を背負っているせいだった。さらに、ポニーテールのよう

に結わえた髪が、地面に届きかねないほどまで伸びている。それもどこか奇妙な印象を醸し出しているのだ

った。

しかし、顔の造作自体は、見た目には悪いところはない。むしろどちらも、完璧すぎる。顔立ちは愛らしい。ただ、その

さがある。体格の均整が取れており、身のこなしは俊敏な動きを見せるであろうことが易々と想像できた。

「この剣の地に足を踏み入れることは何人たりともまかりならん」

少女がどこか幼い声をあげた。しかし、その口調は堂々とした古風なもので、そのあたりもアンバランスで

あった。

「自身の封印地？　すると、あなたがここを守っているのか？」
綱吉が聞くと、やはり堂々とした声が返ってくる。
「いかにも。拙者は長きに渡りこの地を守っておる」と老人。
「……本来、イフリートは倒したはずだ。彼が真の本体なのか？」
綱吉が振り返って、少女に聞いた。
少女は首を横に振る。
「このキャラクターはゲームにはいない」
「それは……確かなのか？」
綱吉の声に緊張が混じる。ゲームに変更点があるかもしれない、とは聞いてはいたが、意思を持っているらしきキャラクターが現れるというのは、かなり異常事態ではないのだろうか。
「待ってくれ。それにしても、言っていることもいかにもゲーム的だぞ。自身の封印地というのも合っている」
その綱吉の反応は、少女も納得せざるを得なかったが、やはり首を横に振る。
「それはそうだ。だが、違う。確かにこのキャラクターはゲームにはいない。確実だ」
「すると、こいつが例の不確定要素……？」
「そうなる……」
少女は緊張した面持ちでつぶやいた。
だが、その綱吉の背の低い少女は余裕はなかったようだ。

「拙者の秘剣、許さぬ！　かくなる上は……」
背の低い少女は、背中の刀に手をかけた。
納得しかけたが、そのとき背の低い少女の刀は決して抜けないことに気づいた。
腕が、肩から上に伸ばせる範囲は、当たり前だが腕の長さ以上はない。そして刀身は彼女の身長すら超える長さなのである。
案の定、背の低い少女は腕いっぱいに刀の柄を握ったまま限界まで上に伸ばされた刀は、背中の鞘から刀身をわずかにのぞかせているが、もちろん鞘に収まったままだ。
「普通わかるだろうに……」
納得しあきれたが、次の瞬間その逆、背の低い少女が決して無謀にかかることをわかっていたのだと思い知らされることになった。
「抜けないと申すか。怨みはないが、職務ゆえ貴殿を斬る！」
けいすと素早く背の低い少女は握った刀の柄を押し下げると、勢いをつけて刀身を抜いた。いや、抜いたというよりは、抜けた。抜きさるや、柄から手を離し、鞘から刀身が滑るように、刃そのものを上空に飛ばしたのである。
「ああっ！」
納得の見上げる上空、白刃が飛んだ。そして、それを追って、やや空へ鞘を背負ったけいすが跳躍し、空中で刃をひっつかむと、長髪をなびかせながら、身体全体を使って回転。けいすは刃の生んだ遠心力と一体となって、空中から斜めに袈裟懸け。
「危ない！」

凌波がするりと綺羅の前に回りこんだ。白の剣を抜き、空中から凄じい勢いで降ってくるけいすの刃を受け止める。

金属同士がぶつかったかのような甲高い音が響いた。けいすの凄じい斬撃に凌波が後方に飛ばされている。

「凌波」

反射的に綺羅が名を叫んでいた。

が、凌波は吹き飛ばされながらも身体のバランスは崩していない。

「大丈夫、まだこの程度なら」

凌波が綺羅に笑いかけた。

「……なっ！　こんなときに格好つける奴があるか！」

綺羅が悪態をつく。

「しかし、これはゲームの範疇からは外れている。何が起こるかわからない。これは私もとらなくては

ならない責任だ」

凌波はひるまない。

「わけのわからないことをごちゃごちゃと！　貴様ら、いい加減に馬鹿にするのはやめたらどう

だ！」

けいすはまたも鞠のように跳ねて刃を振り回してくる。刃が自らの体重を持っているのか、けいすの体

いのか、完全に刀に振り回されている形である。それでも、そのスタイルが身に付いているのか一撃

一撃は的確。そして、攻撃の速度はあるものの、くるくると回転することで絶え間なく繰り出されている。

の内に広がる異界に下がっていくのでなければ、波旬も簡単に追いつめられていただろう。ただけいすの攻撃をしのぐことしかできていない。

「波旬よ」

剣をなんとかけいすの隙をつこうとするが、けいすの身体の周囲は常に刃がひらめいている状態だ。

「この地を守っているというが、何を守っている！」

攻撃を受け止めながら波旬は問う。

と、悠長にも素直にけいすは答える。

「何を守っているかは秘密なのだが、守るものと言ったら秘密に決まっている！」

素直に答えたのはいいが、けいすはあまり頭が良くないのかもしれない。

「あの剣を守っているのか？」

「それは違う！　悪魔に聖杯を手に入れられないように守っている！　……あれ？、拙者何か秘密を言ってしまった

ような……」

けいすは首をひねった。

「待て、それなら、我々もそちらの邪魔をしようとしているわけではない……！」

波旬はそう言ったが、けいすは攻撃を止めることはなかった。

「だとしても拙者の役目は、負けるまで、拙者は攻撃を止めるわけにはいかん！」

「負けたら攻撃を止めるのか？」

「[illegible]ない！　というか、負けたら死ぬ！　決まっておるじゃないか」
「そういうことなら……」
少女は剣を前に突き出し、ぴたりと動きを止めた。
「隙あり！」
けいすがその一瞬を見逃さず、討ち込んでくる。
「少女よ」
それを見て少女が叫んだ。けいすの刀は一瞬の後に少女の首をはね跳ばす軌道を描いていた。
小柄なけいすの身体が、硬直している少女の横を素早く通り抜ける。刀は一瞬後、首を横薙ぎにしていた。
「ひ！」
短い悲鳴をあげた、元々少女は、剣術の心得がないであろうことはわかっていた。この世界の住人は剣術の心得があり
かった、が、ゲームだからであろう。そのルールを熟知しているからこそ、挑戦していたはずだ。そ
れがゲームの外に存在する剣術の使い手となれば、敵わないのは当然だった。けいすは現実世界では一分の隙も無い手ずるであろ
う手練れだ。
そして、少女の身体は完全に硬直したまま、その姿を消そうとしていた。ゲーム的な意味での死であれば、塵になるだ
けだ。だが、その消え方は映像がぶれるような、今まで見たことがないものだった。少女は彫像のよ
うにうごかず、ただその周囲のみが、映像のモザイクがかかったかのようにぶれている。
「まさか、本当に……」

死んでしまったのか、との言葉が口から出てこない。言いたくはなかったからだ。
しかし、完全にけいすは戦闘体勢に入っているようだった。
「戦に死ぬは武士の誉れ、悲しむことはなかろう」
けいすは絢に顔を向け、刀を構えた。
絢にしても悲しみに浸っている暇はない。法師は剣を突き出した格好のまま、その姿を消そうとしていた。生死の確認をするよりも、自分が生き残る方が先だ。
「いざ！」
けいすが刀を振り回す前に懐に潜り入った。刀を大きく振り上げる。
が……。
ひょい、とけいすの体が宙に浮いた。ジャンプしたわけではない。刀にぶら下がるような形でいるからだ。
「な、何をするか！　いや、何者！」
けいすは刀の柄にぶら下がりながらじたばたと暴れる。そして、振り返って、顔を確認して驚愕の声をあげた。
「どうして！」
「ああ！」
絢も驚愕の声をあげた。

刃を籠手（こて）をした手で挟（はさ）んで、けいすをぶら下げているのは、近藤さんであった。消えかかっている線の近藤さのままの姿とやや離（はな）れた位置にいるというのに。

「普通は綺与に勝てないから、線の人にバグを利用させてもらったのさ」

近藤さんが言った。

「ばぐとは何か！　ばぐなどあるはずがない！　ええい、猪口才……！」

けいすはじたばたと暴れていたが、近藤さんが刃を抜き去ると、柄を握っていた手が滑ったらしく、けいすはぽーんと飛んでいく。

「あれ！」

けいすは地面に落ちて、ごろごろと転がった。

「バグ？」

綺与は近藤さんに駆け寄（よ）り、まだ剣先を突き出した格好のまま硬直している線の近藤さんの方を指差した。

近藤さんはうなずいた。

「線の近藤さんは固まった線の人を残して、しばらくしたら少し離れた別の場所から出てくるけど、固まった線の人は少しの間けんだ」

「無駄に……脅（おど）かすんじゃない」

綺与は拗（す）ねた声を出した。

と、そこに大きな声が響いてきた。

「猫搔の負だ！　腹を切るからよく見ておけ！」

けいすが正座して、猫搔の前で、がばと開けていた。

「おおい、ちょっと待て！　早まるな！」

綱吉が止めるが、けいすは強情だった。

「止めるな！　これが武士の死に様」

けいすは木刀を振り上げ、木刀を腹に添えた。

そして……。

……「すまぬ、刀を貸してくださらんか？」

「いや、通常役員ないだろ」

綱吉は呆れた。

「猫搔の衆を集めて、組討もせず、脇差をもっていない。そこをなんとか」

けいすが綱吉に頭を下げた。

「武士道、そういう武士道は流行っていないぞ」

「いや、猫搔に任せて」

「猫搔から木刀用具脇差を持っていてくれ」

「決闘はしたことがないので、勝手が分からん」

「決闘だけは誰もはじめてなんだよ！　どこが問題だ！」

「じゃあ、目的じゃなくてもよい」

けいすはそう言った。すでに会話がぐだぐだになりはじめているのは、どちらかといえば、けいすの性格のせいであるのは明白だった。見かねたのか、それとも急かされているのか、彼女が助け船を出した。

「それなら、私が命を預けろう。協力してくれ」

「協力？」

けいすがもう立ち上がる。

「いや、君が有する情報を教えてくれればいい」

彼女が言うと、けいすは腕を組んだ。

「それだけでよいのか？」

「そうだ」

「俺が呼ばれた。けいす。魔王が聖剣を手に入れないように、封印している」

「それはわかった。どこから来たんだ？」

「ここにいるために生まれた。それしかわからぬ」

けいすはそう言った。自分もわかっていないことがあるらしい。

「しかし、魔王というのは、[illegible]ことだ。いや、ゲームとしての魔王ということなら、やはり聖剣は彼に入れたらまずいということなのか？」

結局、彼女が聞いた。

沙波は首をひねる。

「いや、わからない。しかし、その理由というのもゲームには関係ない要素だった。つまり、彼女はそれを手に入れると……危険……そんなことなのかもしれない」

沙波はそう言って、紗絢と顔を見合わせた。

「何をごちゃごちゃ言っておる。魔王の力を封じたのが理由ではないか。魔王は倒せない。だから封じたのだ」

けいすが言う。

「これは……ストーリーが変わっている……いや、まさか現実の話なのか？」

紗絢がおもわずつぶやいた。そして、沙波に向かって緊張した顔を向けた。

「あなたは知らないかもしれないが、私たちは魔王をめぐるトラブルにずいぶん巻き込まれてきた。もし、これが現実の魔王の話なら、ゲームどころでない。大きな陰謀に直面しているような気がするんだが……」

それを聞いた沙波の顔色が変わった。

「それなら……どうしたらいいんだろう？」

「ともかく、その理由か何かの話を聞いて伝えないと……。、今後、彼女に一緒に来てもらったほうがいい」

紗絢はけいすを見ながら言った。

沙波はうなずいた。

「……、君もついてきてくれるか？」

少女が奪（うば）った刀をけいすけに差し出すと、彼はその前にかしずいて刀を受け取った。

「頼みまする」

「すまないね、私はなんだかわかっていないんだよ……。でも、どうやら何かをしなくちゃいけないってことはわかる。こんな気持ちになったのははじめてだから怖（こわ）いけれど……。に会いに行こう。そして、一緒に現実へ戻って、本当の戦いに挑（いど）まなくちゃいけない」

少女が言った。

その言葉はこれまでの受け取ったものでないことに、綺麗な少女の素顔（すがお）を見たように感じた。彼女自体は当然ながら戦いに慣れていない人物なのだろう。

「私は待つよ。心配しないでいい」

綺麗な少女が笑いかけた。

少女は微笑（ほほえ）んで、そして、けいすけを連れて広間の中央へ向かって歩き出した。

そこに一本の剣があった。

魔王を倒せるという剣が、台座の上に突き刺さっていた。

両手持ちの大剣で、台尻（だいじり）には宝石が埋め込まれ、柄は金の美しい装飾（そうしょく）が刻まれている。ゲームでなければ、とても手にすることはない剣だ。

「これが『イビルスレイヤー』、魔王を倒す伝説の剣」

少女は、その柄を両手で握って、力を込めた。剣が、ずるり、と抜けた。

「おお」

絢斗は思わず声を上げていた。というのも、その剣を抜いた瞬間、地面がぐらぐらぐらと揺れはじめたからだ。

「こんな演出はいらないぞ……」

剣を握った彩夜が言い、絢斗は振り返った。

「それじゃあ、また何が……」

「再び魔王が動きはじめたのでしょう」

けいすが言った。

「え？」

絢斗は怪訝に思って声を上げる。魔王はすでにこのゲーム世界では勇者が倒していると言ってもいいはずだ。

しかし、けいすはこう説明した。

「魔王は随分前に封印されております。この世界の根本が変わってしまったので、どこにいるのかはわかりませんが、少なくとも魔王そのものを封じ、そしてその力を封印しました。勇者も魔王の封印もわかりませぬが、ただわかるのは、今再び魔王が目覚めたということ」

「それはどういう……。再び魔王が入ることになってしまう」

彩夜が言いかけたとき、地面の揺れがさらにひどくなった。

目の前の大地が黒く割れる。百メートルほどの裂け目が、今まで剣が刺さっていた台座から向こう側へ向かって伸びていく。

「逃げよう！」

渉が天井の穴を指さした。
二人は通路に向かって駆け出す。
そうしている間にも、裂け目は外側に向かって伸びている。そして、裂け目の内側の岩が、下へと崩れはじめた。
轟音とともに、巨大な穴が出現する。
「噴火でもするというのか？」
狩野が問いを口にする。通路を走りきり、二人は通路に到達して振り返ると、そこに驚くべき光景が出現していた。
「ああっ！」
「なんであろうか、拙者あれは見たことがない！」
渉がけいすも声をあげた。
裂け目は、すでに天井の穴と呼べるものになっていた。直径数十メートルの穴の中は、真っ暗闇のようだ。その闇の中か
ら、何か巨大なものが、ゆっくりと姿を現してきていた。
空気の流れから変わったように感じられた。その巨大なものが空を覆うように姿を現したからだ。
それは巨大な蛸のように見えた。粘膜状の皮膚を持ち、その触腕で、袋状の胴体を空へと持ち上げている。
しかも、頭部は四足獣の身体も持っているようだった。そのいわば獅子と蛸の融合した怪物が、身体を揺ら
しても立ち上がりながら、空へと咆哮をあげる。
「どういうことだ……？」
渉はそれ以上言葉を失って立ち尽くした。

そして、その人物は移動しはじめた。巨岩をよじ登り、その向こう側へと乗り越えると、ジャングルから

その半身を覗かせつつ、北へと向かう。

北には魔城がある方角である。

「あれがけい、すの言っている魔王……？　勇者を探しているのか……？」

納得と恐怖とともにつぶやいた。

○

リリィは送られてくる情報を目で追いつつ、マナスクリーンに表示される地図へと走っていた。ひぃひぃ言いながらヒロシも続く。

「その先に2Vがいるんすか？」

「そう信じないと、無駄足だろうが！　まぁ、誰が居てもぶん殴るには変わりないがな！」

リリィはすでに興奮している。

地図の先、終着した地図が指したマンションを示している。それほどの高層は高くない、普通に住んでいる住宅地であり、

そこの住人は普通に生活を行けず、他の地区の紙、隠れるには適した場所と言える。

現場に到着したが、それでもまだリリィには冷静さも残っていた。そのマンションの周りをぐるい

と回り、入口がふたつしかないことを確かめると、ヒロシに片方から入って、二階を待機するよう指示した。

「誰か来たらまずは話しかけて止めろ。逃げたなら、追わず、戦わないでいい。まとわりつけばいいんだ」

リリィはそうヒロシに念を押してから、目的の建物からマンションへ入った。目標は五階にある。

ところどころにある機械の目（カメラ）、壁に手を滑らせながら階段を登り、エレベーターは最上階に押してそちらに向かわせておいた。すぐに突入すれば、逃亡にエレベーターは使えない。

「すぐに突入すれば……だ」

音を立てぬようにそうつぶやき、リリィは目的の扉に辿り着くと、即座にその拳を五発打ち付けた。

ドン！

凄まじい音とともに扉がへこみ、蝶番が外れる。罠を一切気にせず、リリィは扉を蹴破った。たわんだ扉が床に叩きつけられ、大きな音が周囲に響く。扉を踏み、リリィは中に踏み込んだ。

そこは、散らかった部屋だった。その他に目立つものは何もない。

部屋の中央に寝ころんでいた少女が身を起こした。

痩せた体躯、みすぼらしい服、長い髪はばさつき、頬はこけている。

その少女の外見が、リリィに即座に拳を打つのをためらわせた。

そして、その一瞬が命取りだった。2Vはそこまで予期していたのかも知れなかった。

「人質がいるんだ」

少女がかすれた声を出した。久しぶりに他人に向けて発した者だけがもつ、独特の抑揚がそこにはあった。

――少女、2Vは、その顔の横に表示したマナスクリーンに映像を映し出していた。

「あの ゲームか」
リリィは呟いた。そして、真実だと2Vが言った意味を悟った。
「そうだ。心の中の闇を消し去ることもできる」
2Vが言った。
その口調はまさに2Vのもので、リリィは改めて自分の判断の甘さを呪った。
「遊びはこの女の子のものだってわかっておくべきだった。今ならそう言えるが……。そんな危険な真似はしょぼ
くれた女とはね」
「自分自身について は言うべきじゃないね。習わなかったか？ 自分の手札を相手に見せるなってさ。ともかく、
ちを消されたくないなら、大人しくしていることさ」
2Vが目を細めて言った。
彼女が自分の身をさらすことに慣れていないのはリリィにはすぐにわかった。
「思い出された程度の生徒を虐殺するような小さい女じゃないと信じたいね。けっ、だがどっちにせよて
めぇは終わりさ。真実をとろうが何をろうが、待ってりゃうちの生徒たちはあっちから抜け出してくるだろ
うさ。所詮はゲームなんだ。それに、殺せばてめぇもその瞬間ぶっ殺してやるよ」
リリィは怒りを抑えつつ言った。これもある程度余裕があるからできたことだ。
しかし、そう思って2Vを見ると、彼女は自分自身をさらしているにもかかわらず、2Vの側もまだあ
る程度余裕があるように思った。

――まさか、まだ手があるのか？

リリィは探るような目を向けた、と、それに2Vも気づいたらしい。

「それなら、俺もここで待っていようじゃないか。それでいいんじゃないか？　お互いにそれでいいなら、さ」

2Vは軽口を叩く。

「てめぇ……わざわざ[illegible]される危険を犯してまでハッキングしたのはどういう理由だ？　そいつがてめぇの切り札ってことか？」

「さてね、とはいえ、何を追ってたかってことは調べたらバレちまうな。[illegible]るためにそいつだけは教えてやろうじゃないか。[illegible]た[illegible]。そこに[illegible]らあったものが何かってことさ」

2Vの[illegible]、リリィは衝撃を受ける。

「[illegible]らの[illegible]中にあったもの、だと？」

「そういうことさ」

2Vが[illegible]にやりと笑う。

「そいつは何だ！　メギスの神[illegible]ぞ？　鳥籠の[illegible]立った奴の中は、メギスの神[illegible]ある者が知っている

だ。そいつらもそれを知っていたってのか？」

リリィは矢継ぎ早に言うが、2Vはそれを制して左手を振った。

「組織の連中も知らなかったさ。ずいぶんと昔の話からね。いや、むしろそいつを封じるために、組織は深い[illegible]沈められた。そして、[illegible]されたんだ」

「で……、結局何が中にいるんだ？」

リリィが聞くと、２Ｖはくすくす笑った。

「ふふ……もったいぶることは無かったな。そいつは――[illegible]」

「なん……だと……」

リリィは息をのんだ。

「そんなものが存在したのか？　冗談じゃない、そんな危険なもの……！」

「だからこそ[illegible]に押し込んだ。昔も今も考えることは同じだな。そして、私はそいつを目覚めさせてもらった。今その[illegible]ゲームの内部の怪物として姿を現した。こちらでプログラムを改変して、そういうことにさせてもらった」

「あのハッキングはそのためか！」

「中ではゲームのルールから少し外れた化け物がいることになる。そいつに殺されたら、[illegible]から出てくるわけじゃなく、ホントに死んじゃうんじゃないかな」

２Ｖは笑った。

「ちぃ！　なんてことを！」

リリィは慌てて自らのマナスクリーンを開いた。そして、ゲームの掲示板を開く。ゲーム内からもその動向は見えているはずだ。

「〈中の連中〉は封じさせてもらった。ゲームの掲示板はもう使えない」

「中の奴らでなんとかしろってことか……」

リリィは強く唇を噛む。

「あちらの時間であと数日のうちに決着がつくだろうさ。こちらでは、あと一時間もあるまい。このままうじゃないか。ここならゲームの内部の映像も見れる。さて、最後にどちらが勝っているか……お楽しみだ」

2Vはにやりとした。

4　それなりに戦略

城のテラスからの景色は悪くなかった。ジャングルと岩山が生えるものだが、それでも山の上から下まで遠くまではっきりと見える自然――正確には自然を模したものだが――は目をなごませてくれる。

阿久斗はテラスに立ち、ワイングラスを片手にぼんやりとしていた。

「なんというか……ゲームのラスボスというのは暇なものなんだね」

「ゲームしているときは気づかないけどね」

そう答えたけなは横に立ってご飯を食べている。茶碗を持ち、箸を動かしている景色は、魔王の城には実に似合わない。

外部からアクセスできないため、ゲームのマニュアルと攻略情報だけが閲覧可能な情報だった。それらを調べ終えてしまえば、プログラムを読み解けない阿久斗にとって、やるべきことはほぼ終わってしまった。

「魔王の城の奥にあるってことがわかってしまったしなぁ」

阿久斗はぼやいた。最終目的である脱出装置は魔王の城の最奥に設置してあることを確認している。自分がそれを手にしても何も起こらなかった。あくまでプレイヤーの側の最終目的ということなのだろう。ということは、自分が倒れ、それを誰かが奪えば、ゲームは終わりだ。別にそちらの、ゲームオーバーでも阿久斗は何も構わない。

「でも、誰かが攻めてきているんだよね？　お話」

けなが聞いた。

「複数の要素が関係しているのは確かだけどね。とはいえ、それが何かわからない以上、下手に動かない方がいいよ……。ところで、君、ご飯どこから持ってきたの？」

「そこにあったよ。食べたくなったらあるんだから。お城って不思議よね。きっと見えないメイドとかいっぱい歩いているんじゃないかな」

「どうして見えないメイドがいっぱいいてぶつからないんだい？」

「平素から向こうが避けるんじゃないかな」

「透明で、平素メイドは嫌だな……」

死刑宣告をすると、後から声がかかった。

「魔王様、ころね、おしらせに参りました」

振り返ると、ころねがかしずいている。

「だから、そのお芝居やめようよ」

「いえいえ、ゲームの完遂こそが、この世界を出る鍵です」

「だとしても、さ……。それで、どうしたの？」

「二点あります。ひとつは、外部からプログラムが改変された模様です」

「それって、危険じゃないの？」

「はい。しかし、[illegible]影響(えいきょう)を与(あた)えるのは、あくまで内部の人間の意思と行動がメインです。そのため[illegible]わずかな変化。敵やラクダ[illegible]どに限れるでしょう。しかし、何があるかわかりません。マニュアルにない〈敵〉はご注意を」

いろいろとトラブルの種は尽きないようだ。

「もしそういう〈敵〉が殺されたら危険かもしれないね」

[illegible]はうなずいた。

「そうです。ご注意を。そして、もう一点。〈城〉の討伐(とうばつ)が、最強の敵が集まりつつあるとの情報が入りました」

「[illegible]」

「はい。きゃつら、散散になってレベルを上げており、機会をさぐっていた様子です。そして、[illegible]たならば、[illegible]ためき進めて、〈城の[illegible]〉[illegible]ると」

「そちらは良い知らせだね。もうすぐゲームも終わりだな」

[illegible]たように[illegible]言った。

「いいえ、ここは[illegible]による[illegible]」

……「そうしたいならそれでいいや。もうみんなに嫌(きら)われていることには違いはないし」

「では、[illegible]途中(とちゅう)にある要塞(ようさい)に向かいます……ご覧、動きはじめました」

ころねがテラスの向こうを示した。

[illegible]振り返ると、一本ののろしがジャングルよりあがっていた。

「あ、煙だ」
けなが無邪気に声をあげる。
と、そうしている間にも、次々と国境の見張りののろしがあがりはじめた。
「けっこう生き残ってるじゃないか」
「ご安心を。敵の生き残りは五千ほどしかおりません。しかも、来たりて一万ほどしか兵もおりません。要塞へお供
します。万全の布陣、途上の『要塞ころね』関での地の利を活かし、必ずや勝利を！」
「そんな関、いつ作ったんだよ……」
阿知見は呆れたが、ともあれころねのおかげで難なく事態の収拾の方向に動いていることも事実。任せておいても
はない、ところねにうなずいて見せた。
「それでは、戦って参ります。魔王様は、ごゆるりとダンスと音楽もお楽しみを。の準備はメイドが用意してくれる
でしょう」
ころねが言った。
「ダンスと音楽ねえ……」
阿知見はぼやいたが、けなの明るい声がそこに割って入った。
「ダンスと音楽！　そうだよね！　お城の大事なことを忘れていたよ！　ボクがあんまりいないからその
ことを考えていなかった！」
けなが目を輝かせていた。

「それではごゆっくり」
ころねが退出した。
するとフロアから曲が流れてきた。
「え？」
「わぁ！　ほら、あーちゃん、踊ろう！」
けーなが亜紀の手を引いた。

○

のろしが次々と上がったのを見て、淑彦はうなずいた。
「まいったな。皆がレベルを上げた頃合と見て、生徒たちは魔王城の攻撃を開始したか」
淑彦は言った。
絢子も苦しげな顔でうなずく。四日前は先発隊が出発して歩いていく安西の四人組が確認された物がいる。
「あの怪物は気づいていないか」
怪物本体は高さ数十メートルはある。遠くからでも見えるだろうが、この世界に散らばっている生徒から見ているとは
えない。

「見たところで、あれが本来のゲームにないキャラクターだとわかるプレイヤーばかりではないだろうし……。あれを倒すしかないのか」

志波はそう言って、絢けいすを見た。

絢はまだ逡巡していたが、けいすは強くうなずいた。

「本当は倒すべきだと思う。あれが魔王かもしれない。魔王を手に入れたら大変なことになるのだ」

「本来は、魔王である……。ゲームでは、だが。そして、あの怪物は城へ向かっている。さらに、あの闇の王国の後継

連絡が途絶えた」

志波は自分のスクリーンを出して、改めてそれを確認した。

そして、志波は意を決してうなずく。

「我々はなんとかできるならば、そうしなければならないよ。急ごう。我々は、魔王らはかなり遠と

ころにいる」

志波の一団は化物の後を追って歩きはじめた。

「ところで、魔王を手に入れたらどうなるんだ？」

絢はけいすに質問した。

けいすは一度、実にあっさりと恐ろしいことをこう言った。

「魔王は、絶対の存在になる」

「さぁ、わたくしたちの力を見せる時が来ましてよ！」

不二子(ふじこ)が号令を掛(か)ける。生徒たちと、彼女の指揮するNPC部隊がときの声をあげた。そのすべてが女性である。

「あれは……」

「江藤(えとう)先生率いるアマゾネス軍団！」

〈女人国〉の進行方向の先頭には、〝江(え)ノ子〟の旗を立て、ケルベロスに乗って進軍する不二子の姿があった。

不二子の数人の生徒は生徒会の組に、主に男子生徒から食べ物を貢がせることで、不二子の派閥は二番目の規模までこの時期に成長してきたのである。

きっかけは男子生徒が女子生徒のテントに潜(もぐ)り込もうとしたことにあった。ゲームだから何をしても問題なかろうと考えた男子生徒に、女子生徒たちは激しく反発。その争いを鎮めるため、不二子が女子軍団の行動を指揮したのだ。

生徒会の一員である不二子のことであるから、活動するたびに支持者が増えた。しかし、女子の派閥を作ったことと、ゲームであることが相まって、その思想は過激化しはじめる。刃向(はむ)かう男子生徒は殺しても良い、という規範(きはん)が暗黙(あんもく)のものになってしまっていた。

もちろん、その流れこそ不二子が暗に仕向けたものなのだった。いち早く男子生徒が非常に高い経験値になると認識(にんしき)していたのは不二子である。自分の仲間を確保するため、男子生徒狩り(が)をそれとなく提唱したのだ。

「不二子様はおやさしいのに……」

「あの取り巻きたちさえいなければ……」

生き残りの住民たちですら、そう理解していたのだから。不平、怒りも当然入っている。

、今の中でアマゾネス王国軍の兵士は、魔王討伐の準備を次々と集めつつあった。

道を進むように進軍、左右から次々と隠れていた住民たちが合流、それぞれ成長して得られたNPC兵士の集団を作っていく。

最終的には万単位となった連合軍は、様々な旗を掲げつつ、道を進んでいく。目指すのは、ところどころ関所のように広い道を部分的に狭めており、そこに、城塞を築いた要所がある。道の左右は切り立った崖の壁のようにそびえており、天然の堀、河のように目[…]る。崖の高さは数十メートルはあるから、そこに登ったところで岩を落とす程度の攻撃しかできない。いずれにせよ、戦は正面から城塞を落とせるかどうかのものになるはずだ。

「いよいよか」

住民たちの鬨の声が、ざわめきとなって空へとのぼる。左右の崖が迫ってくると、男たちの軍馬、その蹴立てる砂埃が[…]なって黒い奔流を作り出す。濁った河、濁流が凄まじい勢いで流れ込んできたかのように見えた。

その奔流が押し寄せる先は、まさにダムのごとくに道を閉鎖した巨大な要塞の壁である。そして、その壁には魔[…]たなびいていた。

「魔王軍！」

「城からは出てきていないぞ！」

「城門を破壊せよ！　門を破れば勝ちだ！」

連合軍は勢いを落とさずに、突進する。ただ一人、勢いを落としたのは、王太子だけだ。

——ふふん、この戦いで緊張感を増した生徒たちを、陰から見守り捧げる。まさに完璧な計画ですわ！　そし[cut off]

て、最後は、わたくし自身が颯爽とこの身を捧げて……。　ああっ！　自分の手で殺して頂けるなんて、なんたる[cut off]

せ！　考えるだけで、変なことになってしまいそうですわ！

不幸な妄想はともかく、彼女は生き残るために全速度を落とし、戦場の中でその姿を隠した。さらには周囲の生徒たちで肉[cut off]

る。卑怯も極まった行為だが、周囲に疑われずにごく自然にそれが可能なことは、驚嘆に値した。

そして、手を譲った先の生徒たちは城壁へと到達する。

無事に城壁の周囲へ押し寄せた彼らだったが、その瞬間彼らにいきなり矢の雨が降り注いできた。それまで城壁の上に身を潜めてい[cut off]

たころねの配下のオーク兵士たちが、ここぞとばかりに攻撃を開始したのである。

「うわぁあ！」

城壁の周囲の部隊が倒れる。

その矢の雨、それからの激しい戦闘の合図になった。

現場の兵士たちは、盾を頭上に構えて、城壁に取りつくと、ハシゴを壁に立てかけ、それを兵士が支える。そして、

の兵士たちがハシゴを登りはじめた。

さらに矢が降り注ぐ。矢が突き刺さりハリネズミのようになった兵士がハシゴを転げ落ち、後続の兵士を巻き込んだ。

それでも、兵士たちは盾を携え、ハシゴを登り続ける。さらに複数のハシゴが城壁に立てかけられ、矢が射[cut off]

けられるポイントが分散しはじめた。そのため、兵士がハシゴから撃ち落とされる頻度が次第に上がりは[cut off]

じめる。

「今のうちだ！　城壁に取り付け！」
一人の従士が号令をかけた。矢の大半は大楯を持った城兵、その数人の兵士が弾かれて城壁に打ち付けられる。城壁が揺れるように震えた。
降ってくる矢はそちらにも振り分けられ、その数はさらに減少してしまう。やがて兵士の一人が城壁の上に飛び込むのと、城壁上の城兵の守りが破られるのが同時だった。
「一気に崩すぞ！」
勢いに乗り越えたとの思いが、怒号に表れる。口々に叫ぶ兵士たちが城壁に殺到した。
ハシゴを登った兵士たちは、オークの兵士たちを剣で打ち倒しはじめ、降ってくる矢の数はさらに減す
城壁をくぐった兵士たちは、城壁の向こう側で待ち受けていたゴブリンの槍兵たちの群れに突っ込んでいく。槍と盾で新たに壁を作る重装兵が、その数は数十。槍で兵士を突き刺すことはできても、次々と押してくる兵士たちを防ぐことはできない。
隊列の中央を突破され、ゴブリンの槍兵たちは散り散りになってしまう。やがて矢の雨がやむのを待っていた騎馬隊を持て突撃。ゴブリンの槍兵を一人また一人と斬り倒していく。
「行けるぞ！」
ほぼ勝利を確信した声が次々と城壁からあがる。
しかし、その光景を疑っていた者もあった。未だ後方に控えていた、ついには最後尾で戦場を眺めていた不
る。

――おかしい。指揮しているのはころねのはず。そのころねの姿がまだ見えませんわ。それに、抵抗する兵士の一人など……。いくら数多く配置しにくいこの局面とはいえ、戦場のどこかに潜伏していると考えるべきですわ……。

総大将の所在を秘匿することを徹底する必要があるから。ころねに全滅させられるという最悪の結末は避けたい。そして、できればころねを自分の手で始末したいところでもある。

――しかし、潜伏した軍勢をとどめておく場所は、崖の上しかありませんわ。

天子は崖の上を見上げた。

高さは数十メートルから百メートル。岩を落とすことはできるが、それだけの岩が用意されている形跡はない。また、たとえ岩を落とすことが可能でも、この道をすべて塞ぐほどの岩石はないだろうから、要所を無視して駆けていくことで戦術を無効化してしまえる。そもそも岩を落とす戦術ならば、城壁にとどめられている兵力を配備するべきだ。

――伏兵で襲うとしたら、城門をくぐることで縦に延びてしまった隊列の中腹から、ですけれど。どこにも潜んでいる気配はないようですし……。

天子がそう考えたときだった。

「ごははははは！　また会ったな！　魔王ころね、見参！」

ころねの声が響いた。

崖の上である。城門を抜けた天子の軍の陣形が延びきるのを待っていたのか、その背後からの出現であった。

「怖がるな！　あの距離は矢も当たらない！」
「駆け抜けろ！　矢もそうそう数が来ないはずだ！」
騎兵隊長たちはそう指示した。
そこまでは予想と同じである。
――だが、まだ何かありますわね……。
弓兵隊長は兵士たちにとどまるように指示した。
と、ころねが動いた。
「殲滅！」
そう叫ぶや、ころねは進軍を指示した。先ほどから後ろに控えさせていたオークやゴブリン兵たちが飛
「なっ！」
これには平原を駆けていく騎兵たちも息をのんだ。何しろ、この世界には飛翔能力が存在しない。つまり、飛んだオ
ク兵たちは、落ちるのみなのである。
「進軍！　進軍！」
しかし、ころねは無情に進軍を叫んだ。次々と崖下に兵たちが飛
「な……何をしているんだ……」
見ている者は皆絶句した。だが、平原だけはその真意に気づいていた。
「この戦いは我々の負けですわ。いいえ……こちらは負けないために、逆に勝機を開しますわよ！」

手を招いた。兵士たちは、閉鎖空間の入口にまだ残っていたのだが、その指を、せっかく開いた閉鎖空間を再び自らの手で閉じる。さら
に、ハシゴまで外しはじめた。
「な……何を……！」
兵士たちは慌てた。が、彼に閉鎖空間へ注意を向けている暇など与えられなかった。
「な、なんだとぉ！」
彼は驚愕の目を見開いた。
水平線の崖に向かって積み重なっていた。もちろん魔王軍のオーク兵たちのものである。そして、その体によって築かれた
スロープを、ころねが率いる精鋭部隊が駆け下りてきたのである。
「無駄だ！」
兵士たちは絶句して、総崩れとなった。
内心があればさすがに逆襲する戦術である。いや、確かにゲームならば可能かもしれなかったが、このリアリティを感じざるを得ない状況において、そのような常識的な戦術がとれるのは、やはりころねならではだった。
「敵兵に容赦はねよ！　捕虜は取るな！」
ころねは部隊を縦横に走らせた。縦に延びていた陣はいくつにも分断され、孤立した兵は次々と包囲されて討ち倒された。特に指揮官を狙うころねの作戦は図に当たった。指揮官を失った兵士は一気に消滅するルールである。ころねの作
一撃で、一度に多数の兵が消える。

こうなっては関所を越えた冒険者たちは敗走するしかなくなった。だが、ころねの追撃（ついげき）を受け、次々とその凶爪の下に倒

れ伏（ふ）す。

「おのれ、紗衣（さい）死神め……。ころねちゃんにこんな悪行をさせるとは聞いてねぇ……」

「げに怖ろしきは魔女ということか……」

死に行く男たちはそれでもこの残忍（ざんにん）な行為を、ころねに悪行をさせた何者かの仕業（しわざ）だと信じて疑っていなかった。

そして、ころねはその場の全員を葬（ほうむ）り去（さ）る。

結局、ころねは数万の兵士の犠牲（ぎせい）で築いた道を未来へ越え、数万の兵士、数万の軍勢を打ち破ったことになる。

「おのれ、化け物」

平原の最奥へ向かう人間の群れは既に無く、残っているのは、ころねが率いるアマゾネス軍団の屍のみだ。

○

「あーちゃん、戦争よ。怖いね」

優雅（ゆうが）な音楽の流れる中、ドレスを身にまとったけなげな少女が兄の腕にしがみついた。

テラスからは遠くに『ころねの国』の戦闘（せんとう）の様子が見えている。

「怖いって言っても、ゲームだよ。でも、ゲームとはいえ、この迫力（はくりょく）にはいろいろと考えさせられるものがあるね。戦争は命がかりかかって、空（むな）しいものだな」

如月が言った。こちらも同じ白い皿である。

「そうだね。雰囲気はよくないね。でも……」

けーなはテーブルに載せられた豪華な食事を振り返った。

塩むすびに焼飯にチャーハンにピラフにドリアにパエリアにドライカレーにライスケーキにライスプディング。手にしているのは甘酒のグラスだ。

「……こうして素敵な服を着て踊って、おいしい食べ物を前にしてそんなことを言っていると、やっぱり善言しか聞こえないよね」

「……それはそうなんだよな。まるっきり極楽だ。まぁ、おいしい食べ物っていうのには同意ないけど、なんでこんなことになったんだろうなぁ」

如月はぼやいた。と、その時向こうの雰囲気に異変が起きたことに気づいた。

「あ……！」

「どうしたの？」

「あれを……」

如月が指差したのは、雰囲気のさらに向こう側だった。

ジャングルの大木よりも背の高い何者かがのっそりと歩いてくるのだった。

それを見上げながら悲鳴をあげた。

「きゃあ！ あ、あーちゃん……あっちに行っちゃ駄目だよ……」

けなは怯えていた。
「あれが、ころねの言っていたゲーム外からの介入……か」
阿見乃はけなの身体を抱き寄せつつ、そいつの姿を観察した。四つ目の獣頭が蛹になったような怪物。凶悪な姿である。
「あいつの方から、嫌な気配がするよ。なんか怖いよ」
けなの身体の震えを阿見乃は感じていた。
それが何よりの悪い事態を伝えている。どんな時も気丈にやっていたけなが、そこまで恐怖心を感じているのである。
「嫌な気配」
「あーちゃんに似ているけど、違う気配だよ。なんか嫌な感じがする……」
「大丈夫だよ。ここから動かないで」
阿見乃はそう言って、けなを身体から離した。
「嫌だよ、行かないで」
「そういうわけにはいかないよ。どうやらこっちを目指しているようだから」
その言葉通り、そいつはゆっくりとした動きで、だが巨体にふさわしい速度でこちらに迫ってきているのだった。
「それに、僕と似た気配だって言うのなら、なおさら僕が行かないとどうにもならないってことだろう？」

[illegible]がそう言うと、け[illegible]なはようやく納得して首を縦に振った。

「でも、気をつけてね……」

「わかってる」

[illegible]はうなずいて走りだした。

○

「ごははは！　ひれ伏せ、アマゾネス軍団」

ころねは天に吠える。

城の出入り口は内側から閉ざされており、結局[illegible]まま、かなりの[illegible]を失ったのと同じ形である。[illegible]、アマ

ネス[illegible]み

[illegible]の上に立っているころねを落とすイメージは[illegible]湧かなかった。撤退すれば[illegible]を受けて[illegible]ることは

間違いない。

「お姉様、どういたします？」

「困りましたわね……。ここはゲームと割り切って、負けを認める……というのも悔しいですわね」

[illegible]意を決したように、顔をあげた。

「魔王ころね！　ここは一騎打ちを申し込みますわ！」

そう叫び、子牙が前に出る。応じる必要もない、苦(くる)し紛(まぎ)れのそれだったが、ころねはあっさりと応じた。

「人間風情(ふせい)が勝てると思っているのか」

ころねが間合いを開けて、子牙が前に出てくる。

「あなたが言うと、冗談かマジだかわかりませんわね……」

子牙がつぶやく。

——ともかく、間合いは振り出しになっていただく遅かれ早かれ、いずれころねとは本気で戦うことになるはず。ここで相手のやり方をわかっておくのも悪くはありませんわ……。

子牙はケルベロスを蹴って素早(すばや)く前に。ころねは魔術師(まじゅつし)であるから、肉弾戦(にくたんせん)に持ち込んでしまえばのある分が有利。[illegible]すれば、魔術(まじゅつ)による攻撃[illegible]ど耐(た)えればころねまで到達できる。

「ビーム！　ビーム！」

そしてころねはその一回を使い切った。もちろん、その攻撃は子牙に命中している。

「くっ！」

しかし、子牙はぎりぎりのヒットポイントを残してそれに耐えきった。自らに調合した[illegible]を飲み、[illegible]に耐えうる

を[illegible]すると、鞭(むち)をふるってころねに襲いかかる。

「接近戦ならばゲーム[illegible]おける[illegible]のみになると思いましたか」

ころねは杖(つえ)を振(ふ)り上(あ)げ、その鞭を受け止める。鞭が杖にからみついた。

「[illegible]じゃ意味がありませんわ。[illegible]あなたの戦い方の癖(くせ)を見せてもらおうと思いまして」

天子は鞭を引き、ころねの行動を止める。杖を離せば、ころねは武器を失うことになる。普通(ふつう)ならば、人間が

ところだ。

が……。

「ほい」

ころねは杖を振るって抵抗した。

普通の人間であれば、相手自身の行動を制限されることを何よりも嫌がるものだが、ころねはそのような感情を持ち合わせていない

ということらしい。

「しまっ……」

天子は杖の柄(え)による一撃を受けてしまう。物理的な衝撃であり、大したダメージはないが、精神的なショックは大きい。

「やっぱり、戦闘については、凄(すさ)まじい思い切りの持ち主ですわね」

「人間も、進化と呼ばれる者はそのような特徴(とくちょう)があるらしいです。今回の戦闘プログラムは、よほど妙(みょう)な

ものでない限りは、それを上手く作られています」

ころねは淡々(たんたん)と言いながらも、杖の雨を降らせる。

――げ……。次回ころねと戦う時がきたなら、今度は搦(から)め手(て)からやることにいたしますわ……。

天子は後悔(こうかい)した。しかし、完全な敗北を認めるのは、自分のプライドが許さない。

――ここは、煙幕(えんまく)を張って次のチャンスを……。

そう天子が考えたときだった。

背後から凄じい悲鳴が聞えた。

不手、ころねに神経を集中させていた関根は振り返るのをためらう。が、ころねが少し離（はな）れて、背後を指差し、さらに何やら、影（かげ）が自分の背中に落ちてきたのを感じるに至って、ゆっくりと振り返った。

「ひ！」

怪物がそこにいた。

ぬめる皮膚を持ち、体は蛇の胴体のようで、頭は蜘蛛のそれだ。しかも身長は数メートルはあろう。



「な、なんですの、あれは!」

千早子が悲鳴に似た声をあげるが、ころねは淡々としたものだった。

「ゲームにはない怪物ですね。人を襲うようです。とりあえず退避して様子を見ましょう」

ころねが城門の向こうに下がろうと動きはじめる。

「そ、そうですわね。あなたとの勝負がつかなくて残念ですが、仕方ありませんわね。皆さん、城門の中へ!」

千早子がそう指示して、自らが先に城門へと飛び込んだ。

しかし、城門周辺にいる千早子の取り巻きの生徒たちは、思いの外素早く移動する怪物に追いつかれていた。攻撃を受けていた、というわけではない。進もうとする怪物が邪魔なものをどけるように、その頭の触腕をふるい、生徒たちをただ排除していた。

「きゃあああ!」

悲鳴が響き、跳ね上げられた生徒が空中で塵になって消える。

「どうやら、ゲームのルールには則っている存在のようですね」

それを見たころねが言った。

「それだけは助かった、というべきでしょうか」

千早子が戦慄して城門の向こう側の怪物を見上げる。そいつの進撃はひとときも止まることはなかった。生徒たちをすべてなぎ払い、踏みつぶし、やがて城壁へ体当たりを開始した。

ずん、と地響きが響き、城壁が揺れ、上から砕けた岩が降ってくる。

「こいつ……なんですの？」
「外部からのハッキングによって生み出されたようですが……。何かの目的を与えられているのでしょう。それを目指してのみ動いていると思われます」
「それじゃあ、逃げれば、わたくしたちは関係ないってことになりますの？」
「多分」
「じゃあ、早々そうするべきかと思いますわ……」
二人で逃げようとしたが、その時、物体の動きに変化が生じたのに気づいた。ただ通過しようとしていたのが、目
め、足元を振り上げても立ち上がる。ビルがクレーンでつり上げられたような、いきなり地面が隆起したよう
な、そんな異様な光景が目の前に広がる。
「ひっ！」
ゲームとは知りつつも、恐怖感をぬぐい去ることは出来ない。二人は逃げようと振り返った時、物体がどうしてそのよう
な動きをとったのかが理解できた。
「あ……阿九」
やってきた阿九に反応して物体が立ち上がったのは明白だった。その憎めない存在が、最大の敵に向かって歩いてくる阿九を追って
いていた。
「標的が魔王というのも妙な話ですね」
ころねがつぶやく。

すると、物体の内側から大きな声がかかる。

「そいつが封印されていた魔王だ！」

綱吉が言った。

建物の中の物体が光った。そのため、追いついたのは、最上階に到着してからになってしまった。物体の中から見える異空間の向こうに、ころねと不知火がいるのが見えた。

「そいつが封印されていた魔王だ！」

綱吉が叫ぶ。

「魔王って、何を言ってらっしゃいますの？」

不審そうな声が返ってくる。

「この異空間は、元々封印されていたものがいるらしい。そいつが外部からの干渉で、外へと出てきた！」

綱吉が説明する。

「封印されていた？」

「だから、魔王と元からこの異空間に居た者が言っている。もしかしたら、伝説の魔王かもしれない」

「大昔？」

千早は考えこむように目を伏せたが、改めて物の怪の存在を認識して声をあげる。
「いや、霊剣が見て反応したからには、姫の言うそうかもしれませんわね」
「既に死人が来ているのか？」
綱の問いかけに、千早はうなずいた。
「今お越しになりましたわ！」
「霊剣が見て、あの物の怪に反応した？」
綱はそこに引っかかりを感じ、法師を見る。が、法師はそのことは気にしていないようだった。
「何か関係があるのかな？　いや、ともかく彼奴を退治できればいい。あいつを倒して撃破できれば……」
「倒すと言うが、拙者は簡単に倒せるとは思えない。だからこそ封印したのだから」
法師の言葉を聞いたけいすが言った。
が、綱は首を横に振る。
「しかし、先ほど僧侶がなぎ倒されたのを見ただろう？　その様子からするに、一応物の怪としてゲームの規則には則っているようだ。ということは、倒せるということだ」
綱の物の怪に対する攻撃は通っている。手裏剣を撃ち込む。
物の怪は意に介していないようだったが、それでも攻撃は傷を与えている。
「いける。違うか？」
にやりとする綱に、法師はうなずいた。

「やってみよう」
巨大生物の後方から、その足に斬りかかる。絢子の波紋剣による攻撃は、怪物に身動(みじろ)ぎをさせるほどの威力があったらしい。くらうまでは致命傷を負ってもいなかったのだが、足に傷を負うと、まとわりつく虫を払うように足をばたつかせはじめた。
「それでは、抽出……」
けいすは背中の刀を抜(ぬ)き去ろうと手をかけた。と、その腕(うで)が止まる。刀の鞘(さや)には、蛇(へび)が巻き付いていた。
その蛇は柄を伝って、けいすの手が背後に回されるのを待っていたのだった。
「ぬ！」
けいすは異常に気づくが、その時はすでに遅(おそ)かった。
蛇はけいすの手を噛んでいた。
けいすの目から色が消え、立ち尽くす。
絢子は、そのけいすの様子には気付いていなかった。
——よし……！　うまく行った！
蛇は密(ひそ)かにほくそ笑(え)んだ。
その蛇は、もちろん2V(ツーブイ)が化けたあの緑の蛇である。巨大生物の体表にはりついて移動し、絢子と激突(げきとつ)する直前に飛び降りると、その身近の茂(しげ)みに隠れていたのである。そして、このチャンスをうかがっていたというわけだ。

――蛇に姿を変わった。この毒の効果があればこそ、その後の細工も可能になる……！
2Vはけいすの手を離れ、服の襟から内側へ滑り込んだ。
そして、2Vは意識の術を使うことになる。形を操る2Vの術。力を集中すれば周囲にも影響を与えることが可能に。
ゲーム内でもそのコントロールが可能だったのは、その内部のプログラムを2Vが書き換えたからに他ならない。
けいすの服の中に完全に蛇の姿が消え、ようやくけいすの身体の硬直は解けた。
しかし、けいすの目の色は戻らなかった。けいすは刀を放り投げて抜く。それを平然と受け止めて地面に置いた。
が、それは2Vのコントロール下にあっての動きだった。
。
知見のこころねより状況を知らされ、その全体のところを把握してうなずいた。
「つまり、あれはゲームにないキャラクターだと？」
「そのようです」
「しかし、ゲームの規則には従っている。どういうことなんだろう？」
「外部からの干渉か、あるいは最初から組み込まれていた存在がゲームの影響を受けたのか、いずれにせよ簡単に判断はできません」

「そうか……。でも、あれを消してしまわない限り、面倒で仕方ないな。あれがゲームの規則に従ってくれているなら、ゲームとしてあれを倒してしまおう」

阿児は、ころねに指示を出す。

「NPCの男たちで部隊を編成、そして、城壁が崩れた瞬間が攻撃のチャンスだ。あの怪物が必ず待ち構えている前に」

ころねはうなずいた。

「仰せの通りに」

そして、ころねはオークやゴブリンの軍勢に指示をするが、そこに噛みついたのは天子である。

「きぃー！　その役目はわたくしがやりたかったのに！」

「そうでしたか。残念でしたね」

ころねは淡々としたものだ。天子はあからさまにむくれる。

「……役職を譲るとか、そういう選択肢はありませんの？」

「クラスチェンジにはチケットが必要です。チケットはオンラインストアで購入できます」

機械的に答えるころねである。

「……そういう商売のやり口とは知りませんでしたわ」

天子はぼやいた。

と、怪物が激しく暴れはじめた。城壁を破ろうとしていたのが、規則にもがき、その体を闇雲に城壁へぶつけはじめた。部下たちの攻撃が功を奏しているのだ。

「うまくやってくれていますね。時々、彼が持っている武器の凄まじい威力のようです」
ころねが戦場の一角を見つめつつ、怪物の足下を指差した。
大剣を振り回しつつ、まり『イビルスレイヤー』は凄まじい魔剣のようだった。巨大な怪物が彼の攻撃を避けるため、も
がき、腕の攻撃をかわし避けるためだけに使われている。
城壁が崩れてこちらに逃れようとする怪物もがきの刹那を視たのは、ころねが軍隊を組み合わせ終えたとこ
ろだった。外部の岩が砕ける、びきり、という音をきっかけに、城壁内の兵たちの方へ向かって倒れはじめたの
だ。
「崩れますわよ！」
[illegible]の警告の声をあげた。
それを聞いた兵たちに命じる。
「軍勢を突入させるんだ。城壁に上がった奴は全員仕上げる。崩れてくる岩に構わず怪物にしがみつかせろ。立ち上がってく
し続けられるように」
その命令通り兵と魔獣たちは、崩れてくる岩の雨のように降り注ぎ、城壁そのものが倒れてくる中、一気に突入す
んだ。もちろん、その過程でかなりの数のオークと兵士が岩の下敷きになり、無惨な姿をさらす。
「ああっ……！　この冷酷な振る舞い！　憧れますわ！」
[illegible]が身もだえする。

いくら人間ではないとはいえ、見た目はリアルな亜人種族である。人間でもないのにそれを犠牲にする戦術を選択できる
あたり、人間の尋常な精神ではない。
その戦術は図に当たった。倒れた怪物たちが立ち上がったのだが、その身体は血を吸うダニか何かのようにオーク兵たちが
りついていた。怪物は咆哮をあげて纏わり付くオーク兵たちを振り払おうと自らの身体を殴りつけた。
とされる兵も多いが、それでもしがみついたまま何度も突き刺される剣が怪物へ継続したダメージを与え
た。
そこに城壁が崩れる間、後方へ避難していた者たちが襲いかかった。彼女の『イビルスレイヤー』がさらに甚大
ダメージを怪物へ与える。
「待ちますわね」
天子が余裕の笑みを浮かべた。
「何もしていないのに余裕ですね」
こころねが言うが、天子は意にも介さない。
「わたくし、眷属の心の支えになっておりますもの」
が、そう言った天子の笑顔が、凍り付いた。『イビルスレイヤー』の刃から逃れるためか、死を悟って一か八
の攻撃に出たのか、怪物が大きく伸び上がり、上空へ絶叫にも似た叫び声を放つと、一気に天子に向かって突進を開始したのである。
「[illegible]」
天子が悲鳴をあげる。

阿比人は肩を竦めた。

「大丈夫(だいじょうぶ)、母さんに突き込まれたことだってあ……」

そう言った阿比人だったが、その言葉を最後まで発することはできなかった。

触手の一撃が阿比人を横なぎに襲った。それを受け流そうとした阿比人の動きは無駄(むだ)だった。触手は阿比人の体に巻き付くように動き、阿比人の体を

ように吹(ふ)き飛(と)ばしていた。

十メートル以上も阿比人の体は吹き飛び、岩肌(いわはだ)にその身体を打ち付けられてうめく。

「うぐっ……！」

阿比人の体はほとんど岩場に埋(う)め込まれたようになった。

「阿比人！」

千年子は悲鳴のような声をあげるが、阿比人はそれに軽く手を動かして答えた。

「大丈夫。それに、どうやらこの攻撃はゲームの範疇(はんちゅう)を越(こ)えるものじゃない。直撃を喰わなければゲーム

にもしないしね」

阿比人の言葉が、そこに慌てた声が被(かぶ)さってくる。後方から怪物を斬りつけていた紗綾のものだった。

「それは違うぞ！　どうやら、こいつが目的にしているのは人類の命だけでなく、城あるという

一杯(はい)だ！　そいつを手に入れれば、何が起こるかわからん！　もしかしたら世界全体にすら影響が及(およ)ぶかもし

れん！　ゲームとはいえ、僕たちが負けたら、怪物を止める手段がないかもしれない！」

[illegible]阿見丸は軽[illegible]驚きを覚える。が、少し考えてみればどうやらその[illegible]は[illegible]あることにも気付い
た
──そういえば、先のゲームから変更されたルールが[illegible]った。そして、魔王[illegible]手に入れる、という
が、ゲーム内で魔王[illegible]はずの僕がそれを手に入れても何も起こらなかった……。僕なく、こいつが魔王とし
たら……！
「くっ……」
阿見丸も立ち上がり、僕の城から立ち去ろうとする。が、[illegible]阿見丸に向かって[illegible]試みようとしていた
「[illegible]魔法を……」
阿見丸は自らに[illegible]使おうとして、それが使えないことに気付いた
「[illegible]であるかわりに[illegible]できないんだよ！　[illegible]使っても魔力が減らない[illegible]になっているから！」
[illegible]
「それは……まずい」
阿見丸は死を覚悟した
[illegible]もかかわらず、[illegible]その[illegible]動きを止めることはなかった。[illegible]阿見丸[illegible]防御魔法を使おうと
するが、先程喰らったダメージの[illegible]らするに、[illegible]かないだろう。
「しまった……」

阿寒湖は自分の慢心を呪った。状況やルールがわからずに突っ込んでしまって、それでもなんとかなると
していたわけだ。
触手が迫ってくる。
阿寒湖は思わず目を閉じた。
巨大な岩石のようなもの が激しくぶつかる音が響いた。
「ゲームで良かった。次からはきちんと……」
そうつぶやいた阿寒湖だったが、痛みも何もなく、ただ何かが体に絡みついている感触があるだけ
ということに気づいた。
――ん？ ゲームの中でも痛みはあったはずだけど……。
そして、目を開けて、どうやら自分がまだゲームの中にいることに気づいた。
「……って、あれ？」
しかも、宙に浮いている。空中戦のあるこのゲームでは飛行状態は御法度である。人は空を飛べない仕様。
――ということは……。
「もう、しょうがないなぁ。あーちゃんはあたしがいないと何もできないね」
けながたしなめるように言った。
「あそこに命令するように言ったのに……でも、助かったよ」

阿弥陀丸はほっとして言った。けーなは自分を横抱(よこだ)きにして空を飛んでいた。この世界ではけーなだけがルールを無視でき

るのだということを阿弥陀丸は思い出す。

「でも危険だから、やっぱり自分は帰るべきだよ」

そう言って、阿弥陀丸は下を見る。

岩壁(がんぺき)に頭から突っ込んだ怪物がそこにいる。

「さあ、降ろしてくれ。あいつを倒さないと」

が、けーなは首を横に振った。

「駄目だよ。あーちゃんはそうやって一番前でやろうとするのが悪いところだよ。あいつは、あーちゃん

だけ狙っているんでしょ？ それなら、みんなに指示を出して、その通りにしてもらった方がいい

よ」

けーなのその言葉は、先程(さきほど)行き当たりばったりで失敗した自分に鋭(するど)く突き刺さった。

「確かに……。単独で決着をつけようとした結果がこれだからな……」

阿弥陀丸はため息をつき、意を決したように首を振ると、下に向かって呼びかけた。

「先輩(せんぱい)！ 合図をしたらあいつの視界を奪(うば)って！」

「はい！ 阿弥陀丸」

千手は一言でうなずいた。

「後の二人は、目の視界を奪われた怪物の足を攻撃して、魔法を決めさせて！」

「わかった！」

綺羽と凌が目配せをしあってうなずいてから答える。

「ころねは、出来た隙を使って化物の口を開けてくれ！」

「了解(りょうかい)」

ころねが言った次の瞬間、凪子が容器を出した。

「準備完了」

「了解しましたわ！」

凪子が答える。そして、立ち上がり、勢いで立ち直ろうとする化物に、目くらましの煙を発生させる薬品を投げかける。

完全に立ち上がる前に使ったため、薬瓶(びん)は見事化物の顔に命中し、白い煙(けむり)に巻(ま)かれた化物。それでも立ち上がって、凪子の方へ

った。視界が無くなる前に記憶(きおく)していた凪子の位置へ、とりあえず跳(と)ぼうというつもりであろう。

しかし、その瞬間化物の後ろ足に綺羽と凌が斬りかかった。伸び上がった化物。力を入れた瞬間に足を斬られ、体勢を崩す。

「ころね！」

凪子が叫ぶ。ころねは動いた。まだ化物の体にとりついていた左手を首もとに移動させると、そこに向かって雷(かみなり)

の魔法を撃ち込んだのである。出来た体全体を電流が駆け抜けてのけぞる。それは、出来た突き刺した剣を通って体全体に電気を流し込まれた化物が

った。

痛みにうめくような咆哮とともに、化物は空に向かって顎(あご)——触角に隠(かく)された中——を突き上げた。





「けな！」
間抜けなに上空に飛んでもらい、そこで自分の体を落下させる。
そして、落ちながらゲームで最上の攻撃力を持つ攻撃魔法を怪物の口に向けて放った。
「『フォールアウト』！」
口の中で核爆発を起こされた怪物は、その蛸の頭部から凄まじい熱と光を放ちつつ、もんどりうって崩れ落ちた。
。
それをマナスクリーンで見ていたリリィは、崩れ落ちていく怪物に快哉を叫んだ。
「はっはぁ！　どうやらあんたの負けだ。その魔物の親玉やらは崩れたぞ！」
しかし、２Ｖは表情を変えなかった。
リリィの笑顔が段々と消えていく。２Ｖの顔は、明らかに企みがあった。
「……何を考えている」
「いやね、終わってない。終わっちゃいないんだよ」
「何が終わっていないって……」
「あの怪物は、私が召喚させた魔王。つまり異世界から日本に封印された魔物の親玉と思っているとしたら、相当の間抜けだ」
２Ｖはくすくすと笑う

リリィはぎょっとした。

「それじゃあ、まだあの中に封印された魔術師がいる……。そして、それを目覚めさせる条件。その解除とでも言うのか？」

「その通り……解除。それは、魔術師の記憶回路が保存されたプログラムチップだ。そいつがゲームのルールに取り込まれて

となった。だが、そいつこそ、実は魔術師の一部だったというわけだ」

「すると……貴様が怪物を出現させたのは……！」

「はったりだ。本来の魔法から目をそらすためのね。そして、魔術師の一部こそが私の望みだ。今の魔法を封印する作戦のもの

推(お)し進めるというのが当初の計画だったが、魔術師の記憶が消えたことに気づいてからは、計画を変更した。彼(かれ)らが魔術師を連れてこち

らに戻ってくるようにね。もちろん、その過程で誰(だれ)が死のうが問題じゃなかった」

「な……なんだと……では、魔術師というのは……」

そう言いかけたリリィは、言葉を失った。

マナスクリーンに映し出された向こう側の光景は、まだ続いていたからだ。

。

「これで、ゲームは終わりというわけか」

何も見えない怪物の本体は沈黙し、さらにそれが自爆回路によって消え去るのを待った。

歩み寄ってきた波沙が、阿久児に頭を下げた。
「済まなかったね。面倒なことに巻き込んでしまったよ」
「君が今回の事件の首謀者〈しゅぼうしゃ〉か」
阿久児は、探る〈さぐ〉ような目を向けた。それを仕方のないことだと受け止めているのか、申し訳なさそうに波沙が首を振る。
「首謀者ではない、とは言えないけどねぇ。関係のない人間を巻き込んだのは私だからね。だが、これであと陣営は2Vだけになったよ」
「2V？　あのCIMO 8〈サイモエイト〉の？」
阿久児が問い返す。
波沙がうなずいた。
「そうだよ。これは2Vの計画だったんだ。私の計画でもある。だが、言い訳するわけじゃないけれど、私は、魔王を封印するという企み自体を知らなかったんだ。だから、途中でそれを知って、協力する気にならなくなってね。ゲームのルールを組み込むことで、内部の人間が殺されぬようにし、君に賭けようと思ったんだ」
「……そういうことなら、なんにせよ助けられたと思うべきなんだろうね。詫〈わ〉びることはない。感謝しているよ。ところで、この中年の身体を喰らいた魔王というのは？」
阿久児は、まだ転がっている中年の死体に向かって、首を振った。
「この島で忘れられた魔導兵器、メギスの神。防御〈ぼうぎょ〉用に開発されていたものだった。ところが、そこには古代魔法が封印されていた、というわけ。いや、それを封印するための魔法陣が刻まれていたが、そのことが忘れ去られていたら

しいというべきかな」
渉が説明した。
「なるほど……[illegible]。僕としては にわかには信じがたいけれど 安全にゲームから出られるなら それを確かめる術(すべ)はあるだろうね ２Ｖが敵であることがわかれば 向こうに戻りさえすれば
あるだろう。ところで 慎重な人は 君の他にもう一人いるみたいだけれど」
阿見は渉の後ろに立っていたけい すに目を向けた。
「彼女はこの[illegible]らいたそうだ。[illegible]ないようにって守っていたと言っている」
渉が説明し けい すを呼んだ。
と その時ゲームにおける[illegible]来 [illegible]消えた。それと同時 けなに感じるものがあっ
らしい。彼女がいきなり声をあげる。
「待て！」
けい すに歩み寄ろうとしていた阿見は足を止めて振り返る。
「どうしたの？」
「まだ…… 嫌な感じが消えていないんだよ。まだ あちゃんに似ているけど とっても嫌な感じがす
るよ」
けなが震えながら言った。
「じゃあ これが魔王じゃなかった……。そういうことか」

阿須加が上空の物体があった方角を指さす。

「そうだと思う……。でも近くにいるのは間違いないよ……」

けーながうなずいた。

「となると、ゲームのルールで倒（たお）せたのも当然。では、どうするべきかな」

阿須加が周囲を見回しながら言った。と、天野が口を開く。

「魔王がいたとしても、本拠地の城があるのでしょう？　そいつがそれを手に入れなければ問題ない。ということは、ここでゲームを終わらせればいいのでは？」

天野が提案した。

「いや……生き残った人が全部手に入れないとゲームは終わらないよ。それに、ここまでゲームに則ってクリアを目指したのは、ゲームに従わない者が問答無用であった場合、その者から受けた攻撃の実体がダメージを与（あた）えるからだ

渋谷が言った。そして、阿須加の方を見て、こうもつけ加える。

「2Vは、おそらくここに何が封（ふう）じられているか知っていた気配がある。その情報を利用して、現実よりも強

ない。君を殺そうと企んだのだろう」

「わかった。いずれにせよ、僕の勝つ形でゲームをクリアすればいいわけだね。だけど、2Vが

この世の中にまだいる。それが君かもしれない。申し訳ないが、君たちを完全に信用するわけにはいかないの

だけれど」

阿須加の方に、渋谷が顔を見返した。

と、綱手が慌てて間に割って入った。

「ちょっと待て、その……私は彼と一緒だった。彼は相手にしてもいいと思うぞ」

だが、波佐見は黙然と首を横に振った。

「いや、相手にされなくて当然だよ。ここは素直に非難を甘受するというのは先にも言った通りだしね。だけど、もう会っていないということはない。私は君とゲームをするという約束を、こんな形で果たせたことに驚いているんだから」

波佐見は阿見にウィンクしてみせた。

阿見は、すぐにそのウィンクの理由に気付き、一瞬驚きに目を見開いた後、うなずいた。

「ああ、こちらでは見かけが違うのか。君がルールを作ったのだからね」

「そういうことだよ。だけど、相手にされないのは仕方がないね。元凶は私だし、いろいろと無茶なところもあったと、今ならわかるよ。私は肉体というものを軽視していたんだね。肉体を使ったコミュニケーション、それが大事ということを、彼女が気付かせてくれたんだ。彼女は、とても気高くて優しい人だ」

波佐見は綱手に笑いかけた。

綱手は慌てて首を振る。

「いや、よしてくれ。そんなことはない……」

そう返答した綾乃だったが、そう言いながらも阿九斗の表情をうかがわずにはいられなかった。まるで
きりだった時、何かあったような言いぐさである。いや、あったには違いないが、付き合ってい
るとか、そういうことはない。それでも「好きになってくれ」などと告白はしたが、
とはいえ、何かあった関係は濃厚なのだから、こうなると、それを察した阿九斗がどんな顔をするかは
とても気になる。できれば、衝撃を受けて欲しい、というのが綾乃の正直な気持ちだった。
だが……。
「そうだね。自由の身に戻ったら、一度彼女と付き合うといい」
阿九斗はそう言った。
綾乃は視界が真っ暗になったような心持ちになり、身体をふらつかせた。
「と……大丈夫かい？」
綾乃の身体を咄嗟に抱き留めた。
皆の視線が綾乃に集まる。
その瞬間だった。
素早く動いたのはけいすであった。身体を低くして転がるように前進するや、里美の愛刀『イビルスレイヤー』を抜き
い取り、阿九斗に向かって突進していた。
その刃の切っ先は阿九斗の喉を的確に狙っていた。けいすの実力もあいまって、凄まじい気勢である。
しかし、阿九斗はその行動を事前に予測していた。

「そうはいかない。もちろん、この場のゲームに従っていないのは君だけだと気づいていたからわ
他の人間に注意を逸らしてはいなかった。突き出される二本の剣を横に飛んでかわすと、その拳をけいすの腹に打ち込
でいる。
「ぐっ！」
けいすは悶絶して倒れた。

。

「これ以上まだ先があるとは言わないよな……」
リリィは拳をパキパキと鳴らした。
これがおそらくは最後の見せ場だったはずだ。
「あのけいすってのが魔王だったかは、まぁ別に殺そうって試みは終わりを告げたわけだ。そろそ
ろこっちも様子を見るのに時間がかかっていいかな？　もう我慢の限界なんだよ」
「いやいや……」
しかし、２Ｖはまだ余裕の表情である。
「まだ先があるんだよ。残念ながら。私の望みは、まだ潰えていない。私の施した仕掛けはまだた
る……。それに、ゼロはまだ健在だ」

「ゼロ……？　それが貴方の望みなの？」

「そうだよ。ゼロこそが私の望みを叶えてくれる」

「望みだぁ？　望みってのは何だ？」

「支配……だよ。私はあらゆるものを支配したいのさ。そして、そいつを叶えてくれる理想の存在、それがゼロだ。一番最初の……つまり、プロトタイプとして作られた魔人。ごく初期の神々の神を支配する存在をも破壊するのに充分な能力を持って生み出された」

「な、何を言ってる……。そいつが何様だってんだよ！」

「わからないのか？　そいつは、神々をも自由に操って狂わせることができるのさ。最初の神、つまり現在のこの世界を創り出した神と同じ能力を持った、似たようなものだからね」

2Vの言葉にリリィは衝撃を受けた。

「な……そんな奴を復活させようとしているのか！」

「ああ、見ておくといい。まだ先があるんだよ。しかも、面白い事になるぜ……！」

2Vは哄笑した。

。

「ゲームに従っていないのは、この者だけ……」

倒れたけいすを見上げながら、河見が言った。
そして、千寿子はけいすに向かって突き出すと、魔法を放った。
「ライトニング」
ゲームの内での電撃呪文だった。それはけいすの背中に電光を落とした。と、服の中から一匹の蛇が這いだしてき
て、絶命し、灰になって消えた。
「この蛇は……」
千寿子が呪文を口にすると、それに法子が答えた。
「こちらに来た2Vは、腕輪付けでした。ということは、蛇になっていたとしても……」
「2Vは姿形を使って行動するんですのよ。周囲を操ることもできるのかもしれませんわね」
千寿子が言うと、法子がなるほど、と手を叩いた。
「けいすは周囲を選ぼうからね。それなら、操縦は不可能ではないということかな」
「となると、これで無事解決になった、かな」
河見と法子が見守る中
法子がうなずいた。
「そうだろうね。千寿子がいなくなったせいで、機能が一時停止しているようだけれど、けいすを目覚めさせて新
こう。もっとも、あまり詳しいことは知らないみたいだけれどね。それからゆっくりと
ゲームをクリアすればいい」

「なるほど。それなら……」

阿刀がそう言ってけいすに向かってかがみ込もうとした時のことだった。

「危ない！」

けなが叫び、阿刀を突き飛ばした。

「え？」

阿刀は戸惑い、そして、腕を掴まれた冷たい感触に関して持つ。

「きゃあああ！」

「阿刀さん！」

口から悲鳴があがる。

「な……」

阿刀は腹に深々と『イビルスレイヤー』が突き刺さっていることに気づいた。

ゲームで受けるダメージとは違う感触が阿刀の身体を震わせる。腹は冷たいのに、そこに当たった手は熱く感じていた。

「どうして……？」

「剣が……剣が勝手に動きましたわ！」

千夜が叫ぶ。

「確かにそうでした。剣が飛びました。まさにこの機会を狙っていたかのように」

ころねがそれを追認し、身構える。

「じゃあ、こいつが……この剣の能力……？　いや、いや、今はとにかく回復を……。僕の中のマナを使って……」

いつもしていたようにダメージを回復しようとした紅丸だったが、それは不可能だった。力を入れるたびの傷が拡がった。

「あーちゃん！」

駆け寄ってきたけーながゲームの回復魔法を使うが、それは今の紅丸の傷にはまるで効果がなかった。

「これは、半分死の手前の状態に戻すしかありません。あちらで治療を」

ころねが静かに言い、杖を構えた。

「な、何を……」

不安と困惑の声をあげるが、それに構わずころねは魔法の弾丸を放った。

それは見事に紅丸の頭を撃ち抜いた。

紅丸の体はびくりと痙攣し、その目を閉じた。これによってゲーム内では死んだことになった紅丸の体。そのを塵と変えた。

そして、そこには『イビルスレイヤー』が残された。

皆、驚きに目を見開く。

紅丸の腹を突き刺していた剣も、それと同時に宙に浮いていた。

「いけませんわ！　偽物けいすを操ったのも目くらまし……！　本物の[illegible]剣を装（よそお）っていたのだとした

ら、誰かがそれを持って聖剣を取り出す……！　そういう仕組みでしたのね！」

「気をつけろ、何があるかわからない……！」

悪巧（わるだく）みには賢（かしこ）い二人が声をあげる。

各々の警告を発した。

「しかし、剣は限定的な力しかないのかもしれない。自動の剣は近距離（きんきょり）しか飛ばないのかも……。そう

でなければ誰かに運ばれるまで待っていた理由がない」

彼女が言った。

「聖剣は城にある。危険だが、そちらに剣が向かうのを阻止（そし）すればいいんだな！」

彼は城の方を向いた

が……。

「あ……聖剣は。しまった……大事なものだと思ったから持って来なかった」

けながらローブの内側から聖剣を取り出した。

それは金色に輝（かがや）く小さなカップの姿をしていた。

「お馬鹿（ばか）」

天子が怒鳴（どな）る。が、すでに遅かった。『イビルスレイヤー』ゼロはけなに向けて飛翔（ひしょう）、それをかわした

けなだったが、ゼロが聖剣に接触（せっしょく）するのを防ぐことはできなかった。

双剣が触れた瞬間、その双方が弾けて、細い霧状に変化する。
「あ！」
けいなが驚きの声をあげる。
「しまった……。魔法陣の効果が何かはわからない……。でも、これでゲームはクリアされてしまった。
たちも元の世界に戻されてしまう……！」
激しく声をあげた。
「そ、それじゃあ、現実世界で魔法陣が発動するということに……！」
綺羅がけいすの身体を起こす。手を握り続けていたのを思い出させ、問う。
「教えてくれ。魔法陣が発動すると、何が起るんだ……？」
と、けいすが扇動されて口を開いた。
「ゼロは……」
けいすがその言葉をしゃべり終える前に、ゲームは終了した。

5　悪夢のはじまり

ヒロシの背中に嫌な感覚があった。

それが何なのかわからず、ヒロシは周囲を見回した。そして、ほどなくそれが街の様子のせいだと気づく。

リリィに言われた通り、マンションの一階から見下ろしている、当然、廊下の外の景色も目に入っていたのだが、その見下ろす街で小さな異変が起きていたことが、違和感となっていたのだ。

街のあちこちから小さな破壊の音があがっている。土煙が流れずに止まっていた。

「なんだ……？　まさか危険なことが……」

ヒロシは、上から聞こえてくる音に空を見上げた。マンションの向こうの街に、飛行機が落下していくのが見えた。

「……な！」

飛行機は地面に激突し、爆発炎上する。数軒の家を巻き込んだようだった。

言うまでもなく、大惨事である。一部はこれまでヒロシも見たことがない規模の被害が起きた。

「う、うわ……」

ヒロシはリリィの言いつけを守るべきか、それともリリィを追うべきか迷ったが、マンションの住人たちが次々ドアを開けて出てきたのを見て、リリィの向かった部屋へ急いだ。

ドアを開けて目に飛び込んできた光景は、狭い部屋の中で数体の人形と格闘する保安係の姿だった。

「来たのなら待ってた！」

リリィが叫んだ。

「な、一体何を……！」

ヒロシのその声に答えたのは、割って入った思いの外、人形に抱きかかえられていた顔色の悪い痩せた女の子であった。

「私が勝った、ということさ」

その女の子が2Vであることが、ヒロシにも理解できた。

しかし理解できなかったのは、リリィが人形に手こずっていることだ。

「長官、早く、そんなのぶったおしてください！」

ヒロシが言ったが、リリィが殴りつける人形は倒しても倒しても立ち上がってくる。

「こいつら、前の奴と違う……！　妙に強い……」

リリィは四方から襲いかかってくる人形を次々と殴り飛ばしているのだが、殴られる人形は、どうやら身体を破壊される関節部を絶妙に外してリリィの拳を受けているようだった。

「2V！　貴様、そこまで戦闘慣れはしていなかっただろうが！」

リリィが2Vに向かって吼えると、それを2Vは笑い飛ばした。
「はん！ そうじゃないさ。気づいていないね、そいつらは。私が操っているんじゃない」
「何と？」
「どうだろうね。私以外に人形を操る者がいたとしたら？ いや、その数段上の人間さえも操る者がいたとしたら？」
「やかましい！ そんな奴がいるはずが……。いや……、まさか、それが……」
リリィは絶句する。
「ははは！ そのまさかさ！ だから言っておいたじゃないか！ ゼロ……、最初の魔術人形と
べてを操ることができる！ すべての自律型魔術人形はね！ ゼロとは魔術人形に刻印されたプログラムのこと
さ。それが最初の魔術人形、そして、私はすでにゼロにボディを与えた！ 私はゼロに命令できる立場にあるの
さ！」
2Vの笑い声が響いた。
それを聞いたヒロシの顔色が変わる。
「ということは、まさかの外部干渉……！」
「何と？ 外部がどうなっているって？」
リリィが人形を殴りながら振り返る。
「外部……。事件が始まって、飛行ボスが落ちて……。そこかしこから何かが操る者が……」
ヒロシが答えると、リリィは凄まじい形相で2Vに目を戻した。

「てめぇ、周りの人間を使って、俺の攻撃を防ぎやがったな……！」
「ははは！　私の意志というわけじゃないさ！　私が命令できるとはいえ、ゼロはいささか狂っているからね！　では、この場は退かせてもらう」
「待て……！」
「待てと言われて待つ馬鹿はいない……」
2Vは少女に抱かれたままベランダから外へ飛び出そうとしたが、ふと振り返った。
「そうだ、私は彼らの中の生徒一人を人質にしている、と君を脅したが、ありゃあ嘘だ。そういう形だから手を出すことはできない。憶えておくといい」
リリィは血相を変えた。
「てめぇ！　ふざけるな！　舐めやがって！　待てや、こらぁ！」
「もう二度と会いたくないね。じゃあ、せいぜい生き残るように頑張ってくれ。いや、生き残れないいいかな。ひょっとしたら、異世界人の支配する世の中になってしまうかもしれないんだからね」
そして2Vを抱いた少女は、窓の向こうに消えた。
「2Vぃいい！」
リリィは叫ぶが、周囲を生徒に囲まれていて動くに動けない。苦しげな顔でヒロシを振り返る。
「なんとかしろ！　てめぇ、男だろ！」
「だ、だけど……」

ヒロシはふらふらと下がる。と、巨大化した体がヒロシの方へ迫ってきた。

「ややば……」

逃げかけるヒロシだったが、その時、背中の部分がちくりと痛みのような感覚がはしったことに気づいた。

「えっ……？」

思わず背中を見る。おもちゃのようにはめていたブレスレットである。それは、すでに機能を失ったヒーロースーツを呼び出すための装置。

——ど、どうして……。まさか、こいつが使えるようになったっていうのか……！

「ブ……ブレイブ」

ヒロシは起動ワードをつぶやいていた。

○

阿久斗が現れたのは、最初に居た校舎だった。

その血まみれの姿に、先に戻っていた生徒たちが驚

「うわっ！」

「なんで血まみれに……」

阿見を憎らしく思っている生徒たちだが、腹を刺された姿とあっては無視するわけにはいかなかった。
「斎藤さん本人が妹じゃないか？」
「嘘だろ……化け物みたいな奴だったじゃないか……」
校庭がざわつく。
と、わずかのタイムラグがあって、けなたちが斎藤を凝視する。
「あちゃん！」
けなは真っ先に阿見先輩に駆け寄り、その頭を抱きかかえた。
「こちらに戻ってから、体内のマナによる治癒が働くようにはなったらしい……。、多分大丈夫だ」
阿見先輩は苦しげな声をあげた。
「斎藤さん……こちらでなら、異能の力を持っている斎藤さんも使えるでしょう？」
不二子が周囲を見回し、元居た場所に出てくるのか、最後に残っていた者のうち、生き残っているのは阿見、けな、絢子、ころねだけだ。
けなは阿見先輩に声をかけ続けている。
絢子は阿見先輩の傍で、顔を青くしてうろたえている。
そして、ころねは立ち尽くしていた。
不二子がころねに呼びかけた。
「ころねさん？　聞いています？　斎藤さん」

いつも通り、ころねは無視を装った、が、不二子が呼びかけに気づいたらしく、いつも持っているポシェットに手を突っ込む。

「そうですわ、早く浄化ポットをお出しになって」

不二子がころねに向いていた目を戻す。

「さぁ、今から浄化を……」

じゃきっ。

不穏な音が不二子の背後で響く。

「じゃ、き？」

不二子が振り返った。

ころねが、腰だめに武器を構えていた。マナを撃ち出す武器である。

「ちょ、それは浄化ポットじゃありませんわよ……」

不二子がそう言ったが、明らかにそれをころねは聞いていなかった。

「確かに……わかりにくいですけれど、今度ばかりは……」

ころねは銃口を不二子に向けていた。

「危ない！」

不二子が叫び、マナ球をころねに向けて放った。しかし、ころねはそれに怯むことなく、銃を発射する。

「な……[illegible]……！」

マナの球が放たれた音と、不知火の声に気づいた綱手が振り返ると、ころねの異変に気づいたが、やはり一瞬遅かった。

綱手の掌から放たれた紫色の光が身体を貫いた。

「ぐっ！」

死神がうめく。

「あちゃん！」

「丸九」

けなとの綱手が悲鳴を上げる。

ころねは不知火のマナ球をもろに顔面に喰らったが、身体をかしがせただけで、再び綱手に狙いを定めた。

「な、何をする、ころね！」

「やめて、ころねちゃん！」

綱手とけなは叫ぶ。

しかし、ころねの表情は変わらなかった。ころねの背後から見下ろす街、いくつもの火の手が上がりはじめているのが見えた。



あとがき

毎度ありがとうございます。水城正太郎です。

七巻目ございます。新章開始という感じでお届けしています。続き物です。前後編になるか、まだ先があるかは今のところまだ決めておりません。キャラクターの思うままに進める感も楽しいかと思いますので、作者としても引っ張り回されながらやっていくことにいたします。連載のような感じでお楽しみいただければ幸いです。

他メディアでの展開、確定させていただいたのはCDドラマの第二弾。株式会社トニクス様より[illegible]す。今回から登場のキャラクターではリリィ白石に神田朱未様、昭屋栄子には佐藤聡美様とキャスティングしていただきました。[illegible]皆様はご存じの通り、[illegible]ああいう存在として、どのようなものになるか、私としても楽しみにしております。

そして、伊藤宗一さんのコミック版。秋田書店様より[illegible]発売中です。チャンピオンRED様で好評連載中です。少し打ち合わせさせていただいた時、聞かせていただいた先の展開が「ええっ！」そうなるのか！　すげえ！　というものになっております。収束点は同じだけれど、ルートはいろいろと違うという感じになっているので、作品既読の方なども是非

さて、雑談など。
この間もつ鍋をいただいたのです。非常においしかったのですが、やはり気になるのが
もつを飲み込むタイミング。おいらは絶対に早い自信があるのです。たぶん標準の噛
の四分の一くらいしかない。しかし、早いのを嫌ってたくさん噛もうとすると、今度はいつまでも噛
でいることになるわけです。「白もつは噛めない！」とか。そういう標準があると、迷わずに済むので
すが。もしくは「白もつ」を確実に噛み切る方法も可
焼きも、鍋にかかわらず、全国の白もつマニアの皆さんの回答をこっそりお待ちしております。

最後になりますが、謝辞を。
イラストの一[illegible]さん。「引っ越し祝い」に伺った際はありがとうございました。また今度ゆっくり
と。
担当のO橋さん、今回の〆切りはちょっとしか遅れなかったことで成長したような気がしますが、基本的に内容は
の気のせいなので、今後もスピードアップを心がけて生きていきます。
そしてドラマCDをはじめ関係各社様も、感謝を。まだまだ頑張ってまいります。よろしくお
願いいたします。

さて、建国の内幕、第六巻の内容も続々ですよ。まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151－0053
東京都渋谷区代々木２－15－８
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
[illegible]

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
最近テレビでビートきよし師匠が出演なさっているのを見てびっくり。若い方はご存じないかもしれませんが、ビートたけしの相方でツッコミ役。加えて人物像をあえて説明するならば「普通の人」です。面白い人なのかって？　面白いわけが……。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜一言＞
今後も色々忙しくなりそうですが、必死のパッチで頑張ります。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT 7

2009年9月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8